

三 繭の種類

湖北の産繭は大部分黃繭種で占め、白繭は僅に全産額の一割に過ぎぬ。殊に白繭は漢口の上流、漢陽附近に多く出廻るが、繭質は黝色を帯びて未だ問題視されない。然し均しく黃繭種と言つても、黃州産は多くは三眠蠶にして、之と同様河溶産も四川系の三眠蠶金黃繭を混へて居る。然るに湖北繭の代表とも言ふべき漢水流域の産繭は四眠蠶にして紅桃色を呈し、他省に見られぬ特色を持つて居る。此種の繭は四川及山東産に比し概して大粒なるが、其の繭形繭色及粒の大小等様々である。即ち表面の繭色は鮮麗なる紅桃色を呈するもの、金黄色のもの或は淡黄のもの等を相混へ、また形から言へば長圓卵圓、楕形及瓢形等にして、その形状により漢水流域の産繭に就き地方民は次のやうな種別をして居る。

大頭寶 著しく大粒にして腰部太く、兩端は細くなり形状は整へるも繭層比較的薄き憾がある。
麻滓潭 附近に最も多い。
圓頭寶 繭形前者より稍小に楕圓形を呈し、繭層緊りて肉持ち良好、漢水流域には此種の繭が大部分を占めて居る。
老鴉嘴 繭形は楔状に一端尖りその形状も鳥の嘴に似たるを以て此名あり、卵圓形の繭と後述細腰帶の交雜によつて生ずといふ。絲量解舒共概ね良好にして脈旺、分水嘴地方に多い。
細腰帶 繭形特に細長く中央部に幾分隘目を持ち此種は白繭に多く存在するを見る。

金剛鑽 即ちダイヤモンドの支那名にして繭形は前記老鴉嘴より更に細長く尖端著しく細くなれるを特徴とする。

是等の繭は混然市場に出廻るが、その最も多きは**大頭寶**、**圓頭寶**及**老鴉嘴**の三者にして**細腰帶**及**金剛鑽**の混入割合は少量である。同時に繭色は五色十光の觀を呈し雜駁なるを免れぬ。而して産繭は漢水流域産、河溶産及黃州産の三者に分れるが、其の品質に就き先年上田蠶絲學校の試験による品質検査よりその主なる點を摘出すると左表の如し。

繭色	繭形	仙桃鎮産		河溶産		黃州産	
		長徑	短徑	長徑	短徑	長徑	短徑
薄紅色最も多し、淡黃薄紅色之に次ぎ微に白色黄色を混す	卵圓形に多少の蓮心形を混へ大小不齊甚し	一・一五	〇・九一〇・七二	一・三〇	〇・九〇一〇・八〇	一・一〇	一・〇〇一〇・八四
		〇・六八	〇・四八一〇・四二	〇・五二	〇・五二一〇・四〇	〇・六二	〇・五〇一〇・四八
淡黄色を主とし淡黃薄桃色を混ず若干白色黄色あり	卵圓に蓮心を著しく混ず大小不齊の度前者より優る	〇・六八	〇・五二一〇・四六	〇・五六	〇・五四一〇・四〇	〇・六二	〇・五二一〇・四六
		(大粒)	(小粒)	(大粒)	(小粒)	(大粒)	(小粒)
對一升顆數及重量		三一七	二八・五	二七七	二八・八	二三三	二九・一
(大粒)		(大粒)	(小粒)	(大粒)	(小粒)	(大粒)	(小粒)
絲長平均		四五五	三八三	五一〇	四一二	五三七	三八三
絲量平均		〇・〇九五五	〇・〇七五〇	〇・一一三〇	〇・〇八八〇	〇・〇九四五	〇・一一〇二五

四 購繭機關

生繭の買付は矢張り繭行の手を経るが、然し繭行といふも蘇浙の如き統制ある免許制度によるものに非ずして之を自由に設置するは何人も防げない。それで産繭地には大抵雜穀土絲其他の土産物を取扱ふ問屋(某行)が存在して居る。この問屋の一部に乾繭場を設けて問屋を購繭所に充てるのが即ち繭行であつて、購繭者が地代を拂ひ、自ら費用を投じて乾繭室を建築するものと、問屋に資金を前貸して乾繭室を建築せしめ無利子年賦拂によつて貸付金償還後は之を問屋の所有にするものがある。

然し孰にしても購繭は問屋をしてその局に當らしむるが故に買場の使用料乾燥人夫、問屋使用人の給料乃至購繭出張員の食費等の諸費用を含みたる問屋手数料として、繭買入金額の百分の二を問屋に支拂ふ慣習にして之を行佃と稱へて居る。一方控外佃と言つて問屋は賣人たる養蠶家よりも繭代の千分の二十二を徴收し、詰り問屋は買賣兩者よりの手數料を所得して居る。更に問屋は購繭者と買付額が豫定よりも少くして、之が爲めに費用を償ひ得ざる場合の補償或は購繭の斤量に對する勿減に就いて之を辦償するが如き契約を爲すものがある。

抑々湖北省に於ける此種繭行の設置は一八九三年官營の製絲工場たる官絲局が田二河彭市河、仙桃鎮、天門、及簞洲の五箇所に購繭所を設けたるに始まるが、その時期には未だ繭市として當

業者の注意を喚起するに至らなかつた。然るに偶々一九一四年湖南省長沙に省立模範製絲場の設立を見るや、同省の産繭微々たるを以て之を湖北省に仰ぐべく在長沙の鹽川清之助氏と提携して漢水の上流蘄洋潭に繭行を設置し、共同計算の下に仕入を試み、購繭の一半は信州の純水館に送られた。即ち之れが邦商買付の嚆矢にして且つ湖北繭の本邦に紹介せられたる最初であつた。その翌年には之に三井洋行及上海當業者が加はり、越へて一九一六年には黃泰洋行の小川愛次郎氏が片倉及石川組の委託を受けて漢口に今村式乾燥機二臺を据付け省内拾數箇所に互つて乾燥所を設置してから俄然湖北の繭市は活氣を呈するに至つた。その翌年の如き邦商にして産地買付を試むものに黃泰、鹽川、三井、湯淺、武林及榮泰の諸洋行を算し、續いて之に日華蠶絲及茂木洋行の加はるあつて、湖北繭市場の今日あるは全く邦商の活躍によつて築かれたものである。然るに大正九年の恐慌以來邦商の活躍は減切り衰へて終つた。けれども黃泰洋行はその優越的な地位を利用して更に製絲經營に着手し、依然湖北繭市を左右するの概を示したが、合憎一九二四年の蠶作不凶に遭遇して折角の製絲經營に一頓挫を告げ、その翌年以降邦商の買付は全く跡を絶つに至り、之に代つて上海筋の出勤は著しく優勢を加へて來た。試みに一九二六年に於ける購繭者を挙げれば次のやうである。

繭 市	購 行 名	購 繭 入	買 入 概 算 額 (千吊文)	最 高	最 低	平 均
漢 口	大 豐	大豐絲廠内	二〇〇餘	一、六四〇	九〇〇	一、三〇〇文
同	成 和 昌	成和絲廠内	八〇		五四七	

通海口	熊懷之	同	德	不明
彭家場	繭行二	不詳	同	同
黃州籐家堡	—	周謂記	同	同
木溪河	—	成和昌	同	同
解州	—	周謂記	同	同

即ち繭市は拾八箇所にして其の繭行數は五七行を算する。更に上表により買入總額凡そ二百十六萬吊に對し碼秤一斤の平均相場を一吊六百文と看做せば一九二六年度に於ける出廻額は生繭二千五百五十萬斤、即ち乾繭凡そ四千擔である。此の内一半の二千擔は上海筋の買付にして殘額は大體漢口の成和及大豐兩絲廠と通業保餘其他漢口筋の見込買付と折半する割合である。各行内に附設する乾繭室は蘇浙に於ける烘繭灶を傳へたるものであるが、煙道の如き前者よりも不完全である。即ち乾繭室は煉瓦壁を以てし、每室の大きは間口凡そ五尺奥行十二尺及高十二尺、屋根まで十五尺にして、地上凡そ三尺の高さに乾繭架を設け、正面は幅三尺高六尺の觀音開とし、背面は地上一尺五寸の高さに方一尺の焚口を設け、この奥に徑二尺五寸、深さ九寸、重量十餘斤の鐵鍋を伏せて、之より更に奥に前者より小形の徑三尺位ある小鍋を伏せてこの大小の各鍋の上部は熱の反射用に煉瓦を方形に積重ねる。煙道は上記の各鍋を通して隔壁の前端に至つて隣室の煙道に合し、煙突に通して居る。乾繭架は七八段から成り、之に載せる乾繭箔は竹籠若くは木框に籐蔓を張れる篩子と呼ぶを用ひ、其の大きさ方二尺五寸、一枚の容量は生繭凡そ五

斤である。更に乾繭架は之を日本式に車臺となし、レールを以て出入せしめるものもある。建築費は一室當り百四五十元を要し、乾燥能力は每室一回の容量生繭百二十三十斤乃至百六十斤にして一日全乾二回を限度とする。之に要する人夫は每室二人の割合に配し晝夜交替とし、火夫は一人に六室を受持たしめ、燃料に楊柳の薪材を用ひ、生繭一擔當り薪二擔半の割合を要し、每擔五六十仙の値段である。此の乾燥業務に對して工頭人夫頭を配して相當意を拂ふも、何しろ乾燥装置の不完全なるに加へて乾繭法は殺蛹より直に全乾とする直乾法を採るが故に繭質を損傷することが尠くない。

五 通貨と繭秤

繭取引の状況を知るには例によつて先づ繭秤及通貨を明にせねばならぬ。湖北省に流通する通貨の種類は銀元(弗銀)銅元(銅貨紙幣)及銅元の三種からであるが、通貨は矢張り舊來の制錢(吊文)に基礎を置くものである。而してその最も流通力の大なるはこれまで官錢票といふ湖北省政府官錢局の發行する銅貨百枚(即ち千文)に相當する一吊文の紙幣であつた。之に對し銅貨には單銅元といふ當十文の一錢銅貨と雙銅元と呼ぶ當二十文の二錢銅貨があつて、前者は良質にして發行少額なるを以て雙銅元に比し三分以上の高値を保つた。然し是等銅元は携帶の便に於て到底官票に如かず一吊文の官票に對し單銅元三四枚の打歩を要し、之を補水と稱へ惡質なる銅元の鑄出さるるに及んで官票に對し一層の開きを生じた。故に官錢票は湖北省の通貨の最も重要な地位を占めて居たのであつた。然るに其後連年の戰爭騒の爲め省政府の財政窮乏に陥るに連れて

官票の濫發は甚しく官票相場は漸落し、遂に一九二六年春吳佩孚の復活と共に官錢局は破綻に類し官票の相場は〇・三〇兩より一落〇・〇六五兩に崩落し當時財界に大恐慌を捲起した。斯くて官票は殆ど流通力を失ひ同年以降の繭仕入は主として銅元によらねばならなくなつた。殊に繭市の期には銅元に對し急激な需要を起す爲めに例年五月には銅元相場の昂騰するを見る。同時に繭の建値は吊百文を用ひ十文以下の端數は厘錢を以てするからその支拂は山東四川省同様に甚だ厄介である。

繭の衡器は天秤を用ひ、その統制を缺くこと、他省と同様であるが、漢水流域に於ては通海口の二十兩秤、彭家場の十六兩秤を除き一般に十八兩三錢秤を標準とし、其の百斤は和百〇八斤の換算を採るが故に十八兩三錢秤一斤は我が百七十三匁に該當する。反之黃州地方は十七兩一錢秤及河溶地方は十八兩秤を主とする。

六 繭の取引狀況

購繭資金の手配が濟むと買人は蠶況視察員を派し、續いて五月十五日前後には購繭員全部が産地に繰出し、開秤の日取を定めて附近五六十華里の部落に互つて傳單を出し、其の買付方法は全體蘇浙の繭行と同様である。然し開秤日は前者の如く協定せぬから各買人は競ふて開秤を早くし人氣取り策として初日に高値を出す爲めに若掻き繭を持ち込む弊があり、時として初日の購繭には九割まで不化蛹繭で占むるが如き場合もある。繭行の買付量は大抵三四萬斤にして之に要する購繭員の役割は蘇浙繭行の例に倣ひ、看繭買方（秤手）看貫（寫票）傳票記入方（草碼）記帳

發票傳票交付方（覆碼）再貫（各一人）換算（計算）二人、覆算（檢算）管錢（現金）撥各一人、發錢（現金）支拂方（換錢）（代金證交付方）各二人及小工（繭取扱の雜役）五人等凡そ二十人を算する。此場合代金支拂の順序に就いては繭を賣却して傳票を受取りたる者は代金支拂所に至つて先づ傳票と引換に竹片に金額を記入せる代金證を受取る。代金支拂所では「草碼」が傳票を記帳し、「覆算」が之を檢算してから傳票を「發錢」に廻付すると發錢は傳票と代金證を引合して現金を支拂ふ順序である。斯様に買付には混雜を避ける方法を講じて居るが、何しろ賣人の持込む數量は平均十三四斤にして出盛期も僅に數日間過ぎぬから頗る雜踏を極め、中には賣人の意志に頓着なく看貫を了し或は傳票金額の不足から文句を唱へ出すなど其の喧々囂々たる支那にあつては何處も變りはない。

七 繭買入諸掛

岳家口、麻洋潭の如き上流方面に於ては乾繭場所在地のみにて所要數量の買付困難なるを以て上流各地に出張所を設け、買付けた生繭は之を繭籠に入れて船によつて乾燥場に輸送する方法を採る。此場合には利子（リ）と言つて小船二隻の船側を接合したる快足船を用ひて居る。而して乾燥を了したる繭は天竺木綿若くは麻袋に三十斤入となし、漢口に向け輸送するのである。この繭袋は土布ならば一本に一疋を要し、幅二尺七八寸、長五尺六七寸大で、その値段は一吊四五百文である。漢口向は漢口仙桃鎮間及漢口天門間に小蒸汽の運航を見ると雖も旅客専用なる

を以て民船に積込み、蔡甸に於て厘金税を納付して漢口に荷揚し、其の間岳家口から五六日、分水嘴からは三日の日子を要する、故に此の輸送に當つては雨除けや船底に侵入する汚水を防ぐ準備を要するも、その方法不完全にして繭質を損傷することが尠くない。而して漢口着の買入諸掛は蘇浙繭行の如き繭行貸借の慣習と見るべきものなく、厘金税に對しても亦通則なきを以て場所により人により同一に律し難きも、大體乾繭百斤當り拾五兩漢口兩と看做して大差なく、更に漢口より上海着の諸掛八兩見當である。若し本邦當業者にして在漢口邦商の手を通して委託買付に當る場合には口錢として普通買入額に對し百分の五を支拂ふものゝ如く、試に一、九二四年某商の委託買付による諸掛を示せば左記の如し。

繭買入諸掛

漢口着乾繭百斤の諸掛

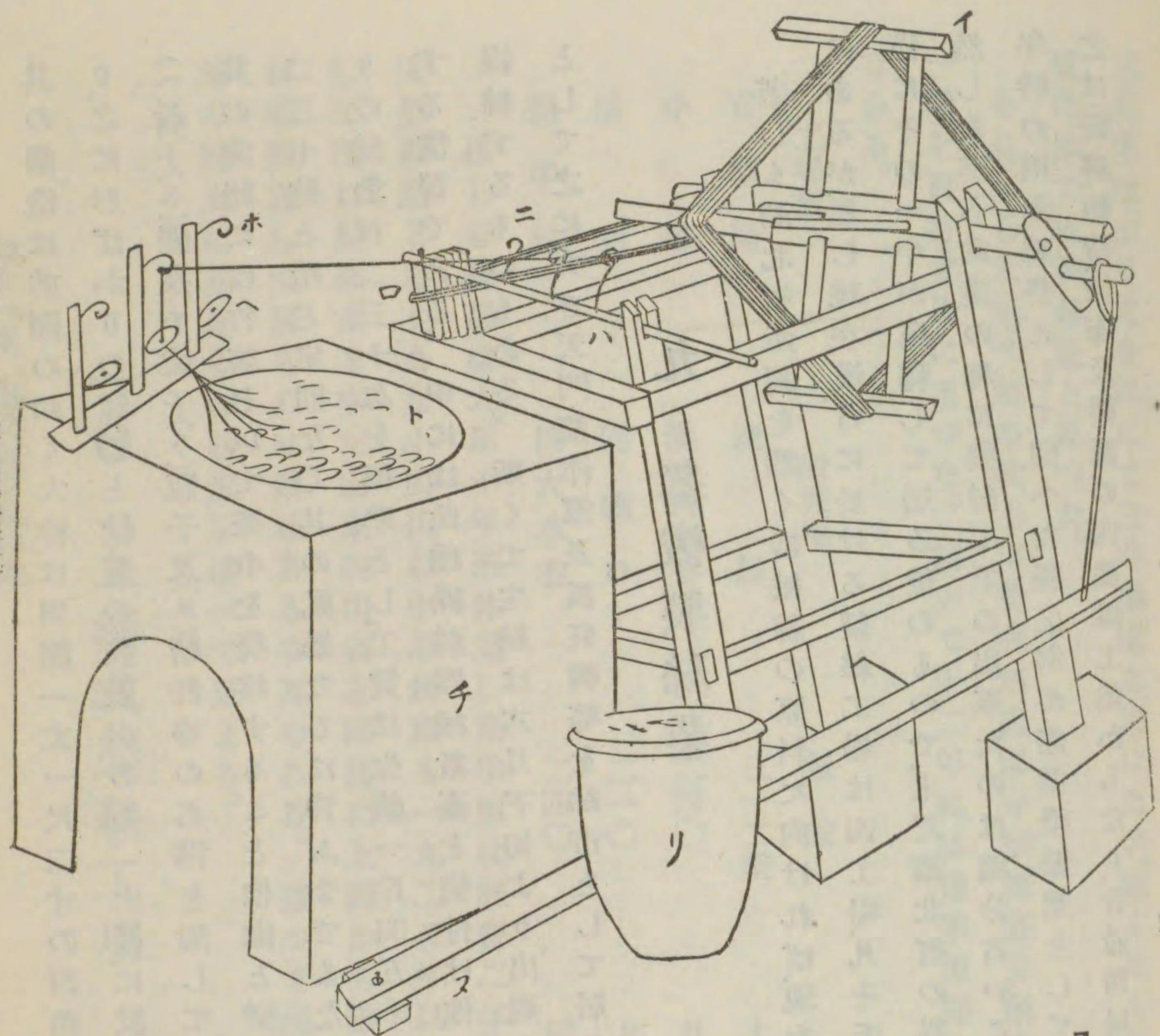
一、燃料	一〇、〇〇〇
一、乾燥其他入夫賃	一〇、二四〇
一、厘金	二、一五〇
一、運賃	二、〇六〇
一、旅費	三、四三〇
一、食費	一、七三〇
一、通信	一、〇〇〇
一、管費	七、〇〇〇
一、雜費	六、五〇〇
計	四四、一一〇

漢口より日本着諸掛(漢口兩)

一、保險料	三、〇〇〇
一、輸出税	三、〇二二
一、漢口諸掛	一、二六〇
一、運賃(阪神まで)	四、七〇〇
一、買入口錢(五分)	一、〇〇〇
計	一二、一八〇
一、漢口着諸掛換算(上掲)	一五、四四〇
合	三七、六二〇
但し一吊文に對する漢口の兩替相場は〇・三五兩とす	

八 座繰製絲業

湖北省産繭は今尙ほ座繰絲を主とするが故に繭價に比し土絲の唱値が高い場合には自ら座繰製絲を行ふものが多い。この場合には先づ繭を鹽漬とするのが普通である。其の方法は山東省に行はるゝものと略同様に先づ瓶の底に金盞若くは竹箆を伏せる。それは蛹液及苦鹽の底に溜りて繭に浸潤するを防ぐ爲めである。其の上に繭を敷き並べては鹽を振掛け斯くて繭と鹽とを交互に重ねて上部は木葉を以て蔽ひたる後之を土に埋没するのである。座繰製絲器械は頑丈なる足踏器械にして三口繰よりなるが、普通一口繰にて繰絲するを見る。



其の構造は前圖の如く大枠は周圍一丈一尺二寸の四角枠にして集緒器は螺旋狀の針金からなり、之に形ばかりの繳掛と綾振の裝置がある。上圖に就いて(イ)杵子(ロ)輪子(ハ)照脈子(ニ)及(ホ)照嘴(ヘ)嘴子(ト)續泉(チ)爐子(リ)瓶子及(ヌ)踏籽等の名稱を附して居る。繰絲は總て男子が之に當り、先づ其の索緒には竹箸を以て釜中を攪拌すること他處と變りなく、添緒の如きも粒付は三四粒より二三十粒と殆ど定則なく其の亂暴なるは言ふまでもない。工程は一日生繭十斤を繰絲し、之よりの絲量百二三十匁を標準とし、工賃は生繭一斤四五文の割合を以て定め、食事は傭主より給する慣習である。中には此種繰絲器械數臺を備付け他より繭を買入れ、之を鹽漬に付して漸次繰絲するものもある。斯くて生絲は六月下旬より出廻り漢水流域に於ては仙桃鎮を最大市場として之に次ぎ天門麻洋潭及瓜旺嘴等を絲市として居る。

九 器械製絲業

若しも湖北省産繭を悉く器械絲の原料に向ければ、現在でも優に一萬釜位は抱擁し得る餘地はあるが、然し現在漢口に於ける製絲工場は四工場、凡そ千釜を算するに過ぎないし、それも例年僅にその一半が運轉して居る位のもので、未だ湖北省の器械製絲業は創業時代の域を脱しない。然しながら武漢の地に製絲工業の出來たのは随分古いことで、今から約三十年前、即ち一八九三年時の兩湖總督として聞へた張之洞が産業獎勵策として、武昌に官絲局なる官營事業を起した。之は製絲、紡績、織布及製麻の四纖維工業からなり、普通四局と呼ばれて居る。降つて大正六年に

三井洋行が日支合辦にて三井絲廠を設けたが、間もなく休業して工場は大正十二年に支那人に買はれて成和絲廠となつた。

それから大正十年の秋小川愛次郎氏は中華絲廠を創設して氏が數年來唱導せる製絲計劃の一端を實行するに至つた。續いて十二年には豫孚恒絲廠が出來て現在の工場數は左記の如くである。

工場數	所在地	釜數	商標	創業年
官絲局	武昌	三二二釜	上海式	一八九三年
中華	漢口大水巷	二四〇	日本式	一九二二年
成和	同礪口	二二〇	上海式	一九二二年
豫孚恒	同大水巷	二四〇	同	一九二二年

但し官絲局は大正十年來休業し、豫孚恒は經營二年にして閉業し、上海當業者に賃貸せられ大豐絲廠となり、また小川氏の中華絲廠も一九二五年以來空しく閉業して居る有様である。而して漢口製絲業も亦た山東四川省と同様に上海から移入された歐式繰絲法と日本式繰絲法とが相對立して居るのは興味ある事實である。據つて漢口製絲業もこの二者に分つて一九二四年の調査に基きその狀況を述べて見よう。

一〇 上海式製絲工場

(一)武昌官絲局 漢口は河南陝西棉の集散地で、原料關係から紡績によく、綿布の需要は尙更であり、また麻は下流の武穴に出廻つて、漢口輸出の大宗に居る。繭は漢水の流域に出るといふが如く、この紡績、製絲、製麻の工業に著目したのは流石は張之洞であつたが、何しろこれは官業であり、之を運轉するにも巨資を要するところから、成績は餘りに擧がらず、遂に革命の變に遭つて頓挫して終つた。それから民間の楚興公司が之を十個年の契約で、賃貸して經營に當つた。その間紡績業などは偶々勃興期にあつたから、會社の營業狀態は可成好成绩を擧げて居た。それを見た湖北省の當局は之に垂涎して、賃借の満期になると同時に、當時の督軍王占元輩下の軍閥連中が楚安公司なるものを組織して、前者にとつて代り、今日に及んで居る。この楚安公司は大正十一年から官絲局を手に入れ、紡績業のみを運轉し、一寸甘い汁を吸へたやうであるが、未だ到底製絲、製麻には著手するの餘裕なく、この兩工場は空して運轉を中止して居る狀況である。

(二)成和絲廠 この絲廠に就いては先づその前身たる三井絲廠から述べる要がある。抑々三井洋行がどうして漢口に製絲工場を設けたか、そしてまた上海式繰絲法を採用したかと言ふに、當時上海三井洋行の生絲部は支那蠶絲業に活躍の手を擴げた際であり、大正三年頃から上海に支那人と合辦で三元絲廠を經營し、所謂上海式經營法には充分の研究と經驗を積む所があつた。そして部員には支那人に對しては面倒臭い日本式よりも、寧ろ在來の上海式に捨て難い長所があるといふ見解を抱いて居た。それに漢口に於ける漢水の繭市場は邦人によつて開拓され、黃泰、鹽川、武林、湯淺等諸洋行が孰れも乾燥場を設けて繭繭に従事し、勿論三井も之に加はつて居た

から、更に一步を進めて上海式製絲經營を著手するに如かずとせるものゝ如くである。そこで大正六年に支那人と合資の下に資本金十萬兩を以つて三井絲廠を組織し、翌七年の新繭期から百四釜を以つて運轉するに至つた。然しこの經營法は上海式である以上一般支那人のものに比して特に變つた所がある譯でなく、却つて生産費などは割高とならざるを得なかつた。近い話が日本人が一人多いだけでも支那人の三四人は使へる勘定である。それに製絲工女は特に養成を行はず、その一半は上海の工女で間に合せたが、之を連れて行くにも、當然賃銀に割増を附け、其他死亡すれば、手當若干といふやうな、優遇法を講じなければならなかつた。元來製絲業の如きは、人間を安く使ひ、女工の食事にまで八ヶ間敷く切詰めて、やつて行く性質のものであるから、三井の事業としては最初から不適といふの外はなく、到々一年ならずして、持て餘して終つた。そして工場は賣物に出て居たが、財界不況の折柄であり、旁々上海式工場なので邦人として之に手を付けるものはなかつた。其時に慎昌祥號といふ汚陽絲、繭棉花を取扱ふ問屋が大正十一年頃から漢口郭家巷に怡大絲廠といふ八十釜許りの工場を始めて居た。これが廣東商人の陳氏と成和公司なるものを組織し、大正十二年に三井絲廠を四萬三千餘兩にて買入れ、前記工場の八十釜を移し、更に二十六釜を上海に注文し、二百十釜として、新繭期から成和絲廠として開業するに至つた。そして同年度は關東大震災當時の高値もあつて、先幸よく相當の利益を見たが、十三年は産繭の違作で損失は免れなかつた。然しこの絲廠の代表者たる陳同新氏は廣東人にして、廣東順德縣にも製絲工場を有するやに傳へられ、普通の支那人と異つて工場の經營振りは頗る

熱心である。私がこの工場に視察に出掛けた折は、其日生憎女工の同盟罷工が起つて、遺憾ながら作業の實況を見るを得なかつたが、當時作業時間は午前六時より午後十一時迄で、その間に晝食の休憩が四十五分、夕食が三十分、差引十五時間四十五分といふ長時間であつた。これは同年の繭が不良の爲め工程が甚しく捗らないからで、一日の繰目の如きも七十五匁見當、絲目は一、二等繭で二十匁内外であつたといふ、工女の賃銀は日給七百五十文、銀の二十八匁、銀元一弗に對し二吊五百文替、夜業手當が三百五十文、一四匁を合して一吊五十文、打盆即ち煮繭索緒工が四百五十文と夜業百五十文を合せて六百文といふから、上海に比較すれば餘程低廉である。次に生産費に就いては奉直戦争の折柄炭價が暴騰を來し、それにこの工場には起電機及用水濾過装置を缺いて居るから、一個月に付き電燈料二百元、水道料三百元を要し、生絲百斤當りの生産費は約二百五十兩見當であると。それから工場には女工の宿舍があり、一個月一人に付き八百文の貸間料を徴して女工を收容して居るが、漢口の女工數は豊富でないから、女工の鼻息が荒くて何かといふと直ぐ同盟罷業をやらかすやうである。これは元來上海式工場では特に女工の養成を行ふことなく、最初盆工から替車となり、次ぎて正車繰絲工となる順序であるから、漢口に於て製絲女工と言へば武昌の官絲局で使つた女工だけで、之を充用して居るから、自然その數に不足を來して居る譯である。それで先に述べた同盟休業も、もう一つの豫孚恒絲廠が近く開業せんとして、女工の募集をやつて居る處から、その影響を受けて、女工等は舊年末に紅利賞與金の義、十二匁文の要求を迫つて、工賃の支拂を受けると、早速その翌日に罷業を企てたのであつた。廠員も漢

口は上海と異ひ女工を使ふに頭を下げて使つて貰ふ有様だと零して居たが、更に前年豫孚恒絲廠の如き一個月に二十餘回からの罷業が行はれたとのことである。従つて成和絲廠では女工を比較的優遇し、一箇月の全勤者には六日分の賞を與へ、また繰目賞としては一日の繰絲繭量標準一籠四百匁入に對し、一個月間に一籠以上餘計に繰絲したるものには、一籠に付き一日分の割合にて賞を與へ、更にデニール罰其他に就いては、罰金額二百五十文以上は、之を免除して居た。

(三)豫孚恒絲廠(現在大豐絲廠) これは中華絲廠に隣接して一九二二年新設せられた堂々たる工場である。經營者は江西商人豫孚恒號といふ棉花、汚陽絲等を取扱ふ問屋の大手筋にして、厚い信用を以つて省内に活動して居たが、一九二四年上海に送つた棉花の思惑に失敗して、巨債を負ひ、全財産六十餘萬兩を擧げて、未だ償ふに足らず、十九萬兩からの殘借があり、爲めにこの工場も製絲業としては前期若干の利益を見たが、今は債權者の手に渡つて居る、從來支那人は新事業を起すに思ひ切り固定に資本を投じて堂々たる見えを張り、一寸蹉跌すれば直ちに動きのとなれなくなる通弊があるが、これなどは其一例と言つてよからう。債權者に渡つた工場には更に八千元を投じて、その前部に三階建の事務所を添設して、新飾を施し、同年の陰曆十二月一日から泰生號といふ繭屋に賃借料一個月千五百元を以つて貸す事になり、私が行つた時は門標に「陰曆十二月初一剝繭、同初二開車」と書いた、赤い女工の募集札が貼られてあつた。そして女工の賃銀は日給八〇〇文、夜業手當四〇〇文を支給すといふので、先づ成和絲廠が同盟罷業に崇り、中華絲廠も多少動搖して、十人前後の轉勤者は免れないと見られて居た。この泰生號といふ繭屋は

同期春繭の不良と上海絲況の不振で持繭は更に賣れず、繭相場は前秋百斤八十兩に暴落し、其後絲況が活氣付いて稍見直りたるが唱値は百兩見當にて、到底採算が引合はないから、自ら繰絲するに至つたものである。續いて翌一九二六年には上海製絲家程瑞庭氏之家賃毎月五百元當り一兩五錢にて借受け商標金麒麟及三子を以て熟練せる上海式經營を試みたが、同年は蠶作も良好にして操業午前五時半より午後五時半に終る純作業十一時間に於て一日一釜の繰絲量は九十五匁に達し、絲量も折頭五百二十乃至五百四十斤にて足り、相當の利潤を擧げ爾來營業を繼續して居る。

一一 日本式中華絲廠

支那の製絲經營に對し在來の上海式繰絲法によつては、到底満足なる成績を擧げ難く、唯日本式の採用によつて發展を期し得べきは、今日殆ど疑を挿む餘地はない。が然しこれは過去に於ける東亞蠶絲組合經營の上海瑞豐絲廠とか、前記三井絲廠によつて得た、苦い經驗からの結論であり、同時に在支日本式工場は山東の青島絲廠といひ、杭州の緯成絲廠といひ、また重慶の又新絲廠が其の經營振りの健實なる事實に徴して明かである。然し是等の工場は大正五六年頃から始めて、既に根柢を築いて終つて居るから、日本式繰絲法を支那に於て如何にして利用し得るかには就いては偶々創業に努力しつゝあつた中華絲廠に就いて見るのが適切である。故に同絲廠は一九二五年以降閉業して居るが、當時の狀況に就いて詳細なる説明を加ふるであらう。但し

一九二五年度湖北繭は稀有なる凶作に遭遇して之が爲めに繰絲には非常なる苦心を拂つて居たことを豫め述べて置く必要がある。

偕て此中華絲廠とは小川愛次郎氏の經營になるもので、同氏は在漢拾餘年黃泰洋行を經營して、雜穀牛皮等湖北省特産品の輸出貿易に當つて居たが、大正五年に片倉及石川組の委託を受け、大々的に購繭に従事したのが抑々の始り、爾來拾年間年々繭の登成期には購繭に當つて居たが、大正九年財界の變調を機として、専ら製絲經營に歩を進め、翌年有力なる本邦當業者二三と共同して、中華絲廠を起すに至つたのである。工場は大正十年八月、五十釜を以て運轉を開始し、翌十一年二月に八十釜を増して、十二年度は百三十釜で終始し、次ぎに十三年三月、四十釜、同十月に七十釜を増して、二百四十釜に擴張したが、構内は未だ五百釜迄に擴張する餘地がある。繰絲器械は信州岡谷の増澤商店から購入し、その中に直繰筒井式六釜を試験的に使つて居た。煮繭機には長工式を用ひ、其他ボイラー、製絲用水の爐過装置は製油用に使用せるものなれば、製絲工場には稍上等過ぎる程のものである。建物は繰絲場二棟、再繰場一棟、其他倉庫及宿舍にして、貯繭倉庫は日清汽船の倉庫を利用して居たが、工場は漢水の河岸にあるから、繭の運搬には水路によつて至便である。邦人職員は五名にして、現業長には上田蠶絲専門學校出身の渡邊康輔氏其職に任じ、尙邦人教婦二名を以て、女工の養成に當つた、當時の使用人員を示すと左記の如くであつた。

支那人職員

二人

同見番	八	月給一二二〇元
繰絲男工	一〇一	平均日收 三〇〇文(寄宿)
筒井式同	六	同 六〇〇文(同)
繰絲女工	八四	同 五〇〇文(通勤)
養成男工	一二	月手當 三一五吊文(寄宿)
同女工	五二	日當 三一四〇〇文(通勤)
揚返男工(寄宿)	一〇	月給 八一二吊文
同(通勤)	七	同 一一一九吊文
煮繭男工	六	同 四一一吊文
選繭女工	二一	日給 三八〇―四四〇文
屑物男工	三一	月給 三一五吊文(食費支給)
計	三四〇人	(銀一元を二吊五百文替)

作業時間は午前五時に始つて、十一時半から午後〇時半迄を休憩時として午後七時半に終り、正味の作業時間は十三時間半である。晝食は男工は寄宿舎に於て女工は各々自宅に歸るが、更に午後の八時と午後三時に油條(餅の油揚)又は包子(饅頭の好みによつて、一人に一個宛支給することになつて居る。一個の値十五文であるが大抵支給された一個では足らずに、二三個は平げる様である。そこで當時の工程を見るに十一月に於ける平均成績を示すと左の如くである。

繰絲臺別	繰目	繰目	摘要
一臺(三一釜)	一八・〇二	四六・一三	最初よりの女工
二臺(三一釜)	一八・四〇	四九・五〇	同上、優等のもの
三臺(二六釜)	一七・二五	三九・五〇	男工、養成三箇月位
四臺(二六釜)	一七・一四	四二・九〇	男工、約一箇年を経過せるもの
五臺(二六釜)	一七・八五	五二・八三	同上、優等のもの
六臺(二七釜)	一七・六九	四六・一七	同上、男工中最も古きもの

其他七、八臺は養成中のものであるが、更に是等を綜合した總工程を見るに十二月二十日に於ける繰絲狀況は左表の如くである。(出目八十匁)

臺別	使用釜	空釜	總本數	同繰絲量	平均繰目	平均繰歩
一臺	二七・釜	四・	七一本	九一八匁	四八匁	二一・一%
二	三〇・	一・	八一	一、三八二	四九	二〇・九
三	二五・五	〇・五	六一	七七〇	四二	二〇・一
四	二六	〇	八二	一、二四八	五五	一九・九
五	二六	〇	九〇	一、五〇五	六二	二〇・六
六	二六・五	〇・五	九三	一、四九七	六三	二〇・五
七	三二・五	二・五	八四	九六三	四五	二〇・一
八	三二・	〇	三八	二七八	二〇	二〇・五
筒井式	六・	〇	二四	二二五	七五	二一・五

但上表に就いて同年の春繭は近來稀なる凶作であつて、それに乾燥の誤りたる原因もあるものゝ如く解舒が甚しく不良であつた。之を職工の作業振りに見ても、索緒に骨の折れることと、頻繁なる落緒とは傍目にも氣の毒に感ぜられる有様で、之を前年度に於て繰目は最低八十五匁から最高百十八匁の間にあり、繰目も二六匁見當たるに比較して、全く話にならない相違であつた。斯く極端に繭の不良なる爲めに、私が最も知らんと欲した女工の養成状況乃至その能率及賃銀に關して、適確なる概念を捕捉するに殆ど苦しむが、今是等の諸點に就いて見るに先づ順序として、選繭の状況に就いては湖北繭は勿論屑繭込の毛貨であるが、その選繭歩合は百分比で示すと左記の如くである。

繭	繭	屑	繭
一等繭	六二・一五%	二等死籠繭	〇・六三%
二等繭	一四・九三	玉 繭	四・九三
三等繭	七・二九	毛 羽	〇・六三
一等死籠繭	九・七九	計	一〇〇・〇〇

然し繭の餘りに不良なる爲め選繭に意を用ゆるも效なきものゝ如く、遂に各地の繭を總合併として一等繭の選繭歩合を七五%見當に高め、二等繭の選出を省略して居た。そして一日の配繭を八十一匁として二十七匁宛三回に煮繭して居る状況であつた。女工の養成には最初工場

附近の女工を募集し、邦人教婦四名を以て、養成に當らしめたが、何しろパイプから蒸汽の出るに不思議がるといふ無智な程度で、工場などには全然理解を缺いて居るから、最初の五十釜を養成するに四百人からの出入があつたと言ふ。斯くして相當数の女工が居居はると、それからその女工を通じて、知己親戚のものを招致せしめると、是等は八分通りはものになるといふ。更に第二回の増釜には田舎の或る一地方より十三歳前後の男工を募集し、工場内に寄宿せしめたが、是れは順調に養成を遂げた。次ぎに最近の擴張には養成に要する犠牲費を軽減する目的で、武昌官絲局に従事せる繰絲工若干名及其その索緒煮繭工を招來せしめたが、前者は所謂上海式の型に固まつて繰目を切り、之を矯正することは容易でないらしい、それに是等の女工は他工場に轉ずる虞があり、尙又同廠に養成せられた女工も他の工場では繰絲が丁寧なりとして歓迎されたといふ。養成法に就いては男工ならば、最初屑物、蛹寄せに使役し、女工なら暫らく繰絲工の傍に腰掛けて見學せしめ、一週間位からして死籠繭をあてがつて、一箇月間繰絲せしめ、二月目に三等繭を持たせ、三月目に入つて一等繭を以て二口繰とする順序である。教婦の言によると支那人は手先が器用であるから技術の上達は早いとのことである。今その状況に就いて男工三人を選び、技術の進歩状態を窺ふと左表の如くであつた。

(總一本凡そ十八匁五分)

繰絲日數	第一月	第二月	第三月	第四月	第五月
繰絲本數	二六日	一九	七	七	二四
甲	一五本	三〇	一六	二四	一二〇

あるといふ。之に就いて先づ技倆及勤惰に對する賞罰規定は左表の如し。

一、デニール賞罰

線絲織度十四中に對し	賞		罰	
	女工	男工	女工	男工
細目				
太目				
一三・五	賞 四〇	四〇	罰 四〇	四〇
一四・〇	賞 四〇	四〇	罰 四〇	四〇
一三・〇	同 二〇	二〇	同 二〇	二〇
一二・五	同 二〇	二〇	同 二〇	二〇
一二・〇	罰 二〇	二〇	罰 二〇	二〇
一一・五	四〇	四〇	四〇	四〇
一一・〇	八〇	八〇	六〇	六〇
一〇・五	一四〇	一四〇	一二〇	一二〇
一〇・〇	一七〇	一七〇	一六〇	一六〇
九・五	一八〇	一八〇	一七〇	一七〇
九・〇	一九〇	一九〇	一八〇	一八〇
八・五	二〇〇	二〇〇	一九〇	一九〇
八・〇	二一〇	二一〇	二〇〇	二〇〇
七・五	二二〇	二二〇	二一〇	二一〇
七・〇	二三〇	二三〇	二二〇	二二〇
六・五	二四〇	二四〇	二三〇	二三〇
六・〇	二五〇	二五〇	二四〇	二四〇
五・五	二六〇	二六〇	二五〇	二五〇
五・〇	二七〇	二七〇	二六〇	二六〇
四・五	二八〇	二八〇	二七〇	二七〇
四・〇	二九〇	二九〇	二八〇	二八〇
三・五	三〇〇	三〇〇	二九〇	二九〇
三・〇	三一〇	三一〇	三〇〇	三〇〇
二・五	三二〇	三二〇	三一〇	三一〇
二・〇	三三〇	三三〇	三二〇	三二〇
一・五	三四〇	三四〇	三三〇	三三〇
一・〇	三五〇	三五〇	三四〇	三四〇
〇・五	三六〇	三六〇	三五〇	三五〇
〇・〇	三七〇	三七〇	三六〇	三六〇
九・五	三八〇	三八〇	三七〇	三七〇
九・〇	三九〇	三九〇	三八〇	三八〇
八・五	四〇〇	四〇〇	三九〇	三九〇
八・〇	四一〇	四一〇	四〇〇	四〇〇
七・五	四二〇	四二〇	四一〇	四一〇
七・〇	四三〇	四三〇	四二〇	四二〇
六・五	四四〇	四四〇	四三〇	四三〇
六・〇	四五〇	四五〇	四四〇	四四〇
五・五	四六〇	四六〇	四五〇	四五〇
五・〇	四七〇	四七〇	四六〇	四六〇
四・五	四八〇	四八〇	四七〇	四七〇
四・〇	四九〇	四九〇	四八〇	四八〇
三・五	五〇〇	五〇〇	四九〇	四九〇
三・〇	五一〇	五一〇	五〇〇	五〇〇
二・五	五二〇	五二〇	五一〇	五一〇
二・〇	五三〇	五三〇	五二〇	五二〇
一・五	五四〇	五四〇	五三〇	五三〇
一・〇	五五〇	五五〇	五四〇	五四〇
〇・五	五六〇	五六〇	五五〇	五五〇
〇・〇	五七〇	五七〇	五六〇	五六〇

一、精勤賞
賃銀の支拂は女工半箇月拂、男工一箇月拂なるを以てその精勤者に對し

一、遅刻罰
通勤女工に對し、早朝五時の始業に五分間を遅刻する毎に罰金十文の割合を以て課す。

一、精勤賞
賃銀の支拂は女工半箇月拂、男工一箇月拂なるを以てその精勤者に對し

女工半箇月に對し 男工一箇月に對し

全勤者 賞 五〇〇文 六〇〇文

半日缺席者 三〇〇 五〇〇

一日缺席者 一〇〇 四〇〇

一日半缺席者 一〇〇 三〇〇

二日缺席者 一〇〇 二〇〇

二日半缺席者 一〇〇 一〇〇

更に賞與に關するものは支那の決済期たる節季は端午節陰曆五月五日、仲秋節八月十五日及歲末の三回で、此季には使用人に酒錢(賞與の意を與へる慣習であるが漢口は未だ田舎でもある

から、一般工場に於いても之を支給して居る。同廠の酒錢は勤續日數によつて毎季第一期の養成工に五串文、第二期のものに四吊文、第三期に三吊文の割合を以て支給して居た。尙この外に「勤勞」なる規定を設け、男工にのみ適用した。これは男工に對し工場に來てから一年即ち三百六十五日に達すると、三十吊文を給することになつて居たが、男工は田舎から連れて來たものなれば、その居據りを計つて居る譯であつた。

更に上述の賃銀に對する職工の能率關係を見るべく十一月中に於ける養成工を除く、總線絲量及總賃銀を示すと

直線式	延人員		線絲量		賃銀額	
	男工	女工	男工	女工	男工	女工
男工	二、七二九・五人	一、二一、六〇三・人	八二七、四四〇文	一、四三九、〇一〇	八二七、四四〇文	一、四三九、〇一〇
女工	二、二一〇・〇	一、〇二、八〇〇	七一七、五〇〇文	一、〇六、三三〇	七一七、五〇〇文	一、〇六、三三〇
直線式	一、七九・〇	一、二一、〇一四	一、四三九、〇一〇	一、〇六、三三〇	一、四三九、〇一〇	一、〇六、三三〇

即ち生絲百匁に對する線絲工費は平均百三十文、銀に換算して五十二仙に當るが、これは先きにも述べたやうに、同期は工程が殆ど前期の半に過ぎず、自然工賃も多くなれる次第であるが、それでも之を上海の百匁凡そ五十八仙見當に比較すれば尙低率であつた。序に同月前記賃銀に増減されたる賞罰額を示して職工の技倆狀況を推すべく左表を掲げよう。

絲目賞	男工(一〇一人)	女工(八四人)	筒井式男工(六人)
七、七、九八〇(一〇一人)	六六、二〇〇(三九人)	五、二六〇	五七一

絲目罰	六五、九三〇(五三人)	六六、二三〇(三八人)	五七二
織度罰	二三三、四八〇(四八人)	二三六、二八〇	六、九〇〇
類節罰	三一、四一〇	三八、四一〇	一
遅刻罰	一	一五、〇三〇	一

更に職工の勤惰の状況を窺ふに十一月中の成績によると

精勤賞	男工一〇一人付一箇月	女工八四人
	賞六〇〇文のもの	七人
	五〇〇	三八
	四五〇	三
	四〇〇	五
	三〇〇	一五
	二〇〇	一〇
	一〇〇	一
無賞者	二二	二〇

即ち寄宿舎制による男工が、通勤の女工に比し、出勤率の良好なるを示して居る。最後に生産費に就いては何分にも現在二百四十釜の一半は養成中にあつて、その完成と共に生産費は漸減する關係にあり、加ふるに同期原料繭の解舒極めて不良なるを以て、之を普通の状態に律すること

とは當を得ないが、兎も角當時二三箇月に於ける生絲百斤當りの諸掛を見るに、大體二百六十兩見當になつて居る。今その内譯を見ると(單位漢口洋例兩)

八三・三八	工費。内線絲工費七一・二七兩、揚返工費四五・三兩、選繭工費三・五一兩、屑物整理費四・一七兩
六〇・〇〇	燃料。但し一日石炭三噸半の割合
九・二五	原動用費。但水揚及動力用電力費二・三六兩、電燈費六・八九兩
一六・二五	保險料。
三五・〇〇	給料。但邦人、支那職員及見番
一四・〇〇	賄料。同上
一五・〇〇	生絲輸出諸費。但荷造費、輸出税及上海迄の運賃
一〇・〇〇	營繕費及消耗費。
二・三六	通信諸費。但通信費一・五八兩、電話料〇・七八兩
一六・四二	雜費。但醫藥〇・九五兩、原繭運搬費一・五兩、雜役三・九七兩、其他雜費一〇兩
計二六一・六六	

然し之を百三十釜を以て終始したる前年度に於ては、線絲工程も進捗せる爲め、各月の生産費は金利を見ても、最低一九八兩から、最高二百六十兩の間にありたるを以て工場が漸次整頓するに至つたならば、その生産費も下つて二百二十兩見當に落著すべく、上海に比較して四五兩安に上がるであらう。斯様に中華絲廠は日本式線絲法を採つて諸種の障害に遭ひ、思がけない経

験を嘗めつゝ、新開地に日本式工場建設の途上にあつた。そしてもう二三年経てば相當根柢を築き得る状況にあつたが、偶々一九二四年蠶作の凶歳に祟られ、旁々絲況の不良に折角の事業も頓挫の已むなきに至つた。

一二 日本式と上海式繰絲法の比較

支那に於て上海式と日本式繰絲法の利害得失を講究することは最も必要な、そして興味ある問題であるが、それには漢口のやうに同一地にあつて、同一原料を以てする兩工場の比較を採るのが捷徑である。依て一例として中華絲廠が自己の原繭を成和絲廠に送つて試験挽をしたる相互の比較を左表に掲げやう

中華絲廠の繰絲成績(一等繭)

選繭せざる毛貨百匁に對し	一七・二八匁
選繭百匁に對し	一七・五九匁
(即ち毛折)	二五・〇四匁
(光折)	四三・四匁
對乾繭百匁の繰絲時間	五時、五十分
對一日十三時間半の繰目	五三・三〇匁

上海式成和絲廠の繰絲成績

選繭せざる毛貨百匁に對し	一五・一〇匁
選繭百匁に對し	一七・九〇匁
(即ち毛折)	一七・九〇匁
(光折)	五五・九匁
對乾繭百匁の繰絲時間	三時、七分
對一日十三時間半の繰目	七七・三七匁

前表に照し選繭に就いては中華絲廠は選繭を簡略に一等繭の歩合を七五%に止めた。然るに成和絲廠は供試量九六〇匁を上海式に選別して一二等繭を別々に繰絲せるものにして其の選繭歩合及繰絲成績は左表の如くである。

成和の選繭成績

種別	重量	百分比
一等繭	六二〇	六四・五八%
二等繭	一九〇	一九・七九%
薄皮	一〇	一・〇四%
玉繭	九〇	九・三八%
爛繭	四四	四・五八%
毛羽	六	〇・六三%

同上繰絲成績

種別	繰絲量	合計及平均
一等繭	六二〇匁	八一〇匁
二等繭	一一八	二七
薄皮	一一・二九	二・八一
玉繭	一九・〇三	一四・二一
爛繭	三時七分	三時九分
毛羽	八二・三五	六〇・七五
合計	三時七分五	七七・三七匁

即ち上表に於ける兩工場の成績を對照して見る時は、日本式繰絲法は上海式に比し絲歩に於て、二割餘の増量を示して居る、それから工程に於ては、勿論上海式は二釜に就き一人の補助工を配するによると雖も、その相違の甚しきは、原繭不良の爲めに、兩者繰絲法の長短を夫々遺憾なく發揮したものであらう。そしてこの絲歩の相違に就いては、上海式繰絲法の缺點を如實に語るものにして、日支製絲業に於ける重大なる相違點の一つである。

一三 製絲業地としての漢口の價值

支那製絲業は現在廣東、上海、青島、重慶及漢口の五個所を基點として發展せむとする情勢にあるが、此の内漢口の製絲業のみは前述の如く未だ根柢を固むるに至らない。これが原因としては主として原料繭及製絲工の關係にあるものゝ如くである。而してその生産要件に於て漢口

は固より主要都市なるが、一般物價とか、土地の價格が上海に比して遙に低位にあるは言ふ迄もない。そこで斯業に肝心なる燃料、勞力、原繭乃至金融の狀況に互つて、漢口の價値を考察して見よう。

(一)燃料

石炭は京漢鐵道によつて、河南山西炭が輸送せられ、また水路湖南炭の移入もある。併しながら鐵道運賃が未だ安くはないので、例年二三十萬噸の日本炭が侵入し得らるゝ狀況に見て炭價は上海に比較して、そう安くはない。殊に最近數年來戰亂による京漢線の不通、湖南萍鄉炭坑の紊亂等によつて當分は上海からの日本炭に俟つ外はない。之が爲めに炭價は上海に比し頓當り四五元の高位を支拂はねばならぬ。

(二)製絲工

漢口に於ける製絲工女は武昌官絲局に従事せるものゝみなれば、其後工場の新設に伴ひ、女工の不足を來して居る。これは他面上海又は無錫の如く、工場を建てさへすれば、その日から運轉するといふ譯には行かず、勢ひ工場の増加を急激に期し得ない原因である。然しその賃銀は上海の日給四十三仙に比して、二十八仙(七百文)といふ低率であるから、この點は製絲業地としての漢口を價値づける有力なる一要件であらう。

けれども之を養成して優良なる製絲工を仕上げるには相當の努力を拂はねばならぬ。殊に江浙、山東、四川諸省の如きは既に製絲技術を相當心得たるものが存在して居るが、湖北省に於ては新規に之を養成せねばならぬに最近南方の武漢政府の成立以來職工の質は一層惡化し之を使役するに困難なる憾がある。

(三)原料繭

製絲業から見たる原料繭は其の供給甚だ豊富にして且つ價格も他省より廉價の得點あるが其の不利とするところは蠶作の不安定にして一朝不作にして解舒不良なる時に遭遇せんが直に打撃を蒙り易い。蓋湖北の産繭額は座繰絲の輸出量から推算して先づ乾繭五萬擔見當なるべく、大體に於て江蘇省無錫地方の産額に相當して居る。然し製絲家及繭商の買付額は例年乾繭三千乃至五千擔の間であるから、器械絲の原料となるものは、漸く全産額の一割見當であらう。故にこの座繰業地を開拓しさへすれば、その供給に多大の餘裕を存することは言ふまでもない。次に繭の價格は湖北繭市場が購繭を上海又は時に本邦へ供給する爲めに開拓されたものであるから、之に見込買付を爲すもの多く、また一方座繰絲の値段に牽制せられて、地元製絲家が之を獨占することが出来ない。自然繭價も時として他地方より割高なる相場を出すこともあるが、既往の事實に見て大體低廉である。それに本來繭商の買値は上海乾繭市場に送つて採算の合ふ値段でなくてはならぬから、少くとも漢口の製絲家がそれだけ有利であらねばならぬ道理である。今試みに最近八個年に於ける生繭百斤の買付平均値段を擧ぐれば左記の如くである。

	支拂相場	官票見當相場	換算兩値段
大正六年	七二、五七七 _文	四八 _兩	三五
同 七年	七九、八二〇	四九	三九
同 八年	七七、三二〇	—	—

同	九年	七五、一八〇			五七八
同	十年	七〇、三〇〇			
同	十一年	九五、八八〇	四〇		
同	十二年	一七八、五〇〇	三四	六一	
同	十三年	一二七、七〇〇	三一	四〇	
同	十五年	一六〇、〇〇〇	二二	三五	

即ち吊文相場の繭價は著敷昂騰せるが、これは銅貨の暴落に歸因すること多く、兩相場には大差なきを知るのである。就中十四五年度の如きは中支に於て最も安値にあつた。然しこれは繭質に至大の關係を持つことは言ふまでもないが、其の繭質は年によつて著しい相違がある。何しろ湖北省の天候は壯蠶期に入つて温度の急騰を告げるを例とし、若しも天候不良となれば蒸熱を醸し蘇浙地方よりも飼育に困難な氣象である。しかもその産繭は大粒なるに似ず織度は細きに過ぎ、之れが不作とならば解舒の不良は尋常ではない。試みに中華絲廠の一粒繰試験は左記の數字を示して居る。

檢尺器		大粒繭	小粒繭
一〇〇〇回	二・七六 ^{デニール}	二・六四	
二〇〇〇回	二・五八	二・一四	
三〇〇〇回	二・三二	一・九八	
四〇〇〇回	二・〇〇	一・五八	

五〇〇〇回 一・七四
六〇〇〇回 一・四〇

即ち大粒の割合に織度は細く、その開差も大きいから繰絲上にも多少の困難を伴ふ。以上の諸點を綜合して、原料繭から見たる漢口製絲業の得失を考察するに先づ得點としては、繭價の概して低廉なるに指を屈すべく、次ぎにその仕入れ上、江浙地方の如き煩雜なる繭行制度の設けなく、厘金税も低率である。且つ繭産地から殺蛹又は半乾にして、工場に搬入し得らるゝ利便がある。反之不利とする點は先づ第一に産繭の大部分が黃繭なる爲に販路の狭きことを擧げなくてはならない。蓋上海生絲市場に於て黃繭絲の需要は殆ど歐洲向に限られて、米國向は喰はず嫌と言はるか、更に買氣がない。そして黃繭絲に就いて歐洲筋商館の批評によると、山東絲は硬質であるが、湖北繭を原料とするものは絲質柔軟なりとして、前者を歓迎し、相場も四五兩安に取扱はれて居る。それから漢口には上海無錫程に未だ乾繭取引が行はれて居ないから、原料の大部分は春蠶一期に仕入なくてはならない。この場合往々蠶況の凶作に遭ふて、不覺をとる危険がある。勿論支那に於て蠶況の豊凶は何處でも變りないが、上海地方ならば通例紹興が悪ければ、無錫が良いといふ具合になるから、稍この危険を減ずることが出来る。

然し是等原料繭に關する不利は資力によつて補ふを得べく、更に漢口を根據に將來安徽省又は河南省の産繭に着手するも妙であり、生絲の販賣に就いては、本邦市場に送荷すれば差支

なきを以つてその不利なる點は或程度迄人為的に避けられやう。上海生絲市場は横濱に比して賣手側に種々不利なるは既述の通りであるが、更に黃繭絲に至つては前述の如く殆ど歐洲向にのみ需要されて居る關係上絲價も格安に取扱はれる傾がある。そして商談の買付振を見るに、絲況不振の際は格安なる黃繭絲に買氣あるも、好況を呈すると商談は上海絲に移つて動もすれば顧みられない場合が往々にしてある。これは未だ出廻量が少額にして場違品として取扱はるゝ現狀に於ては已むを得ない状態である。更に漢口より出荷して賣込むまでに要する生絲百斤の諸掛を擧ぐれば左記の如くである。(單位上海兩)

輸 出 稅	七・八〇	黃繭絲百斤、海關兩七兩
運 賃	六・五〇	漢口より上海迄
保 險 料	〇・九〇	同上(以上三項漢口の諸掛)
沿 岸 貿 易 稅	三・九〇	輸出稅の半額、再輸出の際拂戻す
碼頭稅及黃浦江保稅稅	一・七四	海關兩、碼頭稅一・三五兩、保稅稅正稅の三分
荷 役 其 他	〇・五〇	
賣 込 手 數 料	五・五〇	上海生絲市場の商慣習による
荷 造 費	一・七七	同上
碼頭及保稅稅	一・七四	再輸出の場合、輸入に同じ
計	三〇・三五	(戻稅を差引二六・四五兩)

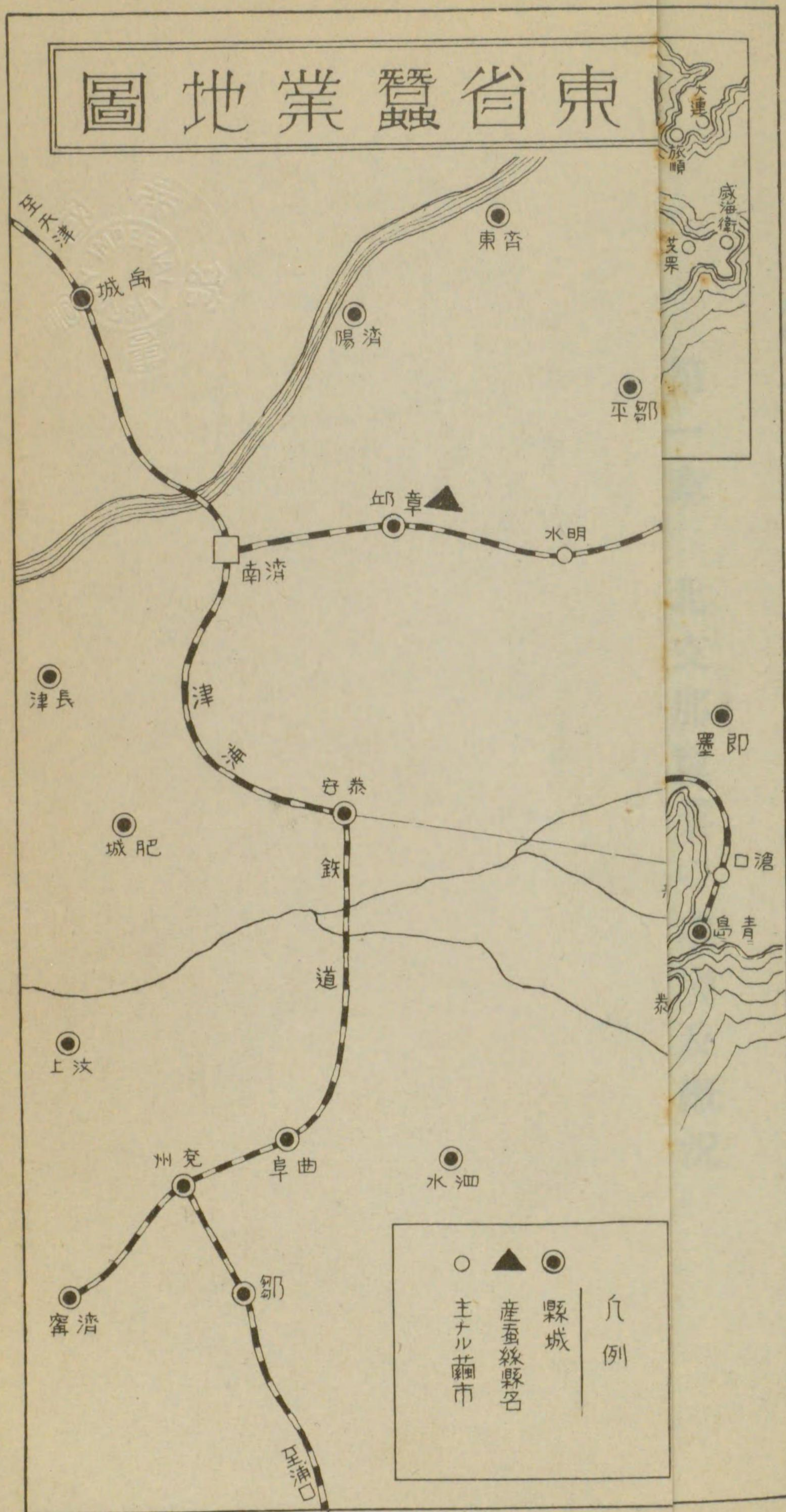
即ち上海製絲工場の白繭絲に比し生絲百斤凡そ拾兩を多く要する勘定である。

(四)金融狀況 漢口は支那主要の貿易なれば、金融機關に就いて完備せるは言ふ迄もなく、要はその通貨と爲替狀況であるが、先づ上海の標準とする九八規銀と漢口の洋例兩との關係を見るに

海關兩一〇〇兩||上海兩一一・四〇兩故に上海兩一〇〇兩||漢口兩九七・六三兩強、逆に海關兩一〇〇兩||漢口兩一〇八・七五兩、故に漢口兩一〇〇兩||上海兩一〇二・四三兩強といふ割合が即ち平價である。然しその爲替相場が金融狀況乃至爲替賣買の都合關係によつて變動することは、外國爲替と變りはない。假りに一兩の變動があつても、生絲百斤に就いては十兩方の騰落に相當するを以て之を輕視するを得ず、詰り漢口製絲業は生絲相場の上に絲價、上海に於ける外國爲替相場及上海漢口間爲替相場と、三重の危險を負ふて譯である。次に通貨は繭の仕入及工賃の支拂等は銅貨を以てするが、是の相場は常に多少の變動を免れない。試みに一九二六年七月某日に於けるその相場を擧げると次のやうである。

龍 洋	〇・六九三二五	銀元、前清時代鑄造の龍を刻せる一元に對する相場
北 洋	〇・六九一〇	同袁世凱の像を刻せる一元の相場
英 洋	〇・六九一〇	同墨西哥弗一元の相場
官 票	〇・〇六六五	官票一千文の兩相場にして大暴落の狀を見るべし
双 元	〇・二二二五	二錢銅貨五十枚即ち一千文の兩相場
折 息	三錢	千兩に對する日歩
申 票	九六九兩二五	上海兩千兩に對する爲替相場

東省蠶業地圖

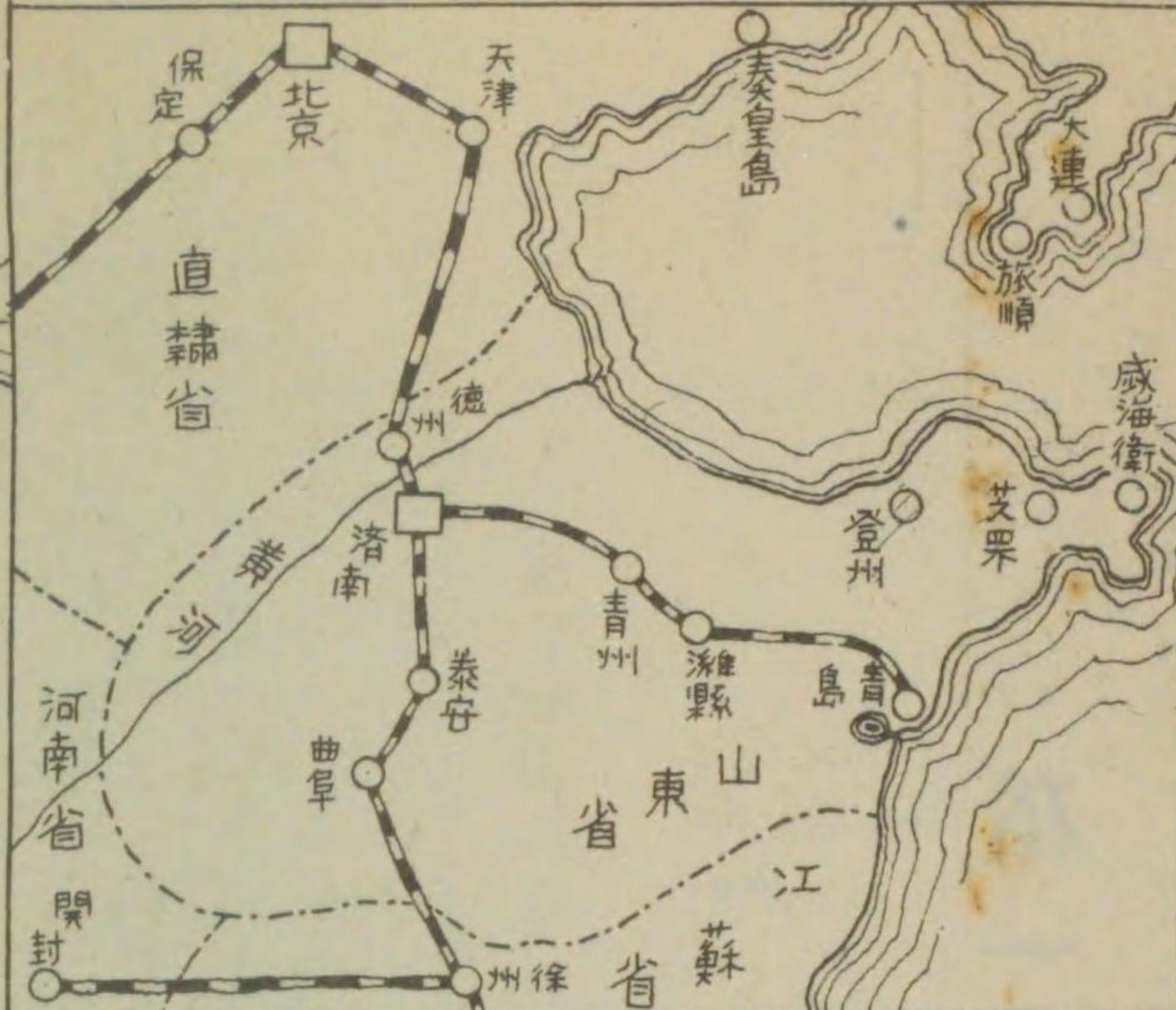
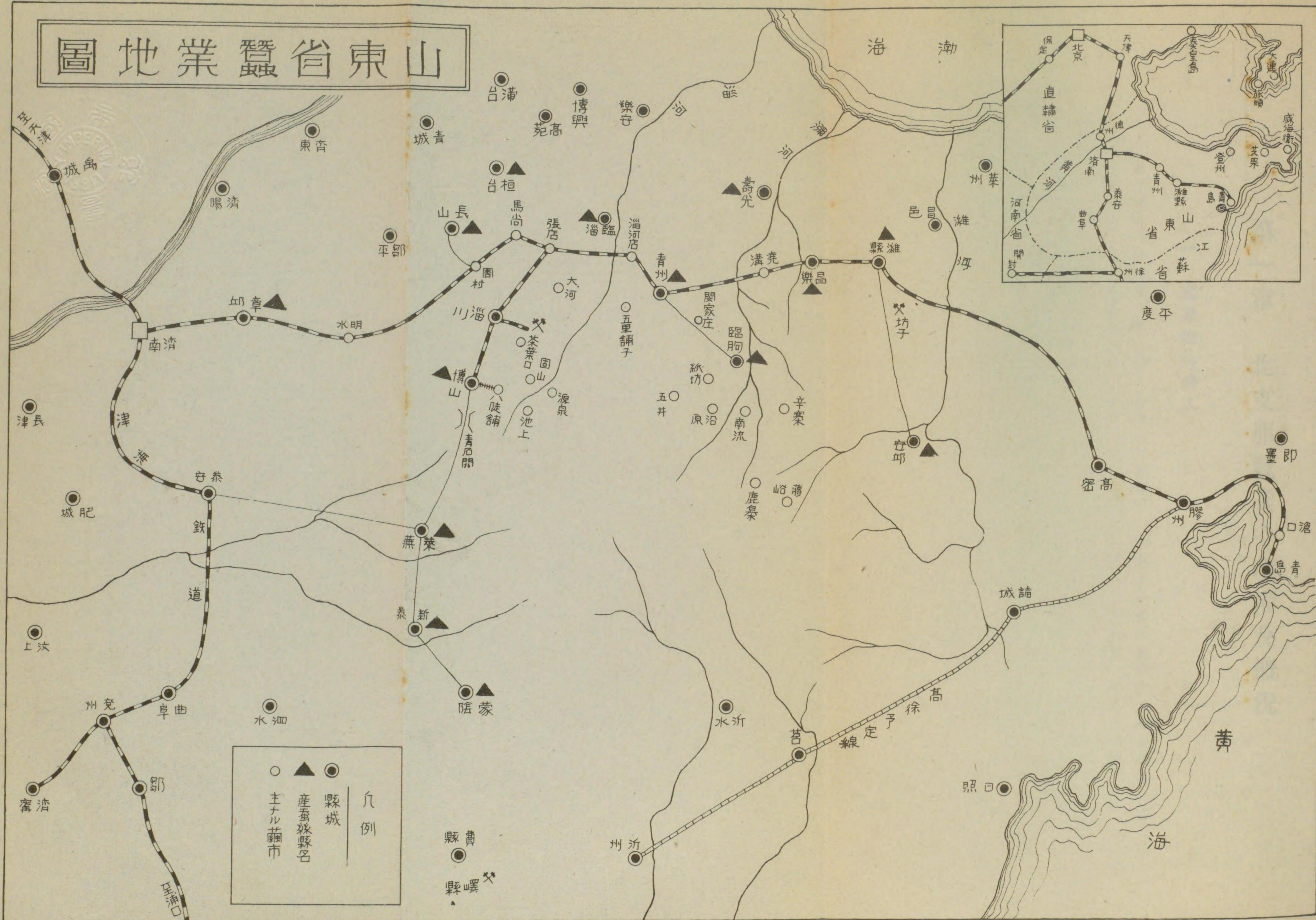


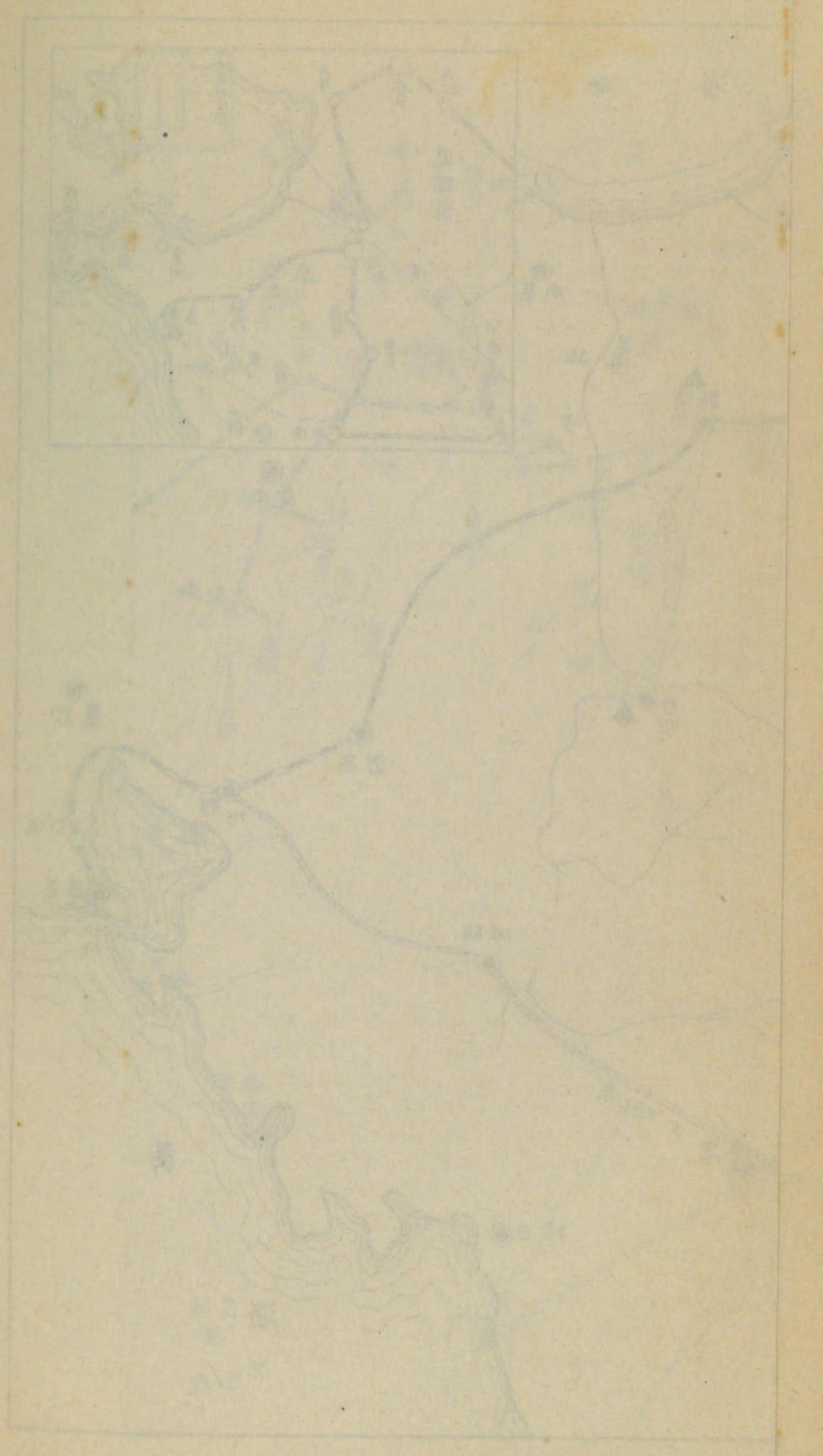
要之漢口製絲業は未だ發展の氣運に向つて居ないが既に四工場千釜の存在して居る以上、斯界の活氣を呈するに至らば全部の運轉を見るであらう。一方漢口商人にして繭の見込買付を爲すものも漸次増加の傾向にあるを以て聽ては漢口にも乾繭取引の旺盛なるを見るべく、斯くて斯業は上海方面と同様の徑路を辿り上海式製絲業の形態を採つて發展を見るであらう。

第二編 中部支那の蠶絲業

洋換	票	一〇〇三六五文	銀元一元に對する官票の相場
洋換	元	三一六文	銀元一元に對する銅元相場
票換	元	二九九文	官票千文に對する銅元相場

山東省蠶業地圖





第三編 北支那の蠶絲業

第一章 北支那蠶業の環境及概況

一 蠶業地へ向ふ

今から約三十年前膠州灣に面した全く名もない一寒村が東亞に虎視眈々たる獨乙の手に歸してから、其處に二億萬馬克の巨費が投ぜられて、居然精美類なき青島港が出来上り、續いて青島から濟南に至る二百五十哩に膠濟鐵路の開通を見るなど獨乙の勢力は駭々として此方面に加はり、山東省の將來も懸ては獨領に塗り替へそうにも見えたのであつた。然るに歐洲戰爭の勃發によつて、青島は端なくも我が皇軍の占領するところとなるや、邦人は忽ち此處に雪崩込み、沿線各地亦た邦人を見ざるなき凄しい發展振に山東省は名實共に我が勢力圏内に入つたのである。然しながら四圍の情勢は到底永く之を保持することを許さなかつた。歐洲大戰を轉機として我が對支勢力の伸長を快よしとせざる英米の反對や、戦後の世界的思潮に刺戟せられて猛然起つた支那の國民運動に悩まされて、遂に我國がワシントン會議に於ては殆ど全部とも言つて良い權利を放棄したことは今更言ふまでもないことである。斯様に山東省に於ける外國關係の變遷は最も好く近世支那問題の經緯を語るものであり、最近對支列國の歩調が頗る亂れたのも、或又八ヶ間敷い支那

の排外騒動乃至は國權恢復運動等も所謂山東問題に端を發したものと云へないことはない。而かも最近澎湃たる三民主義、孫文主義を戴く南方勢力と北方軍閥との衝突に其攻防地たる山東省は頻りに脅かされて居るのである。

借てこの時この場所に私が蠶業地を踏査すべく青島から沿線地方に向つたのは昭和二年五月十三日であつたが、内地に較べると、青島の春は餘程遅れて漸く櫻の散つたあとの一際といふ頃であつた。然し一步青島から鐵道に沿ひ奥地に入るに連れて漸次温度は高く、その西部濟南になると、五月下旬には早くも猛烈な暑氣のやつて來るのが山東省の氣候である。赤い地肌とアカシヤの新緑に強く太陽の輝いた清々しい朝であつた。大港驛を發つて間もなく、四方驛から滄口驛に亘つて、あちらこちらに高い煙突や工場の建續く光景に目を惹かされたが、此の一帶は我が紡績の一流筋が作り上げた偉大なる工業地帯で、六社約二十五萬錘に支那筋を加へ三十萬錘の工場に低廉なる山東勞働者が働いて居るのである。戦後青島に歸來せる獨乙人が台東鎮から此方面に亘つての素晴らしい發展に驚きの眼を瞪つたといふが、總じて青島占領後邦人が此處に強く腰を据えた事業と言へば恐らく工業を措いて他にないであらう。何しろ獨乙時代には工業としては殆ど言ふに足なかつたものが、現在ではこの紡績業を筆頭に、製油業(油房)は豊富なる土產落花生其他を原料に相當な發展を遂げて居るし、また製絲業に至つては蠶絲國として當然我が當業者が其處に根柢ある勢力を扶殖し、其他製粉、燐寸、洋灰及畜産加工業等數へ來れば、青島に於ける工業の發展は聊か誇るに足るであらう。

青島を離れて汽車は暫く青波打つ膠州灣の岸邊を傳ひ走り、右手には勞山々系が巖々たる山姿を現はして車窓の風光は倦かぬ眺めであるが、往時出船入船の繁を極めた膠州や高徐豫定線の起

點たる高密驛を過ぎ、西進するに連れて大陸的な北支那特有の風物が一層強く現はれ、漸く山東の田舎に入つたといふ感を味はされる。一面の黄土には涯しなく青麥がそよぎ、遠く距離を置いて土壁を廻した部落が見えたり、或は驛の近くからは砂塵にまみれた小車(一輪車)の軋る音が聞えて來る。

一體地圖で見た山東半島は硯角な土地のやうに考へられるが、半島の脊筋を爲す一條の連山は鐵路の南方に遠のいて之と並走し、その北側は遙か勃海灣に臨むまでに坦々たる平野が展開して居る。そして幾條もの河川が縱走山系から北流、海に注んで居るから、自然北支那でも氣候は比較的和を得て居る。變つた北支那の景色にも、聊かその單調に倦きる頃到着するのが、省内東端の大都會濰縣である。此處は北支の主要港芝罘や小清河の羊角溝に至る交通の衝を占めて發達した商業地であつて、人口約拾萬、大八車に蒲鉾形の幌を付けたガタ馬車を驅つて市街を見物するだけの價値がある。一部邦人には馴染みの骨董町であるが、濰縣貨と言へば、贗物の代名詞になつて居る位骨董製造の家が軒を並べて居る。それよりも見るべきは此處の市日であつて、その殷賑なることは省内隨一と言つてよからう。縣城と之に對峙して城壁を繞らした東關子との間を流れる廣漠な河原は市日になると、内地で見る縁日のやうに一面日蔽の幕が張られて、食糧品を始め日用品から農具に至るまで農家の需むるものは残らず並び立てられ、田舎から集る數萬の人出で熱鬧を極める。殊に節季を控へた市日になると人出も亦拾萬人を下らないと言ふが、この賑ひに澤山な飯食店も出れば、また今日内地では到底見られない「のぞき」といふ興行物が景氣を添へるなど、その光景は遠き時代の交易を想像せしめるものがある。斯様に市日取引は四川省でもそうであるが、北支那に於ける農民の主要な交易機關として、大抵の町や主要な村落には日を定められた市が立

つて、農家は生産品の處分や物品の買入を此處で辨ずる慣習であり、繭の取引なども最初先づこの市に於て賣買されて居る。

二 青州から臨朐縣

山東省の産繭地も東は濰縣から始るが、未だ車窓から處々に見ゆるは線路の兩側に植えられたアカシヤ位で昌樂其他の小驛を過ぎ澆溝から青州に近くに從つて、漸く特色ある桑樹が目につまつて来る。斯くて青島から約八時間の後に着くのが山東蠶業の中心地にして且つ史上に名高い青州府である。

抑々青州府は遠く周代から太公望を以て知られ、管仲の覇業を遂げた齊の國として著はれ、その故都たる臨淄の城址も此處から程遠からぬ。降つて府城(益都縣城)は明代に一時山東の首府を置かれた丈に城周十三華里に及んで居る。その西南には泰山に次ぐ名山として聞えた雲門山を始めその連山が控へて、平地に高く樓門のついた延々たる城壁と秀麗なる山姿との對照は雄大なる景趣を見せて居る。それから府城の北の方二十餘町を離れてもう一つ城廓を構へた北城といふ滿州旗人の居城がある。此處は民國革命の際にも迫害から免れ、荒されずに濟んだから今日でも依然都統が旗人四千人(二萬人ともいふ)を統轄して居る。然し民國以來官祿を離れて彼等に押寄せて來た生活難に城内の淋れ方は一通りではない。清朝三百餘年の眠に彼等は全く遊惰の民と化して、家具什器の賣喰生活を今日に續け尙且つ目醒めて居ない、此處滿人の婦女子は一般山東の婦人と異つて、纏足の風習がなく、小さい足を見慣れた眼には自然の儘なる足も却て不恰好にさへ感ぜられるが、曾て青島絲廠では此北城の女を以て女工の養成を試みたが、怠け者で遂に物にならな

たつたといふことである。それからまた北城の周圍約六華里に互る城壁の外周には幅四五十間の廣さで一帯に桑樹が植えられ、その鬱々城壁を繞る光景は大したもので、彼等が之で蠶を飼つたならば慘目な生活も餘程樂になるには相違ないが、この栽桑の大部分は桑で賣拂つて終ふなど、その一斑を推しても、清朝の滅亡亦た故なきに非ずである。

然し漢人の青州にしても經濟的には一嚮に振はぬ處で、蠶絲業を除いては商業にせよ、工業にせよ殆ど見るべきものがない。其蠶業といふも此處の奥に臨朐縣といふ山東最大の蠶業地を控へて居るから、此縣は實に全省産繭額の約三分の一を占めて居る。謂はば山東の信州たる臨朐縣はその接する博山、沂水及安邱縣の三面に互る縣境に重疊たる山脈を負ひ、僅に北方が展けて青州方面に續き、そこに袋のやうな臨朐平を作つて居る。更に地勢に就いて詳言すれば南方縣境に盤る連山に高く聳ゆるは東泰山の稱ある沂山で、この山系が分水嶺となつて南流するものは沂水となつて黄河に入り、北する彌河は勃海灣に注いで居る。即ち彌河は一名巨洋水とは呼ばれ、沂山を出てから縣城に至る迄に博山境を始め其他諸方から流れて來る支流を合せて青州方面に向ひ、その地勢は南方浙江省の産繭地として聞えた紹興地方に酷似して居る。詰り極端に自然といふものに放任されて居る支那蠶業は山川の地形が爲す氣象状態が最も蠶業に適する環境に於て處々濃厚なる蠶業地帯を爲して居ることは看過すことの出来ない點である。處で青州から臨朐縣城に至る百二十華里、一日の旅はこれまで並大抵ではなかつた、一輪車に布團を敷き、夏の炎天には之に竹の支柱を立て、日蔽を張るもの、太陽は横からさし込み易く、道は平坦なるも地肌の黄土は轍に擦されて灰となり、これが路面に堆くまつて直ぐに蒙々たる黄塵が揚る始末で、早朝青州を發つても、沙塵をまみれて縣城に着くのは陽一杯であつた。然るに此年から此間に乗合自動車が発つたといふことである。それからまた北城の周圍約六華里に互る城壁の外周には幅四五十間の廣さで一帯に桑樹が植えられ、その鬱々城壁を繞る光景は大したもので、彼等が之で蠶を飼つたならば慘目な生活も餘程樂になるには相違ないが、この栽桑の大部分は桑で賣拂つて終ふなど、その一斑を推しても、清朝の滅亡亦た故なきに非ずである。

日に數回通ひ、僅に二時間て到達するやうになつたから文明機關も有難い。お蔭で、私は今次の視察に前後三回足を臨胸方面に踏み入れた。だが乗合自動車と言つても板敷の腰掛に、窓はと言へばガラス代りに金網を張つて一見檻のやうな體裁である。而かも車道はこれまでの通路に幾分手を入れたに過ぎないから、自動車が蒙々たる沙煙を長く引いて蕩進する様子は砂漠横斷位の痛快味はある。それにしても此の間を重い貨物を載せて魚貫して行く推小車夫の群は自動車の通る毎に、あの操り難い一輪車を外らすのに骨を折つて居る様子は如何にも惨目な光景である。然しながらこの自動車を經營する益臨汽車公司と言ふが、曾て馬賊で鳴らした孫百萬といふ軍人であつて見れば彼等も文句は言へない。五月十四日の朝私は關東廳蠶業試驗場を出た千氏と連れ立つて、この自動車に揺られ中間驛なる赤澗店に下車し、そこから喬木態の桑樹が林のやうに立並んで居る間の田舎道を抜けて閔家庄といふ村に行つた。それは同年青島絲廠が沿線一帯の養蠶家に優良蠶種の配布を試み、千氏はその巡回教師といふ格でやつて來たのであるが、偶々閔氏の飼育せる蠶兒に異狀があるので見に来て貰ひたいと言ふのであつた。この閔家庄には臨胸縣内の富豪が集つて居るといふことで、村ではあるが、高い土壁を繞らした一廓を構へ、門口には常に番兵が見張り面識がなくて村内に這入れない。閔氏の家に通されてから早速蠶の話が出た。この家の夫人は蠶上手で三十年來一度も違蠶をしたことがないと言ふが、『今年は貴廠から配布を受けた蠶種を掃立てたところ此一兩日急に蠶兒の食慾がなくなつて終つた。實は配布の時の通知に絲廠からは蠶の醫者を派してあるから、病氣になつたならば直ぐ知らせよとのことであつたら何分の御足勞を願つた』と言ふ。之に答へて千氏は當惑相に『幾ら醫者でも蠶に盛り薬はない』で大笑になつたが見れば蠶兒は狭い蠶室に澤山掃立て、極度の密飼に行はれてあつた。それか

ら私共は此處の番頭を案内に立て、附近村落に於ける配布先養蠶家を視察すべく田舎道を通つた、乾き切つた黄土には一面生々した青麥や、遠く白雲の彷彿山東の田舎は光線の強い鮮明な光景である。農家は皆部落に固まつてその附近には桑樹を始め槐、柏、楊、青楊が鬱々茂つて居るが、各家の構へは孰れも土壁を繞らし、門口には黒塗の木戸を立て、頗る秘密主義に出來て居る。訪問者は先づ門外から家人を呼び立て、その出て來るのを俟つて門内に入らないと飼犬に猛然と吠え立てられる始末である。田舎旅行の第一日は閔氏の厄介になつたが、山東では客の歡待に先づ持出されるは強烈なる高粱酒である。續いて菜には豚肉のあげものや冷肉等が主で、魚類は太刀魚其他鹽物に過ぎない。それから野菜類には韭、蒜を始め若芽の鹽漬等で、之を南方の豊富なる材料に舌鼓を打つことは望めない。殊に米飯の代用たる饅頭(又は饅々)に至つては内地の饅頭に餡のない、頗る大形なもので、慣れたものには「パン」にも優るといふが、新參者にも物足らぬ感がある。だが之は米食ならぬ山東人の最も嗜好するもので普通百姓になると、之を口にする事さへ數多くはない。彼等は通例自ら作れる麥を賣つて、更に安價なる高粱包米、(玉蜀黍)を購ふて常用し、滿洲から此種の雜穀が相當移入されて居る。

閔家庄訪問からほど經た上簇近くの時期であつた。私は臨胸縣城から一輪車に曳子を付けて、その西方五井へと向つた。此處に至る三十五華里は彌河の一流に沿ふて上り、一帯に互つて桑樹の繁茂を見るが、殊に其中間にある紙坊附近になると、畑の中に一抱もある桑の大木が整然林の如くに並んで居る光景には先年蠶業試驗場の菊池氏と行を共にした折に驚かされたものであるが、全く以て斯界の偉觀たるを失はない。

五井はもう博山縣境に寄つた山際にあるが、秋のやうに澄み切つた空に圖體の大きな禿山が風

蝕されて様々な奇姿を聳かして居る風光は一寸内地では見られない、此處から逆に道を東に轉じて丁度縣城の南に當る沿原まで二十華里の道は左方に傾斜を持つた緩かな丘陵を幾つも横切り小車の振動に尠からず疲勞を覺えて沿原に着いた。

此處は地名の示す通り大きな池に沿つた鎮で、池には泉が滾々と湧きその清冽な水は勢よく河に流れ出て居る。一體山東省には處々に斯様な砂漠のオアシスにも似た泉があるが、その水は河に流出ると再び河底に吸込まれて終ふ。この沿原の池には其の周圍に山東では見られない竹林が生茂り、水面には野鴨が嬉々として浮んで居た。私はこの幽邃の境に見惚れて、暫く佇んで居ると、池中に一人の男が裸體になつて、網で魚を獲つて居た。網は細い絹絲で編んだ捕鳥に用ふる「かすみ網」に似たもので、其捕り方も之と同様に池中にこの網を縦に張つて、一方から魚を追立て、から網を上げると、銀色をした「はや」が澤山網の目に鱗の邊を引括られて居たが、面白い捕方もあるものと思はれた。この沿原から南流を経て辛寨へと縣の東南隅まで一巡するに臨朐縣は蠶業地であるばかりでなく、核桃、干柿、杏仁、及山楂等果實の産出が尠くない。もう一つ蝸子が名物である、尤も山東の人家に集ふ蝸子は之に咬れたら人命にも關はる害毒を持つが、臨朐の山間草木に棲息するものは食用として珍重されて居る。斯様に臨朐縣は山東省でも割合に良い處であるが、惜らくは此地脊面と兩側に深い山岳を負ひ、其處は自然山東名物たる土匪の屈強なる盤据地となつて居る爲めに、常にその襲來に脅かされざるを得ない。

三 張店驛と周村鎮

青州から再び鐵路を西するに見渡す如には處々立通しの桑樹が現はれたり、殊に鬱々村落を繞

る樹木の一半は桑樹で大體周村驛までと、博山支線に互る沿道一帯は亦た主要なる蠶業地である。進み行く汽車は淄河の鐵橋を渡り、右窓間近く孤然と立てる金嶺鎮の鐵山を過ぎると間もなく張店驛である。此處は博山支線分岐の地位を占め、邦人によつて發展を遂げた日本人町である。そこで張店と言はず、少しく沿線一帯に於ける邦人の状況を一瞥するに、先づ擧ぐべきは鐵山關係の人々で、これには獨乙經營の炭坑を繼承した坊子や淄川を始め、或は博山の如きは民間有象無象の山師が一攫千金を試みた處である。それから濰縣一帯の葉煙草とか桐材の買付もあるが、その發展に看過することの出来ないのは厘錢の買出であつた。何しろ歐洲戰爭當時銅の暴騰に一厘錢を鑄潰せば含有銅若干とかで、其買入は頗る儲るし、誰にでも譯なく出来る商賣であつたから、當時豪勢幾千人といふ人間が深く田舎に入り込んだものである。是等厘錢成金者によつて、その根據地たる張店驛の如きは日夜絃歌の聲を絶たぬ繁榮を來し、そのお蔭で美しい街並も出来るやら、小學校、病院等も建てられると云ふ發展振りであり、青州にさへ一時在留邦人は三百人を算ふる有様であつた。然し斯様なボロイ儲が何時までも續きやうがなく、財界の變動に加へて鐵道還附以來沿線の邦人數は著しく減つて終つた。だが今尙ほ沿線の主要各地には多少邦人の居住を見るのは何と言つても厘錢取引のお蔭であつて、現在彼等の商賣が中には公然とは云へない禁制品であるにしても、將來日本人として對支發展は一つには斯く内地に踏入つて根據を据えることとてなくてはならない。處で現在山東の田舎に目立つた活動をして居るのは日華蠶絲株式會社である。青島絲廠に次いで數年前張店には張店絲廠を設け其他青州周村及博山等に出張所を置いて山東蠶業に雄飛して居るのは頼母しい。張店絲廠經營の任にある有賀保氏は他面張店日本人會長として、この町の爲めに働いて居るが、私は數次の滞在に於て此土地に尠からず親しみを覺えた。そ

れは長江沿岸を始め支那各地に在住する邦人が僅に拾數人に満たない處に於てさへ、往々にして見苦しい角突き合を演じ勝な状況なるに、此處張店の邦人には和衷協同の氣風が溢れて居るからであつた。

張店を過ぎて次の主要驛は周村である。然し此町は夙に鐵道未通の昔から商業の中心市場として長山縣下の一鎮に過ぎないが、堂々たる城壁を構へて、その商業的勢力は遠く直隸及河南省の一部に及んで居る。されば山東の内地貿易に關係する者には看過すことの出来ない土地柄であると同時に北支那に於ける唯一の機業地と言ふべく省内に於ける座繰絲は悉く周村に出廻り、その絲市街には生絲問屋が軒を連ねて居る。また一製絲業地として數本の煙が聳え、或はまた上海との通商が繁くて上海向爲替相場が建つなど、活氣横溢せる町である。長山縣城は周村の北方二十華里に位し、此處を過ぎて青城縣まで従前自動車に通ふて居た程で、道路は比較的拓けて居る。私は一日人力車を備ふて縣城に至り、更に附近村落に互つて蠶業視察を遂げたが、支那旅行に於て田舎道を人力車で駆け廻つたのは、此處と南方の無錫位のものである。その日は生憎風が強く一望遠く青々とした麥隴の彼方には砂煙が立上つて白雲のやうに動き、聽て砂塵は天日を蔽ふところの北支那ならではの見られない光景に接したのであつた。周村から返りの車中であつた。言ふまでもなく此の鐵道は當時張宗昌軍の手中にあつて、有力な財源の一つであるから、武装せる警務隊が鐵道を警戒して居たが、車中にこの隊員數名が一團となつて頻りに談合して居た。之に耳を傾けると巴里は如何だとか、馬耳塞はどうのと彼等には似合ぬ佛蘭西の話であつた。聞いて見れば彼等の中の一人が歐洲戦争の時に苦力として彼地に出掛けて滞歐三年、一通りのフランス語は出来るといふのであつた。

四 博山から萊蕪縣

轉じて張店驛から約二時間博山支線を辿るに、汽車は漸次上り具合となり、その上り詰めた處が博山縣城で、三面に山を背負つて居る。抑々博山は彼のリートホーヘン氏が天與の工業地であると銘打つた土地柄丈けに京料で聞えた硝子類を始め陶器製造の町である。同時に博山支線は運炭の爲めに出來た鐵道であるから、淄川を始め博山一帯には到る處に炭鑛が拓かれ、驛へは一輪車を始め驢子や騾子の背によつて盛に石炭が搬ばれて居る。従つてさらぬだに沙塵の路面は粉炭に汚れ、路傍に遊べる小供や人夫の顔はまるで黒人のやうで、見るからに炭鑛地らしい。

然しながら一度淄河の上流方面に踏入ると臨胸及萊蕪縣境に互つて颯々連亘する山岳地帯は壯麗と言ははんか、將又清寂と評すべきか一種變つた此幽境は私も未だ曾て見ざる所である。此方面へは往復三日の旅であつた。王某といふ蘭仲買人を案内に縣城から西へ二十五華里八徒鋪までは石炭を運ぶドロツコ線によつて玩具のやうな機關車を牽かれて行つた。此處から更に西へと歩き出すに四邊は狭い高原帶で、山の傾斜地には石を積み上げては猫額大の畑を作り、その周圍に桑を植えて居る。部落の周圍を高い土壁で堅く固めた村を幾つも通過して三十華里、固山鎮に至れば重疊たる山岳が間近に見えて來た。此處を過ぎると暫らくして淄河の上河に出で、之に沿ふ泉河頭といふ村に着いた。

村の直ぐ後の山嶺には二つの山頂に壁を繞らせる寨があり、村人の土匪襲來に對する避難所に備へて居る。一方對岸に矗立する山の前半面に互つては珍らしく草木が生茂り、麓にある泉からは多量の水が流れ出で、その水を延いて蔬菜類を栽培して居るなど、水氣に乏しい此山間には仙

郷にも思はれた。この村から行手には遠く臨朐縣境に互つて山又山が折重り、淄河はその間を縦ふやうに奥深く消えて行く眺望は忘れ得ない印象であつた。その山河の光景たるや無數に並立つ山の孰もが兀として赤裸々の山姿を聳かし、溪谷を流るる淄河といつても河には一滴の水もなく、平かな白砂の河底がうねつて居る。この木も水もない深山幽谷とも言ふべき此地方の景色は蓋し天下に隠れたる偉觀である。

山に富む博山縣を南して青石關チンシクワンといふ要關を一つ越えたとこれまでの地方とは春合に南に向いた地方である。しかもその萊蕪、新泰、蒙陰諸縣は亦た蠶業地として見通すことが出来ない。けれども當時此の地方は土匪の跳梁甚しく、此處へ出掛けた購買人も一時は引揚げなければならなかつた。青州や周村方面の繭市を一巡した私は六月十三日博山に至り、此方面の情勢を窺ふに馬夫や小車夫等の萊蕪縣への往來は變りなかつた。土匪に對し臆病にして且つ敏感な警戒を持つ彼等が行くところなれば、よもや危険はあるまいと、驢の支那鞍に厚く布圍を積んで萊蕪縣に向つたのは朝の九時半頃であつた。縣城から直ぐ山に懸つて、道は溪谷の河底を上り行くこと二十華里にして道は遽かに急勾配となり、堅い路面の岩を鑿つた段楷を登れば、有名なる青石關である。登り來た道を顧みれば、深い溪谷のやうな底から、小車夫の群が重い一輪車を推して登つて來るのに懸命の勞力を拂つて居る。この有様は前年四川の旅に目撃した激流に溯つて曳船する水夫達の苦闘にも似て痛ましく感ぜられた。

青石關の關門を抜けると、前方はガラリと變つて丘陵を持つた平野が展開して居る。夏の炎天に細かい足取りの驢に搖られて、幾つかの坂道を上下して、漸く八十華里を進み午後三時北苗山ペイミョウサンといふ馬宿に着いた。博山を發つてから長い間一回の休養も與へられなかつた驢は此處に至つて

漸く鞍を卸され頻りに秣を食つた。その間私は何時とも知らず午睡に耽つて、この宿を發つたのは五時を過ぎて居た。南苗山、王家莊等を通過し小義の峠に掛つた時は日は全く暮れたが、峠の前方には萊蕪平野が開け大汶水の流が白く河原を引き、附近に聳える山々も南畫を見るやうに美しい眺めであつた。峠を下りて小義といふ村から先は汶水の支流に沿ひ、柳や白楊の立つた沙地を進む程に、颯と十三夜の月が出た。折柄一帯の畑はもう高粱が尺餘に伸びて風に靡いて居た。或る村の傍を通ると、土壁で鎖された樓門の見張番から誰何されなどして時間は經つが、驢の歩みは仲々捗らず、漸く萊蕪に辿り着いた時はもう夜の十一時も過ぎた。博山から百六十華里のこの行程に於て、弱々しい驢は途中僅に一回の休息をしたのみで、その耐久力には侮り難いものがあつた。萊蕪縣城は衙門や廟の立並んだ屋敷町のみで、割合に小さいが、附近の田舎は案外に開けた良い處である。縣城の前方は津浦線方面の坦々たる平野に續き、天下の名岳泰山が鬱然と雄姿を聳かして居る。その泰安驛まで百華里は人力車が通ふそうである。私は此處から更に進んで新泰蒙陰縣の蠶業地を踏査する希望であつたが、未だに土匪の出沒は絶えず、加へて徐州方面の戦線からは北軍の敗兵約千人が萊蕪に逃げ來んで恟々たる物情であつたから再び博山縣へと引返した。そこで少しく土匪に就いて語るに、由來山東は匪賊の發生地と言ひ或は其土匪は三千年來の歴史を持つと言はれる程に、彼等は眇たる狗盜の徒ではない。先年臨城驛に列車を襲撃し拾數人の外國人を捕へて世目を震駭かしたのも、この山東土匪である。即ち彼等は數百人或は數千人と集團し先に述べたあの博山、臨朐、沂水の諸縣に盤る山岳の天險に據り、各地に移動して荒掠を恣にして居る。萊蕪滞在の折も先日某村が之に襲はれて拾數人の者が人質として山寨に連れ行かれ、内數名の貧乏人が戻されたと聞いた。人質となつても金を奪るのが目的であるから、命には別條

はなく、却て寨内では財神に扱はれ、鴉片や其他の馳走で歡待するそうであるが、金にならなければ、勿論酷い目に遇ふ。それから臨朐縣などもこの春は慘々に荒された。然しながらこの討伐に軍隊の力を藉りても、徹底的な剿匪は望めない。元來支那では兵士と土匪とは同じ穴の貉で、單にその處を異にして居るに過ぎない。従てその討伐も八百長で、結局住民は討伐費の名目で、更に軍隊から絞りとられる有様である。山東の住民が土匪を紅胡子ホンシと言つて、何よりも恐れて居るのは道理であるが、之に備ふるには金品を陰匿より外に方法はない、現に博山から萊蕪へ繭資金を送るに弗銀を鹽魚の間に挟んで天秤に擔ひ、或は落花生油の壺に入れて驢馬に積みなどして人目を避けて居た。荷物が夕刻萊蕪に着いてからも、その夜は家の庭先に放置して朝になつてから、屋内に搬入し、その置場所の如きも毎日替へて居るといふやうに苦心を拂つて居る。それからまたこの春匪風の猖獗を極めた折には農民は落花生其他の農産品までも地中に埋没陰匿せる爲め、落花生は芽が吹いて終つたと言ふことである。斯様に山東省の農民は軍閥からは公然と誅求せられ、一方土匪に脅かされて居る始末であるが、最近のやうな亂世に當つては、敗兵や失業者が更にこの群に投じて土匪の數は寧ろ殖える一方で、之が爲めに産業の發達を著しく阻止して居ることは言ふまでもない。現に軍閥の飽くなき誅求と土匪の横行に堪え兼ね、萊蕪方面の住民が住み慣れた土地を捨て、滿洲に新生涯を開拓すべく、その移住民は最近夥しい數に達して居る。博山の田舎に於て道途私は一輪車に老人や小供を載せ或は貧しい家財家具を積んで、遠く落ち行く人々の群に遇ふて聖者ならずも心を傷めた。同時に近時戰亂の圈外に立つ滿洲の凄じい發展振りは言ふまでもないが、其の原因が誰の力によるかを辨へずに、兎角奉天其他で盛に排日騒を演つて居る處は矢張り支那人である。興味の深かつた萊蕪の旅から沿線に出て見ると、先きに我國の山東出兵や南軍の

海洲占領に次いで、孫傳芳の數萬の軍隊は益々南軍に壓せられ山東省に逃げ込み、その先鋒隊が濰縣や青州にウヨウヨやつて来て、青島との交通は何時中絶せぬとも限らぬ形勢に迫つて居た。そこで私も命冥加の盡きぬ裡にと若干の調査事項を残して、六月十九日夜行で青州を發ち、四十餘日振りに青島に戻つて現代文明に觸れたのであつた。しかも七月下旬歸朝間もなくして、破竹の勢を示した南軍が徐州の戦線に破れ、續いて蔣介石の失脚に、今又敗軍の將たる孫傳芳が堂々と南京に入城せんとして再び旗色が悪いやうに、支那の軍閥は相も變らず三國誌その儘を演じて居るのである。

五 北支那を代表する山東蠶業

胡沙吹きまく北支那は今日經濟方面に於て南支よりも遙に遅れて居るが、之を往古に溯るに抑々黃河流域は支那文明搖籃の地であり、遠く堯舜の世から國家の體系を備へて永く文化の中心は北支那にあつた。當時山東省の如きも所謂九州の一として孔孟を始め幾多の聖賢が足跡を残した地方である。従て産業方面に於ても早くから見べきものにあつたことは言ふまでもないが、養蠶の起源として支那史上に傳はるところの『有熊氏が育蠶の法を授けて人民に衣の道をしめした』といふ故事に間違がないものとするれば、北支那は實に蠶業の發生地と言ふべきである。假りに模糊たるこの傳説の穿鑿を措くも此の地方が支那に於て最古の蠶業であることは争はれない。即ち北支那に於て現在處々の山間僻地に行はれて居る養蠶は、恐らく數千年來纏綿として上古その儘の業態を傳へて居るものであらう。其の育蠶状況に至つては如何にも古代めいた原始的なところがある。そこで廣く黃河流域に就いて、奥は陝西、山西から河南、山東及直隸諸省を經

めて「北支那の蠶業」の現状を一瞥するに一産業として重を占めて居るのは僅に山東一省に過ぎないが、其他諸省に於ても養蠶は多少ながら隨所に行はれて居る。例ば陝西省からは西安挽手といふ座繰熨斗が漢口に出廻るし、又漢口から輸出さるゝ屑絲年額一萬數千擔の三割は河南省産で占めて居るに見ても、斯業の存在を窺知される。更に民國以來戰禍に見舞れない模範省として有名な山西省の如きも、私は去る大正四年の夏その首都太原から南下して省の南部を縦斷河南省に出たことがあるが、その沿道各所に養蠶を實見し、高平縣の如きは此地方に於ける座繰絲の取引市場として相當賑つて居た。

試みに此の古い歴史を持つ北支那に就いて幾分なりとも沿革を知る資料として、一八八〇年支那海關特別報告書から天津及芝罘海關管下の蠶業状況を抄録すると次のやうである。「天津海關管下の蠶業は取立てて言ふべきもなく、蠶絲品は當港輸出品目にも現はれて居ない。それでも絹物の生産は三十年前までは當時より幾分多かつたと言ふが、汽船航路の開通以來南支から優良にして安價な絹製品が移入した爲めに、其の生産は一層減つたものゝ如くである。大體各地生産の生絲は皆その土地で消費されて終ふが、河南省は山西、直隸の兩省よりも遙に盛で、絹製品を多少隣省に移出して居る。直隸省に於ける養蠶地としては永平府から山海關に互る地方、北京の北西、桑塘及大名府下の易州、曲州等であり、其他平泉州の老枝子及建昌縣地方には蒙古人によつて野蠶が行はれて居る。河南省にあつては魯山縣及南陽府を主要地とし、其の織物は魯山綢、南陽緞で知られて居る。續いて山西省は潞安府から川綢、魯綢を始め、光澤に富める生絲絹といふ織物を産し、また武甯府及澤州にも養蠶は行はれて居る」と、次に芝罘海關からは當時已に柞蠶及座繰黃絲各一千擔の輸出を見た程で、其の管下たる蠶業状況に關し稍詳細の記述がある。即ち「先づ蠶絲の種類

に就いては家蠶によるを小繭絲といつて黃白の二種があり、野蠶のそれを大繭絲と呼べれ、之に水絲 Water-reeled と旱絲 Dry-reeled がある。其他變つたものには極く少量ではあるが、花椒といふ灌木を飼料としたものに椒繭絲なるものがあつて、その製品には香氣を帶び、之を藏するも虫害に犯されないと云ふ。それから野蠶を桑で飼つたものに桑繭絲といふがある。之れは山東固有のもので、その絲は粗硬にして一名天來蠶と呼ばれ魚網に用ひられるといふ。野蠶絲の生産年額は約七千擔に達し、之を原料として昌邑、濰海、及棲霞諸縣に互り、織器臺数は約九百五十臺を數へ盛に繭紉が製織されて居る。生絲の消費地は唯一つ青州府で六機綱、洋縐、綾子及素綢等が織出されるが、織機数は僅に拾臺、生絲消費額も約七十擔に過ぎないといふやうに、此報告には家蠶に關する記述が閑却されて居る傾があり、之によつて見るに當時山東の斯業は家蠶よりも野蠶が重きを爲して居たことが窺はれる。尙又此の報告には生絲の生産額推定に就いて、固より信據するには足らないが、家蠶絲に於て直隸三〇〇擔、河南七、〇〇〇擔、山西二〇〇擔及山東省一、一〇〇擔、其の合計八、六〇〇擔、次に野蠶絲として直隸七〇〇擔、河南三、〇〇〇擔、山西五〇〇擔及山東省七、〇〇〇擔計一、一、二〇〇擔の數字を擧げて居る。然して其後青島港の現出、膠濟鐵道の開通に伴ひ、山東省の蠶絲業は漸次輸出向に發展して、現在青島は北支唯一の家蠶絲輸港たる地位を占むるに至つた。試みに最近拾箇年に於ける同港の生絲輸出額を擧げると次のやうである。

山東生絲輸出額 (青島港)

(單位 擔)

大正六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年
一六	四三	三八	一八四	四三	一九二	一九〇	一七一	三三

白座繰絲

第一章 北支那蠶業の環境及概況

白器 械 絲	八四	五四	一五六	二五三	三九九	四九四	四八六	五六四	七六七
黃座 線 絲	一、〇七九	三、一八二	二二六	一、七三二	一、六六六	六二七	一、二六四	五八一	三三二
黃器 械 絲	九七六	九五五	五六一	一、四四九	一、七四三	一、三六七	二、五九九	二、四六七	二、六八六
黃白再線 絲	101	一八二	三元	四三	—	—	—	—	—
計	11,406	37,766	1,030	3,659	4,101	2,669	4,453	3,783	3,803
乾 繭	二四八	二七八	九八五	三〇七	九八六	六五六	三,二四七	一,八七七	三,〇三七

即ち山東省の平均輸出年額は凡そ三千三百擔に當り、僅に之あることによつて北支那の蠶絲業なるものが注目されて居る現狀である。そして全省産繭額は之を南支に較ぶれば未だ江蘇省無錫一縣の産額に匹敵する位のもので、支那の總輸出額から見ても僅にその百分の二を占めるに過ぎない。然し斯様な輪廓ではあるけれども、山東省が北支那を代表し、之に連る廣漠たる黃河流域が蠶業に好適する要件を多々具備する點に鑑み、其處に山東蠶業に對する調査研究の價値があり、單に現在の生産額のみより論じて之を看過するを許さない。

六 生産要件と一般産業

斯くて山東省が北支那の蠶業に重きを爲すに至つた一般原因を考ふるに海洋の影響による氣象や交通の便あること等を看過することは出来ないが、先づ斯業の根柢たる生産條件を窺ふに世上一般に支那蠶業に對して唱へられるところの尠大なる地積とか氣候の適順乃至は低廉なる勞力といつたやうな要件は支那に於ても、山東省に於ても最もよく當嵌つた批評であらう。其面積は約五萬六千方哩、略ぼ我本島の七割に當り更に黃河流域五省に互る總面積に至つては廣袤四十萬哩

ザット我が新販圖の一倍半に擴がつて居る。しかも其の耕地は悉く畑地であつて、現に桑樹は之に間植されて居る現狀に見ても、將來その増殖は如何様にも無限に擴張され得るであらう。次に省内人口に至つては支那に於ても密度は最も高く、一方哩に五百乃至六百人と云はれ、此處から供給される所謂山東苦力は一名物と言ふべきである。是等の勞働者によつて彼の滿洲の原野が著々開拓され行く活動振りと云ひ、或はまた往年歐洲戦線に拾數萬の軍夫が繰出して勞働方面に偉力を發揮したのは、主として山東の勞働者であつた。此の勞働狀況に關しては後述に譲り、山東省が豊富にして且つ低廉なる勞力を持つて居ることは言ふまでもない。其の一端として田舎の苦力の賃銀は一日凡そ三十仙、之を四川省の二十仙に比して稍高きも、上海地方の四十仙よりは遙に廉い。更に養蠶に密接なる關係を持つ氣象狀態に就いては雨が少く大氣の乾燥する特徴は濕潤を忌む育蠶には全く羨むべき天恵である。之を既往氣象表に據るに、通例七八月頃を雨期とするも、年間を通じ雨天日數は青島に於て約七十日、濟南に至つては僅に三十日前後を數へ、全年の降水量の如き廣東の二千耗から上海の千五百耗に比し、僅々四五百耗に過ぎない。温度は固より各地によつて高低區々たるを免れないが、先づ青島の如きは海に突き出た尖端部に位して居るから、平年夏季の最高は攝氏三十二度、海からの涼風を受けて絶好の避暑地を爲し、冬季と雖も最低零下十一度と東京に比し低温三度に止まつて居る。此處から少しく奥地に入つて濰縣地方になると、一帯が高臺で、冬季は海よりの海風に寒暑共稍其の度を超えるが、蠶業の中心地たる青州地方へ行くと、餘程緩和され、夏季最高三十四五度、冬季の最低零下十五度といふも、その寒暑は割合に淺きよといふ。進みて張店地方に至つては愈々酷熱酷寒の大陸的氣候を帯び更に西端部の濟南地方は五月半に早くも最高三十四五度に上昇して夏季の最高は三十五度を示し、冬季は零度を下る十

八度といふ處である。其他博山を始め山手地方に入つては夏の暑さは稍酷しきも、冬は概して温暖である。即ち全省を通じての温度は比較的寒暑の差甚しく、また晝夜の變化も稍高低あるが、之を育蠶の上より見て、雨期にして且つ高温なる七八月の候を避ければ、春秋兩季は頗る斯業に好適し、就中秋季の如きは今日未だ秋蠶の飼育を見ないが、之には全く理想的な氣象であり、天候に好適さるゝことの至大なる支那蠶業に於て山東省の氣候は確かに天恵の一たるを失はない。例年蠶作の如き之を南支に見る程の著しい豊凶の差がないのも、一つにはこの恵れた天候に據るであらう。斯く土地、勞力及氣候等の自然的要件より觀察して山東蠶業は謂はゞ三拍子揃つて居るから、之に一度改良獎勵の法を得たならば、斯業の將來に躍進を來すべきは言を俟たない。然し此の種の施設が支那として當分望まれそうもない現状にあつては、蠶業と一般産業の關係を考慮に入れる必要があらう。そこで試みに青島の輸出貿易を見るに、大正十四年に於て第一位を占むるは落花生實とし、其の額千五百七十八萬兩を輸出し、加ふるに落花生油の五百四十九萬兩、石炭の四百五十八萬兩に次いで生絲が三百十九萬兩、それから葉煙草二百四十九萬兩、鴉片二百十萬兩といふ順序で、其他獣皮類から白菜に至るまで殆ど皆農産及天産品でないものはない。殊に落花生及其油の如きは輸出總額高五千九百四十餘萬兩に對し三八・五%の多きを占めて居るに拘らず、生絲は未だ僅に五・五%に過ぎないことは、山東省が落花生栽培に適する河畔、山丘の砂礫地が如何に廣大であるかを示すと同時に、將來斯様な土地は一層有利なる桑園に轉化さるべき見込の多いことを語るものである。即ち山東省に於ける産業は未だ農蠶魚鹽を主本とする自給自足的な農業國たるの域を出でない。其の程度の低いだけ産業發達の過程から見ると、將來山東蠶業が副業としての地位は今日よりも遙に重きを加ふることを思はねばならぬ。

第二章 蠶業

一 桑の種類及仕立方

山東省の蠶業は先にも述べた通り、支那上古期蠶業の直系を繼いたもので、その業態はもう一つの古典的な蠶業地たる四川省のそれに幾多の共通點を認められる。例へば桑樹に就いて純桑園のないことや、臨朐地方の柿樹を見るような大木は之を均しく四川省保寧地方に見る所であり、或は又蠶種が共に黃繭三眠蠶を主とし、殊に周村地方の繭と四川省潼川産とは甚だ酷似して居る。それからまた四川省は極めて多濕なるに、一方山東省は乾燥地帯を爲す氣象上の相違は自ら其の育蠶法に異なるものあるべきも、頑丈な蠶架を組立て廣大な蠶座を設けることや、上簇法に樹枝を以て籤を作ることなど、期せずして一致して居る。其他市日の慣習による繭取引にしても、また製絲業に於て四川省の所謂木車揚返と山東の小績絲なる製絲經營とは等しく器械繰絲法を單純化した同巧異曲のものである。固たり山東と四川とは其の距離遠く離れて山東地方に於ける黃土の平野と四川省の赤質土からなる丘陵性高原とは其事情を異にするに拘らず、兩省の蠶業を比較すれば斯くも業態を同うすることは、畢竟斯業が往古に溯つて其の系統を一にして居るものと考へられ、支那蠶業史の研究にとつては興味ある材料である。

一般論は此位に止めて先づ第一に桑は山東蠶業に於て特筆すべきものゝ一つで、現今廣く行

き互つて居る彼の魯桑の原産地であることは論を俟たない支那では省名の別稱に、例へば河南省を豫、山西省を晋と呼ぶが如く、魯は山東省を指し、魯桑の名も此處から出たものであらう。然し之を冠した本場の魯桑は一般南支や本邦で言ふ魯桑に比べると、葉柄痕の付き具合と言ひ、其他の點に於て別種と思はるゝ程に違つて居る。それは地殻の構成に於て中央亞細亞から吹き寄せた黄土の堆積からなる地質と、非常な乾燥地の環境に育立ち、喬木態に仕上げられたものであるが故に、他地方には見られない特徴を持つて居る。然し其の桑も省内固より一様ではなく、其の種類は詳細に研究すれば色々あらうが地方人の呼稱に従つて區別すれば樅桑、魯桑、接桑、湖桑及花桑等がある。

樅桑 實を蒔いて生えた野桑で、其儘手を加へずに成長させたものである。山桑のやうに葉は小形で、澤山に樅がなるところから此の名稱が出たものであらう。桑園の外周若くは路傍に見受けるが固より多くはなく、稚蠶用に供せられて居る。

魯桑 實生苗を畑に移植して徐に据接を行つたもので臨朐地方は殆ど皆此種に屬して居る。葉面は滑かで、葉形は稍小さい。更に其の形狀によつて地方人は新稍先端部の葉姿が鶏の冠に似たものを鶏冠魯桑と言ひ、羊の角のやうに細長なるを羊角魯桑、更に細長く尖れるを驢耳魯桑と唱へて居る。其他樹皮の色により黃魯桑、黑魯桑等の名稱に分けて居るけれども、是等の區別は適確なる要領を得なかつた。

接桑 周村方面に最も多く見受ける桑樹である。是は其の名の示す通り接木を施したもので

であるが、前記魯桑とは葉形に於て歴然異つた形態を持つて居る。前者に較べて新梢の伸長は稍短い傾があるが、老木になつても葉形は頗る大きく、長徑は八九寸に達し、水分豊かに柔かな葉質は浙江省の紅皮大圓桑といふに酷似して居る。

湖桑 南支に於ける桑苗の本場浙江省より學校や其他機關の手によつて移入されたものであるが、既に山東省としては魯桑及接桑の二種があるので未だ廣く普及を見ない。

柘葉 四川省嘉定地方の如く、山東省博山縣下に於ける固山地方には柘樹を植へて三眠までの飼料に充てゝ居るものがある。更に變つた飼料としては稚蠶期榆樹の葉を以て飼育するものもある。

そこで是等の桑を一本の堂々たる偉大なる巨樹に仕立てるには長期に互つて山東獨特の技能が加へられ、就中巧妙なる接木法の如きは聊か驚嘆に値するものがある。其の育成法を分ければ壓條法と接木法の二つである。先づ壓條法は江蘇省無錫地方に見るものと同様に、新稍先端の葉を残してその枝條を地上に横へて、先端部近くに土を盛る法で臨朐地方に間々之を見受けた。然し此處に言ふべき接木法で、之は袋接と皮接の二法になる。先づ順序として苗木から述べむに勿論苗床を作つて春期實蒔を行ふが、何しろ水氣に乏しい地質であるが故に、その伸長は甚だ遅く加へて肥培には構はぬから二三年生でも苗木は至つて細い。これが移植には通例麥畑を充てられ、麥の畝數十餘列を隔てゝ一列に間植されるから、二三十年の後には臨朐地方に見るやうな株間は數間の距離を持つた整然たる巨木の排列を見るのである。移植された苗木

は二三年までの間に適宜接木を施すが、先づ袋接といふのは六七月夏芽が相當伸びた頃に(一)苗木(即ち砧木)に對し其梢端を適宜の箇所まで切つてから(二)其の切斷部より下一寸まで樹皮を剥ぎて材質をまる裸とする。それから一方(三)之と略ほ同等の太さを有する夏芽を採つて凡そ一寸の長さに剪りとり(四)之を口に啣へて樹皮を損しないやう中身の材質を抜取つて終ふのである。するとこの樹皮は管のやうになるが(五)この管を先に剥いた砧木の裸となれる部分に嵌める譯である。先年私と行を共にした菊地技師は之を内地に傳へてサツク接と命名した。斯様に此の方法は幾分手數であるが、百接百中殆ど失敗することがないといふ。

次に芽接法といふのは私が今次の視察に於て始めて實見した方法であるが、萊蕪縣を始め周村其他地方に廣く行はれて居る。この接木を施すべき箇所及時期は前者と同様で、之を一實例を以て説明するに、先づ(一)砧木の梢端を適宜斜に裁切つて其處に皮接を行ふのである。その枝の太さは周圍一寸を示したが、太くて數寸までのものが多い。そこで(二)この枝先から凡二寸五分を小刀を以て樹皮を裂きたる後、更に(三)樹皮と材質部の間を裂き開いてから其間へ接すべき皮を深く差し込むのである。而して(四)其の皮を得るには夏芽を長さ一寸二三分に切斷してから、(五)之を裂き擴げて中身の材質を取除く、さすれば皮は長さ一寸二三分、幅七八分の長方形を示し、此際豫め(二)の場合に皮の中央部に纏て發芽すべき一芽を持つやう切斷し置くことは勿論である。斯くして(六)之を前記(三)の砧木の皮を剥いた間に皮部の内側を材質に當て、奥の方へさし込むのであるが、此の時に皮部に持つ芽の位置は裂目の間にあるやうにし、終りに(七)此處を

乾いた麻皮又は桑皮を以て堅く縛して置くのである。即ち此の二つの方法は等しく皮接であるが、後者は前の袋接に比して操作が稍簡單であり、其の成功率も悪くはない。加へて袋接は枝梢の太いものに施すことは出来ないが、後者の皮接に至つては少々太いものに對しても自由に行ふことが出来る。私が萊蕪で實見せるものは數年を経た幹周五六寸の桑樹に對し、その十數條に分派せる枝梢の先端に悉く此の芽接を施してあつた。斯くて年々成長するに従ひ、樹勢に應じて適宜枝梢の取捨を行ひ、喬木態とするが、その仕立方も仲々巧妙に作られ理想的なものになると、樹の太さは幹周三四尺から高さは三四十尺に伸び、枝條は地上より高さ十尺位の處から横に擴がつて樹姿は圓錐形の體形を爲して居る。

其の收葉量に就いては接木後發育良好なるものは、大體三年目に五斤、五年目に三十斤、十年目に八十斤、十五年目には百三十斤、二十年目に至つて二百斤と年々枝條の繁茂するに従つて收穫量は増加して行くが、葉は稍縮少して硬化し來る傾がある。然し最も威勢のよいのは二、三十年まで、樹齡五十を過れば漸次老衰して來るが、中には一二百年と思はしき老樹が巨體をうねつて居るのを屢見受けた。

整枝は特に之を加ふることなく、桑刈の際に行はれて居る。即ち育蠶期に家の男は大抵夕刻梯子と鉋を携へて日々所要の桑を樹に就いて枝振りを眺めながら適宜枝條を伐採して行くから自然に整枝がつく譯である。

二 桑樹の分布と新植

されば桑樹一本を仕立てるに長い年月を要するが、元來山東の農夫は植樹には比較的意を用ひて居る。それは勿論兀山荒野に植林をするといふではないが、農家の周囲や附近の河原には常に青楊樹、白楊、及槐樹等を植付けて、之を立派に仕立上げ、家の梁や柱等の建築材料に充て、居る。従て殺風景な田舎は部落を繞る樹木の繁茂によつて僅に潤ひを添えて居るが、この一半を占むるは桑樹である。孟子の曰ふ「五畝の畦植ゆるに桑を以てす、帛すべし」の教は三千年後の今日に至つても變りはなく、桑樹の分布は原則として、先づ人家の周圍に之を見、次いで主たる蠶業地に入つて部落の近くにある畑地や河川に沿ふ沙地に及び、山岳地にあつて傾斜地の畦畔に植えられて居る。省内桑樹の分布状況は先づ瀾河の流域を第一に、その臨朐、益都(青州)、昌樂及壽光諸縣に互り、次で淄河及孝婦河の流域は臨淄、博山、淄川、長山及桓台の諸縣とし、變つて汶水の流域に於て萊蕪、及新泰及蒙陰諸縣と大體三つの流域に分たれ、それも上流山手地方に多い。

各地の状況を見るに、先づ鐵路によつて青島から青州までの沿道に桑樹を見るは稀なるが、青州驛を下りて臨朐縣に至る路傍の一帶には各村落を中心として畑の中に魯桑の喬木を夥しく見る。それから臨朐縣城の南門を出て、西南五井に至る三十華里の間は一支流に沿つて、その一帶は最も濃厚なる密度を帯び、之を遠望すれば一面鬱々たる桑林に蔽はれ、しかも巨大な魯桑が整然立ち並んで居る壯觀は省内隨一である。この南岸から南の縣境に掛けては傾斜地面で

栽桑の密度も疎らとなり、桑樹も概して低く小さい。青州驛から周村を経て明水驛に至る凡そ五十哩の沿線地帯は平野地の蠶業とも言ふべき地方で、廣い平野に點在する村落を圍む樹木は過半桑樹であり、青州に寄つた淄河の附近は概して近時の新植に係る若木が多いが、張店驛を過ぎて周村地方になると、所謂接桑の老樹が農家の附近に尠からず巨姿を現はし、前記臨朐地方と共に省内有数の蠶業地たることを示して居る。それから博山支線に沿ふ淄川大崑崙附近にも澤山の巨樹を見るが此の地方は周村方面に流る、孝婦河の上流に當り、その範圍に屬して居る。

博山縣城から淄河の上流地に掛けては全くの山岳地で、桑樹は四川省に見るが如く、山の傾斜面に作られた畑の畦畔に植えられ、或は河川に沿ふ砂地に處々立派な純桑園を見るが、一般に新植されたものが多い。更に博山縣から山一つ越えた萊蕪を始め新泰、蒙陰縣等汶水上流の別天地は家の周圍に間々老樹を認むるも、新場所とも言ふべき地方であるから隨所に新植を認め、そこで省内の新植状況を見るに、元來山東蠶業は歐戰以來端的に言へば、青島絲廠の活躍に伴ひ諸方面に面目を新にし、自然桑樹も著しく増植を見たことは事實である。然しながら前いふやうに桑樹が地質及氣候の關係から伸長が甚だ遅緩である爲め、その新植が顯著には現はれて來ない。加へて特に苗木の供給地と言ふべきものがなく、多くは農家個々の手に育苗が行はれ、僅に言ふべきは濟南の省立農業專門學校が苗木の配布を行ふ位のものに過ぎない。即ち前記博山及萊蕪地方の新植は之に仰ぐもの多く、その苗木値段は博山地方に於て接桑一本銅貨五枚、魯桑三枚、及湖桑二十四枚と聞いた。

三 桑園の經濟

之を南支や内地に見るやうな純桑園のないことは、それだけ未だ斯業の幼稚な程度を語るものであるが、然し蠶業を副業としての經濟的見地から言へば、桑を人家の周圍や畑に點々自然木のやうに植付ける栽桑の法は最も堅實な遣り方である。繭の値段が幾何に暴落しようと、桑を引抜く必要もなければ、肥料代を拂へない破目に陥る心配もない。勿論それは土地の利用が穀物の生産に注かねばならぬ古い産業時代のしきたりではあるが……従て桑生産費調査の如きは全く難物である。先づ第一に桑の肥培管理にしても、特に意を拂つて居ないと言ふよりも寧ろ苗木に對して肥料など與へる必要がないといふのが農民一般の觀念である。僅に臨胸地方の如く、桑を畦間三間、株間二間位の間隔に植付けて、其間に麥粟を間作するやうな稍桑園の體を爲す地方に於ては通例一畝地(イモツ)約六百坪に對し、糞土四十車(一輪車)、豆餅六枚を給肥する割合であり、單なる麥畑なれば糞土十車、餅四枚にて足るといふから、差引糞土三十車及豆餅二枚が桑に對する施肥量と見られる。其の肥料代は糞土一車(二百斤)に就き一吊二百文約十七仙、豆餅一枚一元二十仙の單價として、前記一畝地に對する桑の肥料代は七元五十仙の概算である。今假りに一畝地の桑樹を百株と看做し、一株の收葉量を平均二十貫とすれば、一畝地六百坪の收葉量は二百貫(十二擔半)となり、葉桑一擔の肥料代は六〇仙に當るを知る。次で一畝地の施肥耕耘に要する勞力は凡そ二十人(工)を要し、一工二吊二百文(約三十仙)として、其の勞銀六元の三分の一を桑

に加へられたものと假定すれば、葉桑一擔の勞力代は十六仙を示し、強いて言へば之に前記肥料代を加へたる七十六仙といふが、葉桑一擔當りの生産費に關する大體の見當であらう。

そこで一般肥料に就いて見るに、南船北馬北支那には南支に見るやうな水草河泥を得るに由なく、また推肥も少く、その主なるは人畜の乾糞及糞尿を含める糞土である。南支と違ひ北支那の農家には便所の設がなく、僅に家の一隅に土壁を圍める數坪の場所に豚を收容し、家人も亦此處で不淨を便し、騾驢も夜間は此の中に繋ぐ状況である。そして是等の地面に放たれた人畜糞は乾燥地のことゝて直に乾いて終ふから、その表土と共に之を掻き集めて貯藏し或又四川省に於て犬糞を拾ふが如く、老人小供が路面に横はる畜糞を拾取つて居るのを暫見受けた。此の乾糞及糞土に次いで主なるは豆餅で、省内多産なる落花生の搾油は隨所に行はれ、自然その豆糟は肥料若くは家畜の飼料として廣く用ひられて居る。

斯様に山東省の桑樹は喬木態であるが上に、その管理肥培が殆ど放任されて居るから、氣候關係によつて收葉量に著しい増減を來して居る。例へば同年の如きも當初掃立量の減少に繭の減收を懸念されたが、桑葉の著生は案外良好で收葉量二割増を傳へ、桑相場も高値を見ずに作柄は大體平作に終るを得た。而して將來產繭額に急激なる増加を期するには、根刈桑園の設置といふことが考へられるが、之に關し少しく其の得失を窺ふに現在のやうな根深い喬木仕立は北支に見舞ふ早魃、晩霜乃至嚴寒による枯死から免れ、或は黃塵に葉面がまみれる憂もないであらう。然し根刈仕立にしても、沙塵による葉面の汚損は麥に見ても大したことはなかるべく、それ

に周村及青州を始め、地下水は高い地方であるから、根刈桑園が必ずしも不適ではあるまい。現に山東とは一衣帯水、之と略ぼ環境を同くする關東州内に於ける根刈桑園の成績は悪くはない。唯問題は桑の病蟲害であるが、これとても現在の喬木仕立にあつては、その被害を蒙ることは尠い。之に就いて特に言ふべきは春期新芽の頃に發生する尺蠖の被害である。これが驅除としては老人小供が竿先に箒を結び付けた竹竿を携へて樹幹を叩き、その振動によつて蟲の下り來るを箒で捕へて居るのを暫見受けた。それから夏芽の伸びる七月中旬から青蟲が發生して喰葉、八月上旬葉裏に巢ひ、化蛹發蛾して枝條に産卵し、其の被害は相當に甚しきものがあるが、未だ夏秋蠶の飼育を見ない今日農民の之を意に介するものなく、始ど放任されて居る。即ち桑害の甚しきは此の二つだけで天牛の如きは殆ど之を認めなかつた。

轉じて土地に關する經濟資料を擧げると、先づ一畝地(凡そ我二反步)の地價は中には三百元位の處もあるが、通例耕地としての平均地價六百吊文(凡そ八十五元)を示し、之に對する小作料は上等地百吊文から下等地は十吊文見當さへあるが、その平均凡そ四十吊文(凡そ五元七十仙)と見て大差あるまい。次に地租に至つては最近軍閥が頻りに誅求を企て、甚しきは數年先の分までも取立てる處があると聞くが、規定に従へば土地評價一兩銀子に對し十六元の割合とし、大體一畝地の評價は〇・二兩銀子に該當するから、其の地租三元二十仙を示して居る。之より推して根刈桑園の如きも、其の生産費は極めて低廉なことは想像に難くないが、今關東州に於ける實例に徴すると、一畝地に千六百本を植付けて五年間に要する投資は地代、肥培及勞力等約六百圓、六年目以

降毎年の經費は凡そ百三十圓の概算を示し、之に對する收葉量春新梢付六百貫、夏秋純葉二百七十貫、計八百七十貫に達し、一貫匁當りの生産費は僅々十五錢に當つて居る。而して此の數字は直に之を山東省に適用して大差あるまい。現に目的は違ふが周村の北の方青城縣はその縣城の周圍凡そ四哩四方は一望見渡す限りの桑で、しかもそれは根刈仕立で、畦幅四間の間隔凡そ四間置きに一直線に連つて居るといふ壯觀なものであるが、其の桑條を以て竹材の代用として、盛に桑細工を作つて居る。之に見ても他日養蠶家の間に根刈桑園の設置を見る曉こそは北支那の蠶業が俄然面目を一新すべき時であらう。

四 桑葉の賣買

栽桑の將來は兎もあれ現狀にあつては農家は其の附近に生ゆる幾本かの桑樹を限度に育蠶に當つて居るが、それにも拘らず、桑葉の買賣は支那蠶業の一特徴たる例に洩れなく、仲々盛に行はれて居る。それは天候による桑葉著生の良否や拙劣なる育蠶技術から減蠶の多寡とか或は掃立量に對する打算的な手加減も加はつて常に桑葉に對する需要を生じ、之が爲めに時として桑の需給は調節を失し、突飛な騰落を演ずることがある。桑の買賣は先物取引よりも大抵は主なる村落に毎朝立つ桑の市に於て取引が行はれて居る。其の時期は稚蠶用嫩芽の如きも全くないことはなく、一貫匁四五元の高値にあるが、實際取引は三齡期からで、相場は一斤建とし、或は盛なる蠶業地に於ては二十斤(和貫)の凡そ四貫匁を一包として之を單位に相場が建つて居る。

之に就いて昭和二年五月中に於ける各地桑相場を挙げれば次のやうである。

場所	月日	一包の値段	和百斤の換算元價	場所	月日	一包の値段	和百斤の換算元價
青州閔家庄	一四日	四、八〇〇 <small>文</small>	二・七六 <small>仙</small>	同 南流	二六日	一、六〇〇 <small>文</small>	九二 <small>仙</small>
青州北關	一五	五、五六〇	三・二〇	同 辛寨	二八	三、〇〇〇	一・七二
同	二四	一、五〇〇	八〇	同 南流	二八	二、八〇〇	一・六〇
同	二五	二、〇〇〇	一・一六	博 山 縣	一九	四、〇〇〇	二・二八
臨胸紙坊	二六	二、八〇〇	一・六〇	周 村	二二	一、四〇〇	八〇
同 五 井	二六	二、〇〇〇	一・一六	長 山 縣	二三	一、二〇〇	六八

即ち同期の桑相場は當初一包四五吊文に生れ需要の旺盛なるべき壯蠶期に入るも、殘桑を到る處に見る有様であつた爲めに、相場は斯くも漸落歩調に終つた。之を平均して和斤百斤一元五十六仙の安値を示して居る。而して是等の桑は皆葉桑を以て取引されるもので、之を二十斤宛籠に入れ小車に積んで市場に搬ぶ。青州北關大橋に立つ桑市はその大なるものゝ一つで、一帶の河原には毎朝五時から八時頃までの間に買賣兩者が集り大に賑ふ。買人は澤山な籠に竝べられた桑を選ぶに、鷄冠桑よりも魯桑を希望して居る。斯様に桑葉の供給が潤澤なる年柄は平穩であるが、一朝桑不足に陥るやうな時には、水路の四通八達せる江浙地方と違ひ一層補給がつかぬから、桑相場は暫々桁はづれの高値を出すことがある。即ち大正十三年に於ける葉價の如きは和百斤十元から十八元といふ記録を示した。そして斯様な年柄には色々な悲劇が起つて来る。その或者は法外な桑高に堪えずして柘葉を給し、甚しきは綠豆を粉末にせるものを飼

料代りに蠶兒に撒布するものもある。それから桑泥棒が多くなり、之が爲めに桑の持主は恰度西爪畑に張番をするやうに大きな桑樹の下に麥稈でテント形の番小屋を建て、見張りを怠らない。この盗みをやるのは家婦が多く、不幸露見するや所謂面子メンツを失ふて大抵は自殺するのが世の常と聞くが、それにも拘らず桑盜の種が盡きぬらしい。私が去る大正十三年の六月山東視察の折にも之に就いて次のやうな悲喜劇を聞いた。

桑値が高くなれば蠶を捨て、桑を賣るといふ勘定高い連中のあることは何處でも變りがないらしい。此年山東省は筵棒な桑相場の爲に或る養蠶家は壯蠶期に入つて到々蠶を路傍に捨て、終つた。處がその蠶が附近の粟畑に這ひ上がつて、あたり一畝に互る粟の葉を悉く喰ひ盡して終つたので、之を發見した被害者から當時粟に對する損害賠償の請求といふ珍無類の訴訟沙汰が起つて居た。更にもう一つの悲劇が周村の田舎で演ぜられた。これは或る家に年寄と若夫婦があつた、彼等は支那の風習として同じ一戸の家の内にあつて銘々經濟を別にして居たのであつた。そこで年寄夫婦は今年相場が減法に高いので蠶を捨て、桑を賣ることに決めた、然るに息子夫婦の方では、これ迄折角飼つて來たものであるから是非共繭を作りたといふ反對の意嚮であつた。或る日の夕刻老爺は桑を賣らんものと自分の桑畑に檢分に出掛けた、すると偶然桑樹の上に人が乗つて桑を盗んで居るのを認めたので、老爺は亂暴にも携へて來た鐵砲を以て矢庭にその黒い影に向つてズドンと發砲したのであつた、そして家に歸つてから家人にその話を傳へると、傍にこれを聞いた媳は吃驚りして老爺諸共倉皇と現狀に驅けつけて見れば思ひ掛けなくも、打つて見れば我子なり息で樹下には息子が死體となつて横はつて居た。之を見た媳は悲嘆やるかたなく到々

井戸に投身して死んで終つた。續いて老爺も悲觀の極首を縊つて自殺し、跡に残るは唯老婆一人のみとなつたといふ、まつたく作り話の様であるが、事實として一時山東の田舎は此の話で持ち切つたといふことである。

五 蠶種と蠶の種類

山東省では蠶のことを通稱蠶米兒ツァンミールと呼び、その種類は言ふまでもなく祖先傳來の黃繭三眠蠶が大部分を占めて居る。然し一口に黃繭蠶と言つても單純ではない。その或ものは毛蟲のやうに黄色の班點を持つ頗る野性に近いものもあれば、蠶體の色模様も變つたのが雜然混つて居るが、土民はこの内唯黑縞或は飛白を帶べるものに對し花蠶カヅツといふ名稱を附して居るに過ぎない。詰り農家は年々自家に傳はる蠶を自ら採種するが故に蠶の種類カヅツの如き深く問ふ必要がないからであらう。

從て山東省には特に蠶種製造業といふものがなく、南支の無錫地方同様に自家の優繭を選んで、之を桑皮紙或は布片に採種するのが原則である。然し盛なる臨朐や周村地方には種繭又は蛾の買賣が普く行はれて居る。私が臨朐縣下沿原の一茶店に憩ふて居た時のこと、其處へ一人の男が少量の繭を入れた手提籠を大切そうに携へてやつて來たのであつた。私は不圖その籠の繭に手を觸れたところ彼は聲をなして怒つた。よつて彼にその理由を聞くと、この繭はツァンミー蠶米と稱し、某村から高い錢を出して買つて來た大切な種繭であつて、例年某村に優良

繭があると聞けば其處から繭を買つて來て採種するといふのであつた。

採種の法に至つては各自少量のことゝて簡單にして特に言ふべきことがない、そして蠶種の大さを示すに矢張り八兩凡そ和百匁の種繭から得たものを八兩蠶種と稱するやうなしきたりがある、蠶種の貯藏に就いて酷暑の季は之を風通しのよい涼所を選んで居る。その場所といふのは通例門構を爲す黒塗の木戸には本邦のやうに小さな家根が設けられてあり、その梁へ蠶種を吊し置き、秋に之を取入れて屋内の天井に吊下し、次いで十一月から櫃内に收めて越冬して居る。

更に蠶種に關し獨乙が青島を占領してから伊佛より蠶種を取寄せ、之を沿線地帯に配布したと聞くが、今日その系統と思はる産繭は確かとは見出し難きも、濰縣に出廻る安邱産は黃の四眠蠶にして頗る大形な繭で、恐らく之に屬するものと推せられる。次いで白繭種に就いて周村地方に出廻る黃繭には大抵一二割の白繭か混じつて居るが、この白繭は黃繭系に屬すべきものであつて、普通白繭蠶種としては前清末學校其他獎勵機關によつて南方系の白繭種が移入されたが、是は南支で言ふ新元種である。しかも白繭に對しては民國九年の頃から上海筋製絲家が買進むやうになつてから、萊蕪を始め各所に蠶種製造所が出來て白繭が殖えて來た。續いて此期青島絲廠が試験的に優良蠶種の配布を企つるあつて山東の蠶種も漸く近代化せんとする兆候が現はれて來た。

六 蠶室と蠶具

育蠶に就いて其の道具建から述べると、先づ蠶室は勿論居室を使ふ外はないが、蠶兒の成長に連れては彼等の寝場所までが之に陣取られて終ふ。そして最も盛な臨朐地方に至つて漸く蠶室兼用に作られた納屋を見る。家の作りは概ね土壁又は煉瓦壁を以てする平屋建である。この土藏式の建方が詰りは大氣の乾燥甚しく其他大陸的な自然の環境に適順する所以であらう。しかも家の構は秘密的で、大抵木戸を這入ると直ぐ正面にもう一つの壁がつい立代りに屋内を遮りその白い壁面には福といつたやうな縁起のよい文字が書いてある。此處を廻ると石疊のついた院子(内庭)がある。其の正面が客廳のある母屋から兩側には所謂兩廂房子(リヤンキョウサンツ)が建竝んで居る。家の床は孰れも三和土ではあるが、母屋のそれは大抵二三尺の高さに設け、敷石を上つて直ぐの間が客室に充てられて居る。それから其の奥に寢室があり、此處が最も多く蠶室に使はるゝ部屋で、之によるも育蠶が全く婦女子の仕事であることが解る、だがこの寢室は所謂坑子(カウジ)に塞がれた手狭い場所である。坑子といふのは高さ二三尺、幅三四尺及長さ六尺位ある泥造の寢床で、これが壁にそつて部屋の兩側若くは片方側に据付られ、ばそれで部屋は一杯である。そして床上に蓆子(シヤツ)アンペラ筵を敷き、之を直ちに蠶座に充てるものを最も多く見受けた。此の部屋には一方の壁に唯一つ障子張りの格子窓を開けて、光線を探るが、飼育期中はこの窓に黒い布を張り、また部屋の入口には幕を下ろして終ふから、室内は暗く換氣の良くないことは言を俟たぬ

が、何しろ飼育量は多くはないし、大氣の乾燥や湿度の變化を防ぐ見地より、蠶室として一概に難すべきではない。

然し本場の臨朐地方に至つては養蠶の規模もズツト大きく、蠶室は前者よりも廣い納屋に頑丈な蠶架を組立て、殆ど部屋中一杯に廣い蠶座を張つて居るのは見るからに大陸的である。此納屋はやはり土壁若くは煉瓦建の土間で、窓は唯一方の側に設けられるに過ぎないが、廣さは大抵拾數疊敷はある。そこへ蠶架を組立てるに、農家には備付の臺木や二三寸角の横木等一式揃つて居る。先づその臺木は長さ六七尺ある太い角棒の兩端に△形に作つた脚を付けたもので、其の形は橙子(シヤウジ)腰掛臺に似て、高さは五尺位ある。之を室の中間一二箇所に立て、それから兩側の壁には同等の高さの所に穴を穿ち、是等を支點に太い横木を二本渡して紐で結付けたる後、其の上に蠶座を敷いて居る。その組立の頑丈なことは二三人の婦人が蠶座の上に腰を下ろして行ふ除沙擴座の作業に堪えて居る。尙ほ横木は上下二段に構へ、兩者の間隔は下段に於ける上述作業に差支なきやう三尺位隔たつて居る。轉じて蠶具を見るに各地一様ではないが、その特色とするところは元來山東省は産竹に乏しいから、その代用に柳や桑の枝條を用ひ、しかも是等の用具は自家製が多い。其の蠶具を左に列擧して見よう。

桑刀(鉞) 小形の鉞で、桑條を刈るに鎌は全然用ひない。

桑籠 畑から家には條桑を搬ぶから桑摘籠は要らぬが、剉桑は桑枝で編める花籠のやうな手提籠に入れて給桑する。

牛筐(蠶籠) 蠶籠は圓籠のみで、特に稚蠶用に廣く用ひられ、之に二種ある。一つは桑枝で編み、大なるは徑四尺から小形は二尺大を示し、縁は四五寸の高で外に向つて彎曲して居る。大形一枚の値一吊文(凡そ十四仙)、稚蠶に之を用ひて居る。他の一つは博山地方に用ひられて居る圓籠で、之は高粱の穂先の稈を探り、之を一本宛數箇所に麻絲を通して連結せしめ、圓形に編みたるもので、器物の蓋などにも使はれて居る。縁には麥稈を指輪の中に圓く束ねて、針と鉄を以て高さ三四寸に編み上げたもので、銘々の家婦が手際よく作つて居る。その體裁は飯櫃の蓋の如く、底に隙間がないから稚蠶用に敷紙を要しない。

蓆子(アンペラ筵) 主として壯蠶用の箔とし、其他敷物や日覆用等農家にとつては用途が甚だ廣い。幅七尺長十尺五寸大、一枚凡そ四吊文(五十七仙)

簾子(葭簾) 葭の細稈を以て編みたる簾で、主として周村地方では之に竹竿を渡して壯蠶用の箔とし、一枚四吊文である。

連子(高粱編) 高粱稈は太くて割合に強いから、之を長さ八尺に切つて繩で編めるを連子といひ、臨朐地方では先づ之を頑丈な蠶架に載せて、蓆子の下敷用として居る。故に婦人が二三人で蠶座するも差支ない譯である。

變つた蠶室や蠶具の類を見ても斯業が未だ婦人の内職仕事たる域を出でず、僅に本場の臨朐地方に於て前述二段に組立てた段飼を見るのみで、一般に蠶架の利用が行はれぬから到底大量飼育は出来ない。然しながら若しも之を南支の如く空間利用の段飼を行ふに於ては假令蠶室が狹隘にしても、その飼育量は今日よりも倍加することは容易であるが故に、斯業の發展には先

づ桑及蠶種と共にこの蠶具の改良が第一歩であらう。

七 飼 育

然らば先づ普通農家の飼育量は幾何かと言ふに、これは收繭量で示す外はないが、平均生繭五六貫匁といふ見當であらう。その最も盛なる臨朐地方には稀には百貫位の繭を獲るものもあるが、市場に持ち出すものを見るに、大體少きは十斤一斤二百匁から六七十斤止りであつた。そして育蠶は太古の昔から婦女の業とされ、今でも室内の仕事は悉く女の手によつて居る。それだけ育蠶の術は奉仕的の心持を以て、その期間諸事を忌むは勿論夫婦の席さへ別にして慎重に當つて居るが、他面また下らぬ迷信が伴つて居る。例へば見知らぬ他人に蠶室を見せると蠶が腐るなどと言ふがそれで、育蠶状況は容易に見ることは困難である。之が爲めに私は幾度となく門前拂を喰はされたり或は強いて望めば、僅に數頭の蠶を蠶室から持ち出して來る有様であつた。然しながら、この頑迷固陋な土地柄にも時代の動きはかすかに窺はれ、此期青島絲廠が沿線地帯に優良蠶種を配布するや、之を希望するもの多く、その配布を受けた養蠶家は大抵よく見せて呉れたので、視察に尠からず便宜を得た。殊に其の飼育良好なるものに至つては喜んで見せて呉れるばかりでなく、進んで教を請ふといふ態度を示したが、また或るものは配布蠶種の方は見せるも、一方在來種のは之を嚴秘して參觀を肯ぜざるものもあつた。

よつて各地の状況を綜合し、先づ掃立法から述べんに、冬季櫃内に收めたる蠶種は四月十日前

後に取出し、之を催青するには種紙を綿に包んで布團に入れること約十日間、その發蟻せんとする頃を見計つて、板の上に奇麗な土を盛り、其の上に白布を蔽ひ、布には水を撒いて濕氣を持たせる。次いで種紙をこの布上に置くこと一日にして發蟻し、出たものを羽毛を以て紙上に掃落するのである。掃立の時期は穀雨(四月二十一日頃)に始まり五月初旬までの間に行はれて居る。氣候竝に大氣の乾燥具合が自ら育蠶を容易ならしめて居るにや飼育法は至極簡易である。即ち土藏式の蠶室は比較的晝夜温度の激變を防ぎ得て、稚蠶期と雖も始ど補温を加へて居ないし、また大氣乾燥の爲め眠期と言へど蠶座に糲糠を撒布する要を見ない。給桑は枯れ易く、私は眠中の蠶兒が身を枯葉の中に埋めて僅に頭を出して居るのを屢見受けた。故に飼育の仕事と言へば給桑と除沙の二つである。

給葉は稚蠶には之を細割し、三眠まで剉桑を與へるが、一般に蠶兒に比して細割に過ぐる傾がある。三眠起からは全葉若くは全芽を給するが、その回数も固より一定して居ない。除沙は之を擡タイと稱し、普通稚蠶及壯蠶期には一日一回(一天一擡)行はれて居る。除沙擴座には蠶兒を手に拾つて之を移し、蠶網を用ふるものは甚だ稀である。かの臨朐地方の如く、蠶架に廣く一面に蠶座を敷くものは、その上に座り込んで作業をして居る。今給桑及除沙の回数竝に飼育日數の大體を左表に示さう。

飼育日數 除沙回数 給桑回数 飼育日數 除沙回数 給桑回数

黃繭三眠蠶			白繭四眠蠶		
飼育日數	給桑回数	除沙回数	飼育日數	給桑回数	除沙回数
一 九日	書四回、夜三回	一日一回	一 八日	一日七回	一日一回
二 八日	六、四	二日一回	二 八日	八	二日一回
三 七日	七、五	三日一回	三 七日	八	二日一回
四 六日	八、七	一日一回	四 七日	九	一日一回
五 五日	—	—	五 六日	十	一日一回
飼育日數	三〇日	—	飼育日數	三五日	—
上簇より化蛹	五	—	上簇より化蛹	五	—
化蛹より出蛾	七	—	化蛹より出蛾	七	—

即ち三眠蠶の飼育日數は凡そ三十日にて足るも、年によつては三十四五日を要し、四眠蠶に比べて大差はなく、蠶兒の發育は三眠までは比較的遅緩であるが、壯蠶期に入つては急かに肥大する傾を持つて居る。斯様に山東の養蠶は一言之を原始的と評する外はないが、其の缺點として特に言ふべきは極度の密飼や換氣の不良を始め、給桑を惜み勝なこと等を擧ぐるであらう。その密飼に就いては例へば坑上アンペラの箔に、座面は稚蠶の當初よりその餘地多々あるに拘らず、蠶兒を成可く片隅に纏めて、之を極めて徐々に擴大して行くに過ぎない。そして是等缺點の爲めに絲量や收繭率を減ずること尠しとせぬ。病蠶に關し微粒子病の蔓延は今更言ふまでもないが、その最も多いのは大氣乾燥に起因するにや起き縮み病で、到る處の箔中に之を認め、次いで節高病其他の膿病であるが、南支や四川省に見る白殭病の如きは殆ど見當らなかつた。

八上 簇

蠶のあがることを山東では老食と言ふが、その行はるゝ上簇の法は原始的にして奇抜である。先づ本場の臨朐地方に於ては庭に俄造りの上簇小屋を設けるが、これは前述頑丈な蠶架と共に此の地方に於ける好一對を爲して居る。この小屋掛には先づ四本の棒を八形に張り、之を支柱として高梁稈を骨組に圓形の立體を作る。之を詳しく平面圖から説明するに中央に渡す高梁稈は徑八尺、その兩側には之と各二尺を離れて並行に稈を並べて、更に是等の棒と直角に同様三本の棒を交叉して一段となし、その各兩端及交叉點都合二十一點に高梁稈を立てる。そして前記最下段は地上より高さ二尺三四寸、之より上部に設けて各段の距離は一尺五六寸を示して居る。次に屋根は矢張り高梁稈を骨に笠のやうな形に組立て、之にアンペラ筵を覆せたものを最上部に載せ、斯くて各段に區劃されたる空隙に穀草、粟殼、或乾草、豆楷、豆殼乃至樹枝等を詰めて之に熟蠶を放つのである。最後に外周を葭簧張若くは連子で圍みたる上に繩を締めて居る。そして繩には赤い紙を付けたリ、屋根の頂邊には長い柳の枝を束ねて垂らすなど如何にも神代めいて居る。この圓小屋の容積に對する收繭量は凡生繭五六貫見當で、これが各農家の庭に一箇乃至二箇設けられるに見ても飼育量の見當はつく。周村青州等沿線地方にあつては蠶座も臨朐地方のやうな蠶架を使はぬと同様に、上簇も室内に行はれて居る。其の方法は色々あるが、材料には粟殼、豆殼及高梁殼を始め樹枝としては上簇近くなると栢楊や柳枝を刈つて之を干

して居るを見受ける。麥稈は山東名物眞田製造の需要に値段も百斤三元には賣れるから、前者程に澤山使はれないが、之を用ふるものは南支に於ける如く長さ二尺位に束ねて鼓形となしたものの十個位宛を徑凡三尺五寸、高二尺大の柳製籠に入れ之に熟蠶を放つて居る澆溝地方。更に周村地方ではこの麥稈簇を天井より竹竿を吊して敷ける簾又は蓆子の上に立て、上簇する慣習である。更に變つたのは太い高梁稈を長さ約三尺五寸に切り、其數本を中央で束ねて鼓形にしたものを室内の土間に立竝べ、此の上に長さ六尺位ある栢楊、青楊及柳楊等の樹枝を無數に重ねて蠶の巢ふ籠を作るものあり、或又是等樹枝を桑籠に入れて簇とする等其の方法は様々である。之を通じて山東省には普通農家にとつて最も重寶なる竹及藁の二品が缺けて居るから蠶具を始め上簇に至るまで他地方とは全く趣を異にして居る。

九 收繭量と農家の經濟

轉じて養蠶經濟一斑を窺ふには先づ給桑量並その收繭率を知る必要があるが、この肝心なる基礎的數字を明確に得ることは容易でない。所詮此の研究は實地試験に俟つに非ずんば農民の持つ大體の見當に據る外はないが、今之に就いて得たる若干の標準を擧げると次のやうである。(一斤は凡そ我二百匁に當る)

一、臨朐地方に於て八兩蠶種即ち種繭半斤を掃立てるに壯蠶期に至つて蠶兒は蓆子(長十尺五寸幅七尺大)八枚となり、この一枚よりの收繭量六斤乃至七斤を算し、之に要する桑葉は約六十斤

なりと。従て八兩蠶種一枚に對する給桑量約五百斤、收繭量五十斤内外の割合を示して居る。
一、周村其他地方に就き繭一斤當りの桑量を聞くに十斤といひ、十二斤或は十四斤の割合なりとす。

一、青州地方に於て今期青島絲廠が配布せる撒種に就いて某養蠶家の飼育成績は上作に近く、蠶量五匁に對し收繭量五十斤之に要せる桑量は壯蠶期一日六十餘斤の割合で、三千餘斤を買入たりと聞く。

是等の標準を綜合換算するに普通蠶量一匁に對する收繭量は和斤の十二斤半に當り其の桑量百五十斤、換言すれば繭一斤に就き桑十五斤の割合と見て大差あるまい。よつて此の數字を基礎に強いて繭の生産費に推算を試みるならば、假りに和百斤の繭に對する桑葉及勞力を評價に入れて大體次のやうである。

一・〇〇元	蠶種	種繭一斤の値段
一八・八八	桑代	桑量千五百斤、自給九百斤及買桑六百斤一元五〇仙替
一四・〇八	勞銀	男三十五人、内傭人一人三十仙替、女七〇人内傭二人八十五仙替
一・八八	蠶具	アンペラ筵二十枚(十元)籬(五元)其他損料

即ち大まかな見當から言へば繭百斤の生産費は三十五元八十四仙を示し、一貫匁當り二元二十四仙の割合なるを知る、しかも桑及勞力の大半は之を自給するものなれば、養蠶が農家として採算のよい副業たるは言を俟たない。

然らば一般農民の經濟状態はどうかと言ふに、元來此の地方は數千年來の農業國として麥、高粱、粟、玉蜀黍及落花生其他豆類等を主とし、勞力方面は集約的な農耕が行はれて居るが、所謂土地報酬の遞減法則に支配さるゝものか、收穫割合の如き本邦の半にも達しない。しかも農家の八割以上は小作農業者で占め、彼等は收穫物の内麥其他比較的高價品はなるべく賣却し、高粱粟を買入れ、之によつて粗食簡易な生計を立てゝ居る。而して作物は輪作により通例年間第一期には麥や高粱を作り、第二期に肥料の要らぬ荳類を栽培する慣習である。試みに之に就いて博山及臨朐地方に於ける一畝凡そ我が二反歩の收支計算は大體次のやうである。(一元換算凡そ七吊文)

(一)、第一作(麥)		博山地方	臨朐地方
收	穫量	二〇斗(一斗三〇斤)	一五斗(一斗四〇斤)
同	價格	四〇〇吊文、一斗二〇吊文替	三六〇吊文、一斗二四吊文替
勞	力代	四〇〇吊文、二十人二吊文替	三〇〇吊文、一人二吊文替
肥	料代	七二吊文、糞土六〇車(一車二〇〇斤)二吊二 百文替	五〇吊文、糞土一〇車一吊二百文替、豆餅五枚 七吊五百文替
差	引收入	二八八吊文	二八〇吊文
(二)、第二作(黃豆又は黑豆)			
收	穫量	一五斗	七斗
同	價格	二四〇吊文、一斗一六吊文替	一四〇吊文、一斗二〇吊文替
勞	力代	二〇〇吊文、一〇人二吊文替	一〇〇吊文、五人二吊文

差引 收入

二二〇吊文

一三〇吊文

(三)、合計 收入

五〇八吊文

四一〇吊文

此兩地方の收入を平均するに四五九吊文を示し、之より一畝の小作料を四十吊文と見て差引く時は四一九吊となり、結局一畝地即ち二反歩當りの年收は凡そ六十元に當る。假りに一戸當りの耕地を平均五畝地(約一町歩)と見て、之に對する年收は僅々三百元に過ぎない計算である、しかも是等收穫物の大部は自家の生活品として現金化されないものであつて見れば、繭を賣つて得るところの二十元なり、三十元なりの現金は農家の經濟に極めて重要なものである。

第三章 製 絲 業

一 器械製絲業の輪廓

古典的な育蠶法と對照して舊來の製絲法も是亦た頗る原始的のものであつたが、然し此の製絲業方面に關しては茲拾年間に全く面目を一新し支那の斯界に於て最も進歩を來して居る。それもその筈で爰處には片倉系の日華蠶絲株式會社が經營十年の努力を拂ひ、近くはまた鐘紡が斯業に手を初めて居るからである。之より先き一方支那當業者に就ては曾て山東の座繰絲は悉く周村鎮に集り、その輸出向となるものは芝罘を経て上海市場に送られ、所謂山東幫の手によつて賣却せられた。この取引徑路よりして自ら上海式直繰器械の移入を見、民國の初年周村に裕厚堂絲廠の設立を見たのが、抑々山東器械製絲業の嚆矢と言ふべきである。同時に之と前後して此種經營には汽罐を始め固定資本を多く要するところから、之を單純化すべく案出されたのが、小繰絲といふ足踏製絲業で、臨朐縣を中心に著しい發達を遂げたのである。從て山東の製絲業は之を(一)大繰絲といふ座繰製絲業と(二)小繰絲なる足踏製絲、それから(三)上海式器械製絲及(四)日本式製絲業と四つの業態に分たれ、其の生産年額は大體座繰絲三千俵、小繰絲千五百俵、上海式器械絲七百俵及日本式器械絲千五百俵とその合計六千五百俵といふ推算を下して大差あるまい。そこで山東器械製絲工場の一覽を左に掲げやう。

山東器械製絲工場一覽

(一)邦人經營工場(一、三三二釜、約一五〇〇俵)

工場名	所在地	資本金	釜數	概算製造高	經營者
青島絲廠	青島臺東鎮	二五〇萬圓	七三六釜	一、二七〇俵	日華蠶絲株式會社
張店絲廠	張店	同	三九六	同	同
鐘淵絲廠	青島滄口	一、〇〇〇	二〇〇	二三〇	上海製造絹絲公司

(二)華人經營工場(七六〇釜、七〇〇俵)

裕厚堂	周村	一二萬元	一〇〇	九〇	馬博亭
同豐	同	五〇	二〇〇	二三〇	李華封
恒興德	同	二〇	一六〇	一四〇	呂子生
新記	同	一	一〇〇	九〇	張敏齋
元豐	同	四	五〇	四〇	閔紀田
義泰昌	青州	五	九〇	七〇	夏潘亭
德昌福	同	五	六〇	四〇	

(三)足踏製絲業約一五〇戶、一、五〇〇俵

周村	二戶	一	一〇〇釜	四〇俵	
青州	六	一	三〇〇	一五〇	
臨朐	一四〇	一	五、〇〇〇	一、三〇〇	

上表に據るも斯業に邦人の活躍して居ると同時に周村及臨朐地方に於ける群小の製絲業者が之に對峙して相當重きを爲して居ることは興味ある事實である。

二 製絲業地と用水及燃料

即ち現在山東省に於ける製絲業地は青島を始め青州、張店及周村と孰れも鐵路の沿線地に發達を見たるは自然の數であるが、是等地方に於ける製絲業地としての適否を見るに、青島は言ふまでもなく、貿易及金融の中心地にして且つ我が勢力圏内であつて見れば、我が當業者がこの安地帯に投資を試みたのは當然である。そして之を製絲業地としての上海に較れば遜色はないが、然し近來山東鐵路が支那人側の手に歸してから繭の輸送は兎角圓滑を缺いて失費は嵩む一方であるし、勞銀の如きも紡績業の發達に漸騰を告げ、斯業の經營は之を從前程に有利な條件は見出せなくなつて來た。本來から言つて製絲經營なるものが、産繭地により多く有利な可能性を持つ點に於て青島に較べると青州が近くに臨朐といふ最大の産繭地を控ゆる地位は將來製絲業地として益々有望である。次いで博山支線の起點たる張店は交通の衝を占め、繭及石炭の供給に極めて便利なばかりでなく、勞銀も廉いが唯一つ製絲用水に悩む缺點がある。更に周村に就ては既に此地が製絲業の中心地たるは前者同様繭及石炭に殆ど間然する所がなく、加へて山東有數の商業地として斯業の經營に先立つ資金の調達に利便なる點を看過することが出來ない。今私は張店に就て用水の缺點を擧げたが、固より製絲用水に軟らかい水を尙ぶことは

今更言ふまでもないが、之を内地に於て水が軟らかいと硬いと言つたところで夫程大したことはないが、山東省に於て製絲工場地を選定するには先づ水質検査から取掛る必要がある。その水質を見るに、先づ半島の尖端部地方は花崗岩の地層からなつて居るから、青島の水の如き硬度は僅に數度を示し製絲用水として寧ろ好適して居る。處が青島より奥地に入るに連れて硬度は漸次高まり、青州から張店に至つては硬度は實に四十餘度といふ驚くべき數字に達して居る。それは張店地方が石灰岩の地盤に立つて居るからで、氣の毒ながら此處の邦人は美味しい茶は飲めないし、湯あかが夥しく貯まること……位の茶話なら未だしも、この湯で繰られた生絲は色澤が冴へ、タツチンが惡くて拜見を損することが尠くない。これには流石の日華蠶絲當事者も大分手古摺つたらしい。そこで張店絲廠には極力硬度の軟化を計る爲めに、巨大なるバームチット軟水機を据付けて、井戸から吸上げた水は先づ此のタンクに入れて之に日々鹽を投じて居る。斯くて若干軟化された水を更に管を以て庭に引き、高さ一丈位の處から岩上に瀑たせ、續いて之を曝露するに長さ三十間位ある三折せるセメント水道を設け、水は此處を緩に流れてから始めて繰湯に用ひられて居る。斯様にこの装置には多額の金を掛け、失費を惜まずに軟水を企て、居るが、それにも拘らず硬度は尙十八度を下らないと言ふ。加ふるに由來山東は産鹽に富みその値段も安かつたが、最近では鹽稅の増徴によつて張店着一噸百元乃至百十元を示し、其の消費量一箇月凡そ二噸半として約二百八十元を要して居る。

周村及張店に於ける水質は張店程ではないが、之を青島の硬度に比し遙に高い。それで此地

方の座繰製絲に於て古來鹽漬繭を使ふのは勿論殺蛹の目的から案出された方法ではあるが、他面この繭の解舒が良好であるといふのも、繭に附着せる鹽が繰湯に働いて繰絲を可良ならしむるものゝ如くである。然しこの水質の缺點を除けば沿線各地皆製絲經營に好條件を備へて居る。即ち原料繭の豊富、低廉なる勞銀に加へて燃料は近くに淄川及博山の炭鑛地を控へ、其の供給は甚だ潤澤である。炭價に就て最も便利な地位にある張店の如き噸當り粉炭四元五十仙乃至五元、切込み炭七元五十仙の相場に過ぎぬし、周村青州も之と大差ない。然し鐵路を離れては交通不便の爲めに運賃は割合に嵩み易く、足踏製絲業地たる臨朐地方の如き、青州から小車で石炭を運ぶのに、その運搬料は百斤凡そ四十仙を示し、それだけ高値となる。また近時鐵道運賃及稅金の法外なる増徴に青島に於て噸當り粉炭八元乃至九元、切込み炭十三元五十五仙、塊炭は十五元と増高を示して居る。然し之を南方上海製絲工場が同期石炭代一日一釜に付き四十仙の高値に苦しむ狀況に較ぶれば周村製絲工場に於ては釜當り僅に一日凡そ十五仙で足りて居る。

三 繭の産地と品質

轉じて製絲經營の最大要素たる繭に關する狀況から見ると、山東では繭は通例小繭シヤウキョウと呼ばれて居る。それは濰縣から半島の尖端地方には大繭ダイキョウといつて柞蠶繭が出るから、之を區別する爲めに出來た名稱であるが、小繭の産地は前者と違ひ大體濰縣から明水驛に至る中間區域で、それも鐵道から南に入つて海から遠のいた山手に多い。この小繭は繭色により黄白に分れるが、白

繭を湖繭と呼び、是は清末頃から南方より移入されたもので萊蕪及臨朐地方に於てその飼育はズツト殖えて来て、民國五六年の頃は總産繭額の一割見當に過ぎなかつたものが、最近では約三割に達して居る。然し未だ々々山東省は黃繭の産地とも言ふべきである。この黃繭は神代から傳つた儘全然改良を加へてないから、繰絲工程から見れば織度は細過ぎて解舒が悪く、念入りに挽けば繰目は僅に平均六十匁に過ぎないし、繰目も優繭で七絲を出すものは稀である。けれども山東絲殊に日華蠶絲の「泰山票」が最高級の生絲として噴々たる名聲を博するに至つた一半の原因は此の特色ある黃繭に歸せねばならぬ。然し一概に黃繭と言ふも、其の形状色澤は各種各様である。例へば繭形に見ると概して細長いが、一端若くは兩端の緩かに尖れるものとか、或は一端の鋭く尖れるものや、それから中央部の太きもの、砲弾形のもの乃至は浅い縊れを有するもの等がある。又色に就ても金黃、淡黃、茶色若くは赤味がかかるものなど色とりどりであるが、之を通して繭形は一端が尖り、色は淡黃にして内層の濃黃なる繭が最も多數を占めて居る。斯様に繭は雜駁の傾があるが、矢張り支那の特徴として各産地毎に共通せる特色を持つから、繭の品種に就ては之を次のやうに産地別に見て行くことが當を得て居る。

「濰縣産」は省内の新場所と言ふべく、此地方養蠶家の飼育量は僅少にして蠶種も區々であるから繭は中形で、その色は三眠にして白色なるあり、其他金黃、淡黃等相混じて居るが故に當業者は之を「濰縣の五色繭」と唱へて歓迎して居ない。但し濰縣の南方から出廻る「安邱産」は先に述べた通り獨人の輸入に係る歐洲系の四眠蠶と推せられ、その黃繭は非常に大粒で立派な拜見を持

つも繭層薄きに過ぎる缺點がある。之に續く「昌樂産」は濰縣よりは優るが未だ重きを爲さない。然し「澆溝産」に至つてその鮮麗なる拜見は山東繭の代表とも稱すべく、省内此の右に出る優繭はない。繭形は稍細長くして長徑一寸三四分を示し、その一端若くは兩端が緩かに尖れるものや、中央の少しく細目なるあつて、縮皺も粗密その度を得て居る。繭の色は濃淡一様ではないが、その表層は白い毛羽に蔽はれて何とも言へぬ感じを持つて居る。加へて肉付も良く之を歐洲系の黃繭に比べて敢て遜色を見ないであらう。

次に「青州産」は繭が稍小粒となり砲弾形に一端の尖れるもの多く、繭質は到底前者に及ばぬが外層は薄い毛羽があつて、解舒絲量共悪くはない、此地方に於て淄河店に出廻るものは繭質最も良く、大量市場なる五里堡に至つては廣く各地より集るから品は多少雜駁に陥る。

省内最大産繭地たる「臨朐産」に就て言へば、繭形が著しく小粒となり毛羽量に乏しいのが特徴である。其形状、色澤によつて之を分類すると、その一つは稍大粒の長圓形で、その一端又は兩端が尖り、色は著しく赤味勝つた黄色を呈し、繭面は滑かで殆どけば氣のないもの、次は前者よりも圓味を減じて淡黃なるものとあり、此の兩者の拜見は悪くはないが、茲に一つ著しく目立つて特色ある繭がある。それは鹿皋地方を始め縣境に亙る山間地から多く出廻る繭である。この繭は頗る小粒で一升約三百五十粒を算へ、しかも繭形は瓢箪形に中央が淺く縊れて一端が著しく尖つて居る。それに蛹量が割合に重くて繭衣がないから荷口を開けると、バラ／＼と落ちる感じは繭とは思へない。織度は極めて細く「十四中」に拾粒付といふ細さである。臨朐産は概し

て解舒絲量共之を他地方に比して劣り、青島絲廠の如きも近來この地方の仕入には重きを置かなくなつて來た。けれども之を繰上げた絲質に於ては最も優秀なる味を持つて居る。

變つて「周村長山産」になると繭は前者より遙に大形となり、薄い毛羽を持つた砲弾形のもの多く、拜見も立派で、繭質は概して良好である。就中長山産に至つては澆溝産に次ぐ優良繭である。繭色は淡黄なるもの多く、此中に混する濃黄のものを芝繭と言ひ、紅桃色なるを柿繭と呼んで居る。繭皺は粗にして解舒も亦た良好であるが、難を言へば大形なるに繭層稍薄き爲めに潰れ繭を生じ易いのと、この繭には大抵一割乃至二割の白繭を混じて居ることである。而かもこの白繭は黄繭と同種のものに屬し、四眼蠶の白繭のやうに純白ならず、甚しきは外觀白色にして内層の黄なるありて、繰絲上の取扱に不便を來たして居る。此地方に於ける産繭は此期優等絲を目的とせる張店絲廠に於ける繰絲成績によると、大體選繭歩合は上繭九〇%に止り、繰目七十七八、繰量は乾百匁に付き二十四匁五分といふ成績を示し、之を支那の産繭としては優良繭の部類に入るべき繭である。

この方面に「大河産」と言つて、淄川縣内に於ける淄河に沿ふ地方の産繭は張店や博山方面に出廻り一種異つた趣を持つて居る。この繭は甚だ小粒でその形状は前述臨朐地方に於ける鹿舉産のそれに甚だ酷似して居るが、實質は前者と異り、毛羽があつて蛹量は小に、繭層は比較的厚く繭質は悪くないのである。

更にまた「茶葉口産」といふものも毛色が變つて居る。この繭は兩端圓味を帯び、中央の益れた米依形であるが、小粒に過ぎる傾があり、色も濃黄を呈し、一見して山東在來の系統とは趣を異にして居る。且つその四眼蠶なる點より推し、本邦系の黄石種が移入されて、この茶葉口地方に引續き飼育を見て居るものであらう。

「池上及源泉産」は博山に於ける優良繭で、淄河の上流に互る山間地から出廻り、繭は周村地方のものに比して稍小粒であるが、色澤形状之に類して繭層厚く解舒も良好である。

轉じて「萊蕪及新泰産」に就ては繭は小形にして尖り、色は濃黄若くは金黄にして逆に内層は淡白となり、一般支那の未開地に見る原始的な繭で、自然繰絲成績も不良である。然しながら萊蕪地方は白繭の本場で、その産繭の八割は白繭で占め、之に次ぐ臨朐地方の白繭は其の全額の二三割に當つて居る。

そこで山東省の白繭を見るに、その飼育は既述の通り著敷増加して來たが、その繭質を黄繭に比較するに飼育日數の長いだけ繭層量は多く、之を一斗の繭量に於ても大體黄繭の八百匁なるに、白繭は五百六十匁乃至六百匁、之と同様に乾繭百匁の切歩は黄繭の三十匁に對し、白繭は三十九匁の割合を示して居る。従て繰絲成績に於ても白繭はたち口が良いから千百匁に對する絲量は平均黄の二十二匁に對し、白の二十五匁と一割以上の相違があるから、通例高値に買進まれて漸次増加を來したる次第である。

四 繭買入所と市日取引

北支那に於ける農家の交易は皆市日によつて行はれ、大小都市は勿論大抵の村には市が立つ有様で、村名を某々集と呼ぶ名稱も此處から出たものであらう。この市場には寺廟の廣場や街路が充てられ或は多く村端れに特設の廣場があつて柳や柏楊の立つ林間に一時の殷賑を見ることは趣がある。市日は之を逢場と言つて今日甲地に立てば明日は乙地に開かれるといふやうに、各地毎月定められた日に行はれて居るが、繭の如く短期間に大量の出廻るものに對しては、其の時期に於て繭のみの市が更に追加されて居る。そして近時製絲家は産地に繭買入所を設けて居買に努むるも農家は多年の慣習により先づ繭を市日に持出して相場を當つて見る狀況で、今尙ほ市日取引は繭の主要なる取引機關を爲して居る。試に最大産地たる臨朐地方の南部に見るも次のやうな村落に繭市が立つて居る。

繭市の場所		市日	繭市の場所		市日
辛	寨	一、六、三、八の日	寺	頭	一、六、三、八
南	流	二、七、四、九	王	庄	二、七
梨	花	五、十	楊	善	三、八
瞿	家	一、六	黄	家	四、九、一、六
朱	位	一、六、四、九	豹	伏	三、八
田	村	二、七	平	安	二、七
沿	原	四、九	下	五	二、七
運	家	二、七	五	井	五、十、一、六、三、八

宮	家	三、八、五、十	茹	家	四、九
石	佛	二、七、五、十	馬	庄	一、六
河	庄	四、九	朱	家	三、八
鹿	泉	一、六、三、八	洛	莊	四、九

斯様に繭市は各地到る處に開かれるから、一場所に繭市の廻つて來るのは、一季を通じ二三回に過ぎぬが、就中五井、黄家宅の如きは此地方に於ける最大繭市場である。此の野天取引に於ける買入は地場筋の製絲家や座繰業者を始め販子と呼ぶ仲買人である、邦人筋や上海製絲家筋もこの市場買出しを試みることもあるが、市場に彼等と伍して喧騒裡に有利な立廻をやるが如きは到底出來ない藝當であるから、主要地に買入所を設け、或は委託買付によつて居る。而して繭買入所へ持込む養蠶家の直賣は漸次増加の傾向にはあるが、未だ充分なる數量の取入は困難で大量仕入には仲買人の利用に俟たなくてはならない。繭の仲買人に就ては本邦のそれと同様に自らの見込を以て市場で買へる繭を製絲家に賣つて勝負する手輩が多く其の活躍は相當盛である。彼等の買入に要する資金は製絲家から先借するものあれば、或は市場で商談が成立すると、荷物と共に賣人を買場に同伴せしめて、之を賣却したる上賣人と決濟するものもある。更にまた製絲家は豫め彼等に買入の指値を與へ、その取扱高に應じて手数料を支拂ふものもある。現に青島絲廠は此期青州地方に於てその取扱量千斤以上は毎斤四十文、二千斤以上同八十文、及三千斤以上同百文の割合を以て手数料を支拂ふ方法を試みたが、大量買付者にとつては若し仲

買人に乗せられれば、相場は之に牽制され易く、去りとて彼等に若干儲けさせなくては大量の集荷を得難く、往々にして前貸金の貸倒れとなる虞があるから、仲買人の操縦は相當重要視されて居る。

省内最大手筋たる日華蠶絲の繭買入機關を見るに、何しろ肝心なる仕入のことであるから、此の期には交通の中心地たる張店に購繭本部を置き、青州、周村及博山の三箇所に支部を設けて居るが、中にも青州、周村及張店には帶川式乾繭機特大號一臺若しくは二臺を据けた宏大なる設備を構へ、各支部間には支那の田舎では思も寄らぬ電話を以て連絡をとつて居る。それから各支部には購繭出張所を分置して組織的な購繭に當り、更にまた帶川式乾繭機の利用を遺憾なくらしむる爲めに、周村、長山間及青州、臨朐間にトラックを配置して生繭の輸送を計るなど、その大袈裟にして整然たる機關には支那當業者も一驚の外はあるまい。然し之に對抗する周村製絲家及臨朐地方の群小なる小繭絲業者の活動も亦侮り難く、得意の市場買付に優繭を攫ひ、暫々有利に立廻つて居る。加へて最近數年來上海製絲家筋も山東の白繭に着目して遙々此處に出勤するのは例年のことである。之が爲に白繭の本場たる萊蕪地方には南支に見る繭行制度が行はれて其の受託買付に當るものがあり、臨朐地方に於ても小繭絲業者や繭仲買人が上海筋を顧客に購繭するありて、近來山東の繭取引は大に賑はつて來た。

五 繭秤と通貨

而して愈々取引の實際を知るには、先づ第一に衡器に對する明確なる概念を得て置かねばならぬ、勿論これは十六兩を以て一斤と爲す位取には變りはないが、その兩の單位たる何等據るべき基準がない、嚴格に言へば買手にせよ、賣手にせよ、唯信すべきは自己の所持する秤のみで、他人の秤には信用を拂へぬと言ふのが彼等の常識である。従て衡器は複雑、紊亂極りないが、その地方々々に某品は某秤を以てすべしといふ大體の標準があり、その標準とは例へば四吊稱スツテフイヨシといふ秤は四吊文即ち銅貨二百枚の重量を以て一斤の單位たるを言ひ、或はまた近來外國の衡器ボシドが這入つてから、その百封度に對し六五斤に當るを六五磅秤と言ふが如くである。今之に就て各地に於ける繭秤の標準を擧げると次の如くである。

地名	秤名	對一斤 和貫換算	對百封度 換算
臨朐地方	四吊稱	約二百匁	六十斤半
青州周村其他	三吊六百稱	頁八十五匁	六十五斤
萊蕪地方	司碼稱	百六十匁	七十五斤

註 鐵道運賃其他に關する公秤には司碼秤を用ふること勿論である。

次にはその一斤に對する繭價の建値及繭代に支拂はるべき通貨であるが、之に關しては舊來此地方の貨幣は言ふまでもなく制錢、厘錢であつたが、近來この制錢は殆ど跡を絶ち、之に代れるは制錢十枚が一個に當る銅貨であるが、その稱呼に就いては從來通りの吊文を慣用して居る。處が山東に於ける吊文は昔から妙な計算になつて居る。その單位は勿論一文、十文、百文、千文と

進み千文を即ち一吊文と稱して居るが、之に對して實際に受渡すべき制錢は例へば一吊文ならば、その半分たる制錢五百枚即ち銅貨五十枚を以てするのを滿錢マンチンと言ひ、更に之より二十文少く即ち一吊文に對し制錢四百九十枚銅貨四十九枚なるを九八錢若くは縮錢シュウチンと呼ぶ二種があり、そして青州地方の滿錢を除いて其他地方は大抵皆縮錢によるから勘定は一層面倒である。而してこの流通の最も廣い銅貨の硬貨たる不便を緩和する爲めに各地方には夫々壹吊文、貳吊文、參吊文、伍吊文及拾吊文等紙幣の流通を見て居る。そこで繭の秤量は四分の一即ち四十匁四十匁、四兩飛びで相場は一斤若干吊文といふ建値を使ふが故に、例へば一斤五吊四百八十文にて二十五斤半の繭を買入れたとすれば、その繭代金は一三九吊七四〇文を示し、其の支拂に當つては一三九吊文は銅元紙幣で支拂ひ、残りの七四〇文に對しては滿錢ならば銅貨三十七枚、縮錢の地方ならば三十六枚を支拂ふ勘定である。之と同様に大洋(弗銀)を支拂ふことになる。其の當時の吊文相場により例へば一元に付き七吊文替とすれば、前記繭代一三九吊七四〇文に對しては大洋十九枚(元)と残りの六吊文が紙幣、それから端數の七四〇文が銅貨と三通りに支拂ふが如く、その煩瑣なことは新參の繭買人では面喰つて終ふ。

六 繭取引の實況

繭の市が立つのは拂曉からで、養蠶家は繭を頗る大きな風呂敷に入れて、その四隅を括り合せ天秤棒に擔いで市へと出掛ける。市場には買人が買方、秤方及傳票係等が一組となり銘々適宜

の場所を選んで十數疊敷もある大風呂敷を地面に擴げて、その隅に櫃子クビを構へて陣取つて居る所謂大風呂敷を擴げるといふのも、こんな處から起つた文句であらう。市場は早朝から人と繭とで埋められる賑はしさで、あちこちに商談が行はれ、賣人には其の場で斤量及代金を記した傳票が渡され、其繭代は後日支拂ふことになつて居る。斯くて朝の八九時頃にはもう買人の大風呂敷には繭が堆高く山のやうに積まれて居る。自然買人同志には誰が若干買つたかは問ふまでもないし、一斤の唱値も容易に知れるが、然し實際相場に至つては之を知るに容易でない。何故ならば買人が安く仕入れる手段は値を押すことよりも、目方を澤山奪ふこと、言ひ換れば秤を胡麻化することにあるからである。だから値段が折合つて買人が繭を秤に掛けるや賣人の斤量不足に對する文句には否應なしにサツサト之を荷の方へあけて了う手輩がある。また賣人は之をあけさじと確かと風呂敷包を押へるなど、その取引振は面白い光景である。市は大抵午前中には片付いて終ひ、買人は買入れた繭を持運ぶのに澤山の人夫を使つて矢張り之を風呂敷に入れて擔いで行くのは面白い。この風呂敷は賣人は繭を賣拂へば歸りは空手であるし、運搬に於ても籠其他の容器よりも繭を損傷することが尠い。

斯様に市に於ける繭取引には直接邦人が當つても、到底彼等の眞似は出來ぬから門上買モンシヤンバイに努め、近來養蠶家も直接買入所に持込むものが漸次殖えて來た。此處では買手が先づ繭の品質を鑑定して指値し、之に賣應すれば天秤に掛ける。この秤手は支那人でなくては具合が悪い。秤量を頑張る賣人は中にはその斤量に不服を唱へて持戻るものも尠くない。秤手の傍には傳票

係が單價と斤量を聞いて繭代金を計算し、複式の傳票に記入の上之を賣人に渡すと、賣人は會計處に至り傳票と引換に代金を受取ることになつて居る。従て市場取引のやうな雑踏はないが、然し賣人は我先にと競合つたり、質朴な農夫でもそこは根ばり強い支那人のことであるから、少しでも値段は高く、秤は弱くと慾張り一方ならず騒々しい。殊に廣い範圍に互り零碎なる養蠶家を相手に大量の仕入を計らねばならぬ日華蠶絲の骨折は一通りではない。何しろ其の仕入には買入主任兼買方、傳票記入係、覆秤(再貫)係、會計係及乾燥係等肝要なる業務には一々邦人を配置しなくてはならぬから、買場一箇所に就いて少くも邦人六七名を要し、之を總數拾餘箇所に對する邦人の總動員數は百人を超へ、更に通譯、秤手、現金係其他助手等の支那人職員から乾燥苦力料理人、小使等の雜輩を加へれば夥しい人數である。而かも前述の通り山東の産繭地と雖も日華蠶絲の獨占市場といふ譯には行かない。周村の製絲家筋もあれば、また生産費の安くつく足踏や座繰業者もあり、是等の手筋は動もすれば採算に頓着なく盛に追隨買に出で相場を高め易い。之が爲めに大手の日華蠶絲が山東に於ける繭相場を作るものゝ逆に大勢に支配されねばならぬことがある。加ふるに山東に限らず支那に於ける購繭の實際に當つては良い繭は値を良くし、悪い繭はそれだけ低い値段で買ふといふ、解り切つたその當然なる買付が仲々六ヶ敷いのである。若しも之を繭に惚れて妄りにそれ相當の値段を出したならば、根氣強い賣人に壓せられて忽ち悪い繭までが同様な相場に釣上げられて終ふ。だが値押一方でも賣人は集らず、仕入の困難なことは支那と雖も變りはない。

七 繭の相場

本來繭の相場が絲價から割出さるべきは言ふまでもないが、之に就いても金資本を以て濱賣を主とする邦人筋と専ら上海賣の支那筋とは其間採算上必らずしも一致する譯には行かない。現に之を一九二七年春季の實例に徴するも、支那製絲家筋のその前年度の成績は銀安の好材料を受けて孰れも相當の利潤を擧げて懐合良く、また絲況の如きも端境期上海市場は千二百兩を唱へて居た。この一千二百兩から爲替の打歩(滙水)七十兩及生産費約二百三十兩を差引くと繭本九百兩を示し、生絲百斤の生繭量千三百斤及吊文相場一兩に付九吊五百文とすれば、生繭一斤六吊六百文の相場までは買進みても損益なき勘定である。然らば當時一斤六吊六百文の相場は之を邦貨に換算して幾何に當るか、直ぐ呑込み難いが先づ一斤は和百八十五匁なれば一貫匁當りは三五吊六七五文、銅貨の一七圓四八錢となり、其の換算兩値は三・六九兩、之を對日爲替邦貨換算七十五兩と見れば、一貫匁四圓九十二錢である。處で絲歩は六匁五分見當にしか踏めぬから其の繭價は七十五掛強に當るのである。而して同期本邦に於ては精々六十五掛見當を豫想さるゝ情勢の當時斯様な相場では到底買入の出来ないことは明かである。

されば内地でいふならば松崎沼津の初取引とも言ふべき周村地方に於ける繭市は五月二十九日に蓋開け、その出盛に入つては日華蠶絲側が極力繭價の抑壓に努めたるにも拘らず、三十一日には五吊六百文より五吊七八百文と漸騰し、續て六月一日優良繭の産地たる長山縣城の繭市

は六吊文(凡そ我が七十掛)と臺替りの高値を以て開かれ、氣配は尙も先高を氣構へたのであつた。然るに偶々上海よりの入電は絲價の低落、江浙地方新繭の大安値を傳へたる爲めに漸く當業者は警戒的態度に轉じ、同業者間には五吊五百文以上買止の申合が出来た。然し實際その相場までには低落を見たのは數日の後であつた。續て六月四日青州の開市は周村の繭況を入れて當然五吊六七吊文に開始され、買入の高値仕入は免れそうにもなかつたが、七八日頃に至つて突如有力な軟材料が現はれた。それは山東軍の敗北に首都濟南は危険に陥り、山東銀行の破綻説—軍票の大暴落—金融の梗塞といふ山東財界の動搖に青州に於ても蠶絲金融に當る有力なる某錢莊の如きはたと資金難に陥つた。爲めに支那筋の買出動も鈍つて期末には上物が辛くも五吊文臺を維持する有様であつた。この低落に優良繭で聞えた澆溝地方の如きは農家は抜目ない打算から自ら座繰絲を挽くべく、繭を鹽漬にするものも尠くなかつた。小繭絲の本場たる臨朐地方も六月四日梨花埠の開市に始つて連日あちこちに盛なる市が立つたが、此地方は群小の小繭絲業者と農家の間には相當借買が行はるゝものゝ如く、相場も大きな變動はなく、大部分は五吊六百文から五吊二三百文の間に取引された。但し此地方の繭秤は一斤和二百匁である。試に縣下南流の青島絲廠出張所に於ける逐日買入相場を見るに、黃上物初日五、六〇〇文、二日五、三〇〇文、三日五、二〇〇文、及四日目四、八〇〇文を示し同白繭初日六、四〇〇文、二日六、二〇〇文、三日五、六〇〇文及四日目五、二〇〇文と漸落し下等品の如きは四吊七、八百文に低落した。遅れて博山地方は六月七日開市の頃に當つては既に周境は慘落を告げ、支那當業者の活動も衰へた跡

なれば、殆ど日華蠶絲の獨占に、買馴四吊七、八百文といふ安値にあつた。それから白繭を主とする萊蕪地方は例年ならば上海筋が盛に入込んでズツト高値に人氣を呼ぶところであるが、同期は時局關係から買入人は少く、加へて當初土匪の出沒甚しく、他地方の繭況低落を入れて白繭百六十匁一斤買馴四吊八百文見當にあつた。據つて之を總括して各地の繭相場を一表に纏めると概略次のやうである。

昭和二年春季生繭相場

出廻期	平均見當相場	最高	最低
周村方面 自五月二九日 至六月二日	黃五、四〇〇 白五、七〇〇	六、二〇〇 六、四〇〇	五、四〇〇 五、〇〇〇
青州地方 自六月〇四日 至六月一六日	黃五、二〇〇 白五、四〇〇	五、八〇〇 六、〇〇〇	五、四〇〇 五、〇〇〇
臨朐地方 (一斤二〇〇匁) 自六月〇四日 至六月一一日	黃五、二〇〇 白五、四〇〇	五、六〇〇 六、四〇〇	四、五〇〇 五、〇〇〇
博山地方 自六月〇八日 至六月一五日	黃四、五〇〇 白四、八〇〇	五、二〇〇 五、四〇〇	三、九〇〇 四、五〇〇
萊蕪地方 (一斤一六〇匁) 自六月一六日 至六月一六日	黃四、二〇〇 白四、八〇〇	四、五〇〇 五、四〇〇	三、八〇〇 四、〇〇〇

之に總體の判斷を下すと、此の期に於ける山東省の平均繭相場は大約黃繭一斤(百八十五匁)五吊二百文(約七四仙)と見て大差あるまい。之を邦貨に換算して凡そ六十掛に當り、更に之に要す

る繭の税金其他買入諸掛を買値の一割二、三分に見積れば、釜入六十六七掛を示し、略ぼ本邦に於ける春繭と同様な相場に終るを得た。然し斯様な相場に落付くを得た一半の理由は既述の如く時局關係の不安に基くもので、支那の戦争も時にとつては當業者に幸するものと言ふを得べき歟。然らずんば繭價は同期のやうに最初の高値よりデリ安歩調を迎るが如きは異常の豊作でない限り、容易にその實現を望めない事情が介在して居る。それは當業者の原料仕入は唯山東市場のみで、それも春蠶一期に限られ各地始ど一齊に出廻るからである。之を上海地方ならば浙江省が高ければ江蘇省で買ふことも出来るし、或はまた之を買控へても上海無錫の乾繭市場に仰ぐ利便を有するも、山東省ではたとへ高値にあつても或程度までは買進まねばならぬこともある。

八 繭の出廻状況

されば延いて繭の出廻量の多寡は絲價と密接な關係を有し、繭價は強くその需給關係によつて支配されて居る。そこで各地方に於ける其の出廻状況を見るに、先づ「濰縣の繭市場」は南に安邱縣を控へ、此縣は本場の臨朐縣に接壤して之と略ぼ同一な地形を備へ斯業の將來は發展を囑望されて居るが、然し未だ新場所で其の出廻額は二三萬斤に過ぎない。しかも農家の持込む繭は一斤二斤といつた小口が大部分を占めて居る。續いて「昌樂の市場」へも安邱産は一部出廻るが、その額は前者と大差ない。それから「澆溝の市場」は濰河の下流に互り、此處から北方二

十餘里の湖營、三宮廟等を主とする優良繭の産地であるが、惜らくは其の出廻額は約三萬斤見當に過ぎない。そして此の三市場は青島絲廠の獨占市場に屬して居る。

「青州繭市場」は青州驛前に青島絲廠が宏大な購繭所を設備して居るが、然し此處で所定の數量を得ることは到底困難であり、寧ろ青州に於ける中心市場は府城の南西十華里に當る五里堡^{ウリボウ}子である。此處は僅に人家二、三百戸の一驛站到過ぎないが、世にも稀なる交易市場で、南は臨朐縣を始め淄河の上流たる淄川及博山縣の山間地に通じ、北は臨淄、壽光諸縣に達して是等の廣汎なる範圍から様々な商人や農夫が二日路或は三日路を費して此處に集り、杏子の時期には杏子の集散市場となるやうに繭の出廻額も六七十萬斤には達するであらう。しかも繭は各地方から集まるので出廻期は約二週間の長期に互ることは他市場には見られない點である。従てこの町は多く商人宿で占め、各繭買人は此處に陣取つて購繭に當つて居る。同年の如きも日華蠶絲や鐘紡の邦人筋を始め青州製絲家や仲買人が残らず顔を出して活況を呈した。自然斯様な土地柄であるから繭の看貫に就て所謂秤が弱い慣習のあることは買人が豫め之を打算に入れて着手せねばならぬ處である。

次に最大市場たる「臨朐縣」の出廻額は一般に五百萬斤といふも玄人筋の觀察では先づ三百萬斤を幾何も出ないであらうと、此内凡そ二割が白繭と見られる。買人として最も有力なるは言ふまでもなく、縣内各地に散在する地場の製絲家である。そして彼等は北抵皆南方の江浙地方に見る乾燥室を設備して居るから繭の委託買付もやつて居る。従て上海筋も數年來之を頼

つて白繭の仕入に當るやうになつたが、然し時局の爲め最近その出勤は絶えて居る。それから日華蠶絲の如きも早くより之を利用して縣城、閔家庄、紙房、五井、南流及岳莊等の數箇所に互つて購繭に努め、勢ひ此處の市場は是等有力なる手筋の競争買ひに旺盛なる取引を見たのであつた。けれども日華蠶絲は最近沿線地方に於て漸次優良繭を多量に取入れ得るに反し、鐵路を離れた此處の仕入には諸掛は固より乾燥の不備、繭の輸送に伴つて繭の解舒を損じ、成績概して不良なる爲めに、同期の如きも四箇所に於て拾數萬斤を仕入れたに過ぎない。

之に引換へ最近「周村及張店地方の市場」は著しく賑つて來た。日華蠶絲と周村製絲家とが對立し、平野續きの長山桓臺及淄川の三縣に互つて夫々周村、長山縣城及張店等に根據を据へ、一方各地に開かれる繭市に花々しい接戦を演じて居る。就中繭市で最大なるは馬尙^{マシヤウ}の市である。この方面に於ける出廻額は大約百四十萬斤に達するであらう。張店絲廠附設の購繭所の如きも逐年集荷に努めて此期の買入高は十七萬斤に達した。

山手に入つて「博山地方」は縣城に日華蠶絲が購繭所を設けて居るのみで、其他は周村の仲買人が這入つて來るが、此期は殆ど日華蠶絲の獨占到歸し、その買入所は稀に見る雜踏を極めた。買入所の廣場は遠くから續々やつて來る賣人で、終日足の踏入れ場所もなく、彼等は繭を抱えて庭で夜を明かさねばならなかつた。淄河上流の固山、池上、源泉及大河等を主要地として其出廻額は凡そ二十萬斤見當であらう。最後に「萊蕪地方」の出廻額は白繭五十萬斤、黃繭三十萬斤の推算にして之を拾年前白繭二十萬斤に較ぶれば割合に顯著な發展振であらう。これは地方人

が繭廠と呼ぶ乾繭所を設けて日華蠶絲及上海筋を迎へ、白繭の獎勵に努めたる結果で、自然此處の繭取引は南支の繭行に似て居る。現在繭廠の數は縣城の東關、西關、花園、顏莊、魯西其他の田舎に互り二十七箇所を數へ、其の乾燥室數は二百二十灶を算して居る。其の主なるは魯東公司の八箇所、東大興二、永聚合二、義昌二及協成二箇所等にして、此等の手を経て此期仕入に當れるは、日華蠶絲、鐘紡及上海筋は鼎餘と緯成の二家であつた。之を通じて山東の出廻期は同期六月の上半に互り、氣候異常の爲めに周村と濰縣地方とが殆ど同時に出廻るやうな調子はづれを見たが、例年出廻の最も早きは濟南に近き周村方面で五月下旬に始り、次いで鐵路に沿ひ漸次東に及び、青州、臨朐、昌樂、濰縣といふ順序で開かれ、最後に山手の博山、萊蕪に終るを例とし、且つ其の出廻期間は各地一週間前後に過ぎない狀況である。

九 乾繭設備と繭の鹽漬

繭の仕入は短期なれば買入と共に繭の處理も亦た甚だ多忙である。普通の乾繭装置は江浙地方から傳はり、今から二十餘年前芝罘商人が作つたのが始りであるといふ。從て江浙地方の繭行と略ぼ同型で之に説明を加ふるまでもないが、其構造は前者よりも天井は低く、坑道も簡略されて完全とは言ひ難い。即ち乾燥室は煉瓦造りで間口一間半、奥行二間の室内に二臺の乾繭架を竝べ、之を九段として各段に箔三枚差しとするから、一室の箔數は五十枚である。箔は藤蔓で編み、方三尺、縁の高さ三寸、之に生繭八百匁を入れる割合であるから、一回の乾燥能力は凡そ四

十貫、本乾燥に約十二時間を要し、火力には石炭を用ひて居る。通例三室を以て一棟とし、其の建設費は一室に付約二百五十元を要して居る。然し金の掛る割合には此の乾燥法の成績は良くない。第一に排氣孔の設置が不完全なる爲めに水蒸氣は排出するに由なく、勢ひ室内の温度も最高二百度の處もあれば、底部の邊は温度は甚だ低く頗る不均一である。從て青島絲廠では之を帶川式に比較すると、解舒に於て優に一割の相違があると言はれ、之を改良するに左右兩壁に沿つて、排氣筒を立て、一方脊面に扇風器を据へて室内温度の均一を計つて居る。更に乾繭架には帶川式のそれを用ひて床上にレールを敷くなど、その面目は一新して居る。然し一般支那當業者は未だそこまで乾繭法による利害得失を考へて居ないらしい。

而かも此の不完全なる乾燥法と雖も之を舊來の原始的にして奇抜な殺蛹法に比べると遙に進んで居る。何しろ農家が自ら座繰絲を挽く場合には皆繭を鹽漬とする慣習である。之には博山及沂水地方に生産する素燒の大瓶（か）を用ひ、是は徑三尺、深さ四尺大にして其の時期になると到る處之を運搬するのを見受ける状況である。この瓶に漬け得る生繭量は凡そ十二貫之に鹽は六貫匁を要する割合で、先づ繭を敷き並べては之に鹽を振りかけ、繭と鹽とを交互に積重ねること十二三層とし、これに木の蓋をしてから上部を厚く粘土で塗り之を密閉すること、此の地方で野菜物を漬けると同様である。斯くて七日乃至十日間を経て、必要に應じ之を開いて使用して居る。瓶から取出された繭には澤山の鹽が附着して居り、それかあらぬか此地方の硬い水で繰絲するに乾繭よりも解舒は良好なる結果を示し、また瓶底には蛹體より浸出する液汁が溜ま

るが、これは食用又は漬物に供して居る。斯様に此の方法は至極簡便にして之を經濟的に見ても前述の如く山東沿海は産鹽に富み従前は其の値一斤五仙に過ぎなかつた。然し最近は何れも爲めに一斤六百文約八仙に當り、生繭百斤に對する鹽代は四元を要するやうになつたが依然行はれて居る。しかも此方法たる一見原始的にして亂暴のやうにも思はれるが、繭の冷蔵が考へられる今日一概に捨てたものでもあるまい。

一〇 繭委託買付と上海筋の出勤

主として萊蕪及臨朐地方には乾繭装置を有するものが、繭の委託買付に當るものゝあることは既述の通りであるが、其請負法は南支に行はる包烘の方法を採つたものである。即ちこの乾繭扱の主なる契約條項を擧げると、先づ(一)請負人の手數料に就ては買入は買入總額に對し千分の二の口錢を拂ひ、次で(二)買入及乾繭諸掛に就ては乾繭一斤に對し二十一仙の割合で請負ふから、百斤に對する其の請負料は二十一元となり、これが請負者の主たる収入となる譯である。そしてこの諸掛に關する分界を明かにする爲め(三)繭が買場を離れてからの運賃や税金は買人の負擔に屬して居る。それから繭の受渡に就ては(四)看貫に磅秤を用ひ、百封度に付七十五斤の計算を以てし且また(五)その受取るべき乾繭に關しては乾燥歩合生繭三斤四兩より乾繭一斤たることを保證する規程を設け之によつて請負人が繭に對する胡麻化しを防いで居る。從て此の方法による時は煩瑣なる購繭業務から免れ、單に監督者を派せば足るから世話はない。然し繭

の取扱に於ては動もすれば肝心なる乾燥法を誤り易く、此方法を利用するものは主として山東に根據を持たない上海筋である。

抑々上海當業者が山東市場に手を染めたのは今から七八年前からである。それは言ふまでもなく上海を中心とする製絲業が漸次發展するに連れて繭の買場所が年々その範圍を擴大して行くことは自然の勢であつて、江浙兩省は固より最近安徽省は有力なる繭市場として開拓され、更に進んで湖北省の黃繭にも手を延ばすに至つたのである。殊に江浙地方の繭質が最近劣化するに此處山東の白繭が優良なるは上海當業者の垂涎措く能はざる所となつて、當業者間に著しく注目されたのであつた。試に之を青島港に於ける繭の輸出額の六七割は上海筋の買付量と見られる。殊に民國十三年度の如きは上海筋の出勤は十餘商を算し前述萊蕪地方は勿論青川驛から臨朐縣に入り込んだ上海の繭買人は同勢二百五十人を下らない有様であつた。そして當時臨朐縣に於ける彼等の活動は表面東裕及稅協泰といふ二繭行の團體からなり、前者は十四箇所、後者は四箇所に據つて買人は銘々に仕入に當り、唯繭及現金の輸送から税金、派兵の請願等官廳に關する共通の仕事は一括して前記の名義を使つたのである。然し未だ自家の繩張を離れての買付には上海筋も概して好成绩を收めるに至らぬらしい、何しろ此處へ來ては上海商人と雖も言語の不通は固より事情に暗いことは當初の邦人と選ぶ所がない始末である、其處へ付け込んで他所の者と見れば地方人が利を貪つて已まないのは支那の通習であるが、此點に於ては寧ろ山東に事業を持つ邦人筋の方が親しみを持たれて居る。それに彼等に對し問屋は

衡器の不統一を奇貨として量目を胡麻化したり、官憲さへも上海筋には繭を外省に持出すといふ理由の下に當時乾繭百斤當り凡そ九元といふ税金を課する差別待遇に上海着の諸掛は百斤五、六十元を下らず、結局經費倒れとなる場合が尠くなかつた。のみならず其の購繭資金としては銅貨を準備して掛らねばならず、この銅貨は省外移出を禁止されて居るから、高値を買控へて資金を換元するとなれば、高率な換算率を請求されるゝ始末であつた。之と相俟つて最近兩三年政情不安の爲めに上海當業者の出勤は一時より著減した。然しながら彼等の買付に不利不便とする障害は漸次土地に顔染みが殖えるに連れて自然消滅すべきものである、時局が安定しさえすれば、此方面に對する上海筋の開拓は一層顯著となるべく、將來山東の繭市場は一層賑ふことであらう。

一一 繭の課稅雜徵及運賃

終りに繭の買入諸掛に於て、就中運賃及税金等に關し、序でに生絲をも包括して、這間の狀況を述べて見よう。先づ繭の運搬に就て驛までの輸送は驢騾及小車による外はないが、萊蕪より博山に至る百八十華里の駄馬賃、乾繭一斤に付き銅貨六枚乃至六枚半の率を示し、また臨朐の南部から青州への百五十華里の小車賃は乾繭一籠に付き一吊三百文乃至四百文の規定である。之を和百斤當りに換算する時は前者は凡そ九十仙、後者は八十仙の割合である。次に鐵道運賃に就ては税金と密接なる關係を持つが故に之と切離して見ることは出來ない。それと言ふのは

張宗昌軍が山東鐵道を握り、この軍閥にとつてはこれが何よりも有力なる財源である。されば時に臨み勝手に運賃の値増も出來れば、貨物を押へて税金を取立て得らるゝから手数は掛らない、而も連年の戰爭騒にその財政は火の車のことゝて、最近の徵稅振は滅茶苦茶で、甚しきは二三年分先きのものまで取立てるに至つては昔から「苛稅虎よりも猛し」の文句が首肯される。從て税金に關しては何等の定率がなく、同期の如きも貨物稅なる重稅を起し當業者の負擔は一層重きを加へた。依て今假りに博山驛より繭を青島に輸送するものとして之に要する鐵道運賃及税金を見積るに、先づ貸切による時は五噸車一車に付乾繭の積載量は繭袋一八〇乃至二〇〇本の間にあつて、凡そ七十擔内外と見られ、此一車に支拂ふべき運賃及税金は次のやうである。

(一) 繭の鐵道運賃及其税金

運賃	五噸車一車に付	二八・八〇
同 大馬車	(貨切扱の手續料の意)運賃の一割	二・八八
同 新稅	(軍票の低落による補填賃銀)前項の二割	六・三四
小計	運賃	(三八・〇二)
河工捐	(黄河改修稅)前運賃總額の一割	三・八〇
貨捐稅	(鐵道厘金稅)同上の八割	三〇・四二
撈兵費	(又は快車費とも言ふ)	五〇・〇〇
貨物稅	(繭に對する出產稅)從價の二分、一擔四元、七十擔分	二八〇・〇〇

合計

乾繭一擔當りの運賃及税金

四〇二・二四
五・七五

斯様に軍閥は様々な名目を付けて徵稅に專なるが、前記稅目に關し若干説明を加へなくてはならない。即ち運賃の新稅といふのは當時張宗昌軍の機關銀行たる山東省銀行が發行する銀元紙幣は信用を失し、時として額面の三割位にししか通用せぬ場合があるので、運賃支拂に此の紙幣を使はれたでは鐵道の收入は著減する爲めに、運賃を支拂ふべき通貨の種類は省銀行紙幣三割其他市場の通貨七割の割合によらしめたのである。然るに最近之が損失を補ふべく更に二割の値上げを行つたのである。それから貨物稅といふのも同期から施行された新稅で、その性質は貨捐稅に該當すべきものであるが、これは鐵道を問はず全省を通じ、繭に對しては從價二割の標準により生繭百斤一元四十仙、乾繭百斤四元の稅率を課したものである。要するに此種の課稅は最近財政益々不如意の折柄短期間に莫大の金が動く繭を狙つたものである。

(二) 生絲に關する鐵道運賃及其税金に關しては周村驛から青島まで輸送するに生絲百斤に付き現在左記の費用を要して居る。

運賃率	百基瓦に付	(一・七四)	小口扱
運賃	生絲百斤	一・〇五	列車扱
臨時加價	運賃の二割	〇・二一	同
河工捐	同一割	〇・一一	同三割
			同二割
			〇・二〇

貨捐	同八割	一・〇一	同八割	二・一〇
計		(二・三八)		(四・九〇)
百貨		七・四〇		七・四〇
稅				
計		九・七八		一二・三〇

即ち生絲に對する負擔は之を繭に比べて著しく輕きを見ると同時に、製絲業地として産繭地よりは青島が不利の地位にあるを知るであらう。

(三)繭の地方税に就ては元來山東省には當初繭の厘金税なるものはなく、唯各産繭地に於て教育費其他の名目を以て徴收したるに過ぎない。従つて邦商筋は之を負擔する必要はなく、仕入後地方公共團體に對し寄附金の名義で納めれば足りて居た。それが漸次税金化して現在では各地を通じ出境税なる名目の下に乾繭一擔に付き一元の率で徴收して居る。更に同期臨朐縣にあつては年末頃から土匪の横行甚しくその討伐費に縣民は借款約五十萬元を負ふに至り、其一半は地方税に對する附加税によるも、残りの一半は償還の道なき爲めに、之を縣内の主要生産品に課することゝして、先づその筆頭たる繭に對しては生繭一斤(二百匁)に付き買人側より洋二仙、及賣人側たる養蠶家より洋一仙と計三仙を課した。之が爲めに乾繭一擔に對する此の税金は凡そ七元二十仙となり、内四元八十仙が買方の負擔となつたのである。

前述各項を参照して買入諸掛を綜合するに、これは距離の遠近によつて相違のあることは勿論である。例へば萊蕪地方からの乾繭百斤當りの諸費は先づ買付請負料が二十一元、之に買入

側の旅費、出境税及博山送の運賃等を三元三十仙と看做し、次に前項博山、青島間の運賃及税金五元七十仙を加算する時は三十元となる勘定である。之に比し青州や周村地方は前者より餘程輕減されるが臨朐縣になると前記地方税四元八十仙を要することになる。それから買場所を自有するものは更に安く付くが、各地を平均して乾繭百斤に對する買入諸掛は大體青島着二十五元といふ見當であらう。然し税金は未だ官憲に手心があつて交渉次第では正規の納税を要せざるものゝ如くである。それにしても今から拾年前の買入諸掛は周村地方の買付に於て概算、(一)乾燥室賃借料一、一〇仙(二)乾燥人夫賃一、一五仙(三)燃料(薪)二、三五仙(四)問屋口錢二、九〇仙(五)驛送り小車運賃一、〇〇仙及(六)青島送り鐵道運賃税金其他諸雜費四、〇〇仙とその合計一二・五〇仙に比較すれば倍額の増加を見るに至つた。而して翌昭和三年度の購繭は濟南事件に伴ひ一切の不當課税を納むることなくして片付いた。

一二 一般労働状況

繭を製絲工の問題に立入るに豫め周境に於ける労働状況を一瞥すると、前述の通り山東省は支那に於ける労働者の出場所と言ふべく、滿洲西比利亞方面への出稼苦力を始め不生産労働者とも見るべき厄介な支那の軍隊約百五十萬人といはるゝその四割見當は恐らく山東人で占めらるであらう。それ程山東省に於ける労働の供給は潤澤ではあるが之を質の上から見れば苦力といふ筋肉労働者が大部分を占め、所謂力仕事ならばその頑強なる體軀といひ、或はまた粗衣粗

食に甘じて困苦缺乏に堪ゆる根氣といひ、之を他に求め得ないであらう。けれども少しく頭腦を使ふ仕事となると、之を南支の労働者には比すべきもない。そしてこの南北兩者の相違は素質と言ふよりも寧ろ之を教育の有無や民度の高低に歸するであらう。教育に就いて南方支那にあつては大抵の僻村に行つても小書坊なる寺小屋を見るが、山東にはこれさへ餘り見當らない、無智文盲の徒輩が多いことは農民が繭買入所に繭を賣却して傳票を受取るに十中の八九は之を解する能はず、一々係員に其の斤量と賣上額を讀んで貰つて漸く合點する有様であつた。それからまた紙類の生産に乏しきにもよるが、農家は古新聞を手に入れやうものなら頗る珍重し之を壁に貼つてあるのを暫々見受けた、斯様な一班を推しても智能の程度が推知されやう。また労働を供給すべき農民階級の生活振りを見るに、米食の南方人に較べて一層粗食である。各農家は大抵石臼を据付けて人力又は騾驢を使ひ、自ら高粱、粟、及包米(玉蜀黍)等を粉にし、之から徑一尺位ある極く薄い煎餅チエンピョウといふ「うす焼」を作つて常食として居る。副食物と言へば茶碗の底に僅か拾數粒を數へる程しかない極く稀薄な粥をすゝり、菘、蒜其他の青菜を配するに過ぎない、麥粉から作れる饅頭マンダウの如きは上食の部類に屬し、況や魚肉に至つては之を吉日佳節に當つて口にする位のものである。通例一日三食の習慣で、一人當り一回に上記煎餅平均三枚を用ひ、その價一斤九枚に付八百文といふから一日に十二枚とすれば其の食費は一吊六十餘文凡そ十五仙を示し、之に日傭賃一吊文凡そ十五仙を加へて農業労働者の賃銀は約三十仙となり、更に作男の年期奉公(長工)は年二百吊文(二十八元五十仙)といふところである。

續いて賃銀に就き例へば繭の乾燥人夫の如きは稍經驗を要し、臨時晝夜兼業の勞務であるから、傭主の給する食事も饅頭で一日四回食、一回に一人當り五箇は平げる、その値段麥粉一斤七百文から饅頭四箇を作る割合と見て、一日一人當り平均二十箇として其食費は凡そ五十仙に當んで居る。また臨朐縣南流の青島絲廠購繭所に於ける乾燥人夫は食事自辨一日三吊文(四十二仙)で青州から來たが、その賃銀の全部は事實彼等の自炊費に消えて終ひ、割増金を得なくては差引所得はない有様であつた。更に熟練労働者たる大工鍛冶工の如きも、青島邊から來る腕利きのものになると、其の賃銀は一日一元から一元五十仙を示し、田舎大工の二三人前は取るが、後者では安くとも仕事に合はない。斯様に最近の労働賃銀を吟味して見ると、近時食糧品の昂騰によつて生活費が嵩み、之が爲めに廉い賃銀も高まつて來たことと、一概に低廉なる勞銀といふもそれは智能低い未熟練者を指すものであつて、熟練労働者の賃銀に至つては必らずしも割安ではない。而して近時青島に勃興せる紡績業が要求する所謂工業労働者は前者の頗る豊富な未熟練労働者を對照とすべきもので、就中二十歳前後の年少者を低廉なる賃銀を以て容易に得らるゝことが青島斯業の強味である。殊に本邦紡績筋の如きは青島にやつて來て幼年工の賃銀など他に比較にならぬ程の廉さなので、之を無暗に上げ過ぎた傾があり、次いで銅貨の支拂を大洋勘定に改むるなど、賃銀は漸騰を告げたが、それにしても未だ他地方よりは低率を示して居る。工業労働者の能率に就いて紡績當業者の見るところでは大體邦人職工の七割までの能率は發揮し得られると言はれ、訓練宜しを得たならば相當の成績を擧げ得ることは明かで、殊に

特色とすべきは先づ第一に南方人のやうに悪づれがせず概ね温順であり、理屈めかずに統率者の命令によく服従する等の諸點を擧ぐべく、古來北方の強と言はるゝのも畢竟此點に歸するであらう、それからよく勞務に堪ゆる體格と根氣とが身上と言ふべく、博山其他地方の坑夫の如きは不完全なる坑内に習慣上一日晝夜二十四時間の勞働を續けて居る有様である。其他簡易生活に甘ずることは賃銀の安い根源であり、また近來流行の勞働風潮に對しても比較的感染に鈍いことは望ましい、だが然し反面これは南方人より未だ人智の程度が低いからで、之と相俟つて所謂育ちの悪いことは技術の進歩遅々として、或程度に達すれば停止して終ふ缺點となつて現はれて來る、次に埒もない面子(體面)にこだわつて騒ぎ立てたり、郷黨的團結力が強くて排他的な缺點などは支那勞働者の通弊として免れない。即ち彼等は多少に拘らず大抵集團して、之に把頭と稱する親分格があつてその仲間に相當な勢力を握つて居る。

一三 製絲工の養成

山東の勞働者と言へば、未だ女工は殆ど問題とならない。青島絲廠の如きも創設の當初之を纖弱なる婦人の手に俟つものとして女工の養成に努めたがその結果は殆ど失敗と見られた。何しろ山東には男工はあり餘る程得られるに反し、婦人は全く屋内に閑居する永年の風習よりして之を直に工場に引張つて來ても永勤めは困難である。それに古來支那に於ける繰絲の技は男子の手によるを例とし、現に上海地方の七里絲さへも男子が當つて居る。加へて山東省に

於ては芝罘の柞蠶製絲工場を始め座繰業は男子の之に素養のある土地柄なれば製絲工場としては之を招致することが捷徑なからである。

従て現在選繭其他に従事する女工を除き繰絲工は殆ど皆男工で占め、畢竟するに纏足の風習が全く己む時勢になつて始めて女工の活動する時代が來るであらう。然しながら上海地方の女工と雖も二三十年來のものであるし、殊に製絲の術が手先の技工を要することゝ、女工が男工よりも賃銀の安い二點から見て、此の兩者の得失は一概に斷じ難く或は案外近い將來に女工の活動を見ないとも限らない、現に旅順に於ける旅順絲廠は女工を招致しその成績は悪くはない。而して先づ製絲工の招募に就いては世話はない。工場の職員若くは把頭に口をきけば直に集つて來る。その關係から自然拾數人若くは數拾人と固まつた同郷人が出來るのである。即ち青島地方に於ては出稼苦力の本場たる即墨縣人が多く、青州や臨朐人が之に次ぎ、張店周村地方の工場には附近の者や青州臨朐人が多數を占めて居る。

斯く職工の募集は容易といふよりも寧ろ工場側は自由に之を選択し得らるゝ状況にあるから、工場では大抵十三歳乃至十五歳の年少者を學徒若くは生徒の名義で採用して先づ煮繭の作業に當らしめて居る。殊に周村青州地方にあつてはその見習期間を四箇年としてこの長い間の待遇は僅少な手當で足るが故に養成の失費は僅かである。其の手當に就いて周村地方に於ては最初の一年間が一箇月に付銅貨五十枚(凡そ十五仙)二年目が同銅貨百枚(三十仙)といふやうな賄付で、ホンの小供の小遣錢を支給し、續いて三年四年と勤め上げても、手當は未だ毎月一元に

過ぎない。之を同様青州地方に於ても月額手當は第一年銅貨百枚、第二年百五十枚、第三年二百枚及第四年日から之に若干の賞金を附して居る。而かも周村に於ける製絲同業者は之に對し規約を設け。(一)養成期間に逃亡又は退場せる者は之を再び採用せず、若しも(二)其の期間に他工場に轉勤する者を發見したる時は直に之を舊傭主の許に復歸せしめ、且つ(三)之に服従せぬ者は退職歸郷せしめること、(四)同業者は職工の傭入に際し、先づ其の履歴を質して他廠に勤務せることある者は之を採用せず、(五)若しも上記の事實を知りつゝ故意に採用したるものに對しては罰金の制裁を加ふる等の申合を爲して居る。

然し邦人經營工場になると、其の養成法は内地式に則り教婦をして之に當らしめ、數箇月の後技術の上達せる者は一等繰絲工の空釜次第順次之を補充し例へば青島絲廠の如きも養成に八十六釜を置いて居る。

一四 繰絲時間と勤惰

されば一人前の繰絲工は大抵十七八歳から二十五歳までの精力旺盛なる若者である、それも立派な體格を備へた所謂山東健兒が釜に竝んで、いとも優しい繰絲りをやつて居る光景はまさしく斯界の奇觀である。殊に六月から九月までの頃彼等は僅に腰に褌ハズン子ハズンを穿いて居るのみで色も一樣に上半身は全裸で、頻りに太い腕節を動かして居る様子は迎も女工には眞似が出来ないが、簡易そのものである。操業時間に就いては近來南方は八時間制などを唱へ出して大部八

箇間敷くなつて來たが、未だ山東では無難である。それに彼等は早寢早起の習慣がついて居るから嚴寒の季と雖も早出は意に介せざるものゝ如く、通例午前五時半に始つて七時に朝食をと、續いて正午の休憩が約三十分とし午後六時に終つて居る。其の工作時間は紡績工場との組合もあつて正味十一時間乃至十二時間である。また青州地方に於ける短期營業の足踏製絲工場は朝の五時より午後七時までとし之に若干の獎勵を附して居る。其間に於ける操業振は例の支那人工場に於ては中には時折監督者の目を盗んで煙管を唾へる者などもあるが、統制ある邦人工場に至つては終始熱心に仕事に當り所謂油を賣るものもなければ、雑談私語を交はすものもなく、その靜肅なことは南支の工場には見られない。即ち彼等の勤勉溫順乃至根氣強い特性は周到なる邦人の訓練によつて一層よく發揮されて居るものと見られる。従つて出勤率も甚だ良好で、之を張店絲廠の成績に見るに全年の皆勤者は全數の約三分の一といふ多數を占め中には創立四年來その間一日の缺勤さへもない者があると言ふに至つては驚くの外はない。

一五 賃銀と技倆

製絲賃銀は地方により様ではないし、また其の支拂方法に於て青島の如く大洋勘定による處と、其他地方の銅貨計算によるものとは相違があり、更に後者は銅元相場の騰落によつて其の實收は變つて來る、然し山東の工場は孰れも賄付であるから、その賃銀を知るには先づこの賄費を加算して見なくてはならない。此の賄料は青島絲廠の如き大規模になると割安に付き一

日一人當り平均十四仙を示し、周村地方は平均十六仙、次いで青州地方の足踏製絲工場は短期のことゝて待遇もよく一日十七仙見當と言はれ、三者を平均して一日一人當り十五仙と見られる。そこで賃銀は青島を除く地方は日給制を採り、勿論技術の優劣に多少の相違はあるが、周村の日給は平均一吊文(十五仙)月額三十吊文(四元三十仙)となり、之と同様に青州は日給銅貨五十枚(十五仙)を示すが故に前記賄料十五仙を加算し山東に於ける製絲賃銀は日給三十仙となるのである。此外技能を要せざる選繭工には女工を使ひ、その賃銀は食費自辨で一日十五仙と繰絲工の半額に過ぎないことは女子勞力の豊富を語るものである。この日給に對して當然賞罰法は輕視され罰金など課するものはなく、僅に獎勵の意味で成績優良なるものに賞金を與へ、その額は平均月額一人當り凡そ一元見當である。其他出勤賞として例へば張店絲廠は一箇月皆勤者には月給の二日分、一日缺席者に一日分を加賞して居る。

之に反し青島の邦人工場は能率増進の見地より日本式に仕事出來高拂を加味し、例へば青島絲廠は繰絲量一日四十匁を單位とし、之より以上の繰絲量に對しては一定の賃金率を適用して居るし、また鐘淵絲廠も一部に支那紡績流の請負制を試みて居る。故に其の賃銀は技倆の優劣により、之を日給に換算して最低十仙から極く優良なるものは最高六十仙と著しい等差があるが、平均すれば都會地のことゝて日給賄費共三十五仙見當に當つて居る。而してこの賃銀が高いか安いかは能率を離れて考へられないが、先づ之に就て前者のやうに仕事出來高拂制に於ては能率は上る譯であるが、然し支那にあつては職工の粒が揃つて監督さへ行届けば日給制にも亦

妙味があつて兩者の利害得失は一概に之を論斷するを許さない。處で製絲工の技倆を見るに其の繰絲量に就ては周村の上海式工場は七十五匁、之よりズツと優等絲を目的とする日本式の青島絲廠が六十匁乃至六十五匁、同様之に索緒分業制を採る張店絲廠が七十五匁といふ見當で本邦の夫に比し著しく低率を示して居る。然し之を以て直に日支兩者の徑庭と見ることは早計である、假りに織度の極く細い山東繭を本邦女工に繰絲させたとしても、恐らく七八十匁を出でないであらう、且又之を上海の製絲女工に比較するに青島絲廠が南支の繭を取寄せて試みた繰絲成績では上海の夫よりも若干劣つて居る、勿論此種の比較は繰絲法や周圍の事情によつて明確にその優劣を知ることの困難なるは言ふまでもないが或は山東男工の手先による技工に若干の遜色があるやにも推せられる。要するに山東男工の技倆に就いては特に優良絲を繰絲させることになるやと頭腦其他の點よりして到底本邦の女工には及ばないが、普通品の繰絲を目的とするに於てはその技倆は繰絲工として悪くない。唯支那職工の通弊とも言ふべきところの相當技能に達すれば爾後の進歩が鈍り殊に山東男工に於ては二十五歳を過ぎれば成績は却て退歩の傾がある。

一六 繰絲工の待遇

斯様に山東男工はその使役に於ても又技倆に於ても、製絲工として相當優れたる性質を持ち就中上海地方の職工に見る思想上の惡化も未だ深く憂ふるに足らないであらう。勿論從來と

ても監督者との感情の行違によつて罷工した例は暫々あるが、賃銀値上や待遇の改善を迫つて罷業を企つるが如きは稀である。唯民國十四年の六月所謂上海事件の飛火は青島全労働界に互つて空前の騒動を捲き起したが、これは持前の附和雷同性が過激分子の策動による一時的發作と見られやう。然し斯る事件のあつた以上邦人の監督者が從來のやうに無暗に暴威を以て彼等を使ふことの出来なくなつたことは固より當然である。職工の待遇に就いては邦人經營の工場は孰れも寄宿舎制を採り、宿舍及食堂等の施設は甚だ完備して居る。先づ青島絲廠は七百餘人の職工を收容するに廣い地面にコンクリートの平屋建數棟を構へて居る、其の構造は奥行凡そ一間半長さ數十間ある細長い長屋式で、之を二三室に區劃し、部屋を這入ると直ぐ正面に坑子代りに土間から高さ二尺四五寸、一間幅の床を壁に沿つて長く張り、その一間幅の床に疊一枚宛をズラリと敷き並べて居る。詰り奥行一間半に就いて向合の壁に沿ふ一間が一枚積きの疊で入口側の壁に沿ふ三尺の土間が通路になつて居る譯で、彼等の簡易生活にはピツタリ合つた作り方である。そして室内の採光も良く一般民家の坑子にアンペラを敷ける寢床よりも寧ろ具合が良さそうである。それに宿舍の中央は廣庭で、露天の洗濯場や一寸した運動具が備はつて居る。それから食堂は日本式に線絲場と通路を隔て、設けられ、廣いたゞきには長大の膳臺と其の兩側に腰掛とが幾組となく並べられ、朝晝の二回は米飯に二三菜を配し、米は南方の蒸糊米や外米を用ひ、夕食には山東人の好物たる饅頭を一人に付き二箇宛支給する、この饅頭一箇に麥粉五十匁といふかなり老大なものであるが、喰ひ餘せばこれを宿舍に持歸るから無駄はない、更に

に鐘淵絲廠は思切つた金を投ぜる紡績工場の構内にあつて宿舍其他設備の堂々たるは言ふまでもなく、之と同様張店絲廠のそれも完備して居る。之に引き代へ周村地方の支那人工場の宿舍は納屋同然で、前者とは比較にならぬが、賄などは割合によく、元來一般民屋が酷いものであるから此種の待遇に關しては問題とするに足らない狀況である。

一七 日華蠶絲の青島及張店絲廠

繭及職工の二項を終へて残るは線絲狀況にあるが、前述の通り邦人工場は日本式線絲法を採り華人工場は上海式經營法によつて居る、邦人工場の線絲狀況に就いては此處に述べるまでもなく、また後者の上海式もこれまで暫々説明を加へたから、是等技術上に關する記述は其煩を避け、それよりも前者にあつては日本式經營法が支那に於て如何に運用されて居るかを見るべきであらう。而して現在山東の製絲界に並ぶなき日華蠶絲株式會社は單に大手筋と言ふばかりでなく、その存在には深き意義を持つて居る。何しろこれは本邦當業者の支那に於ける唯一の事業と言ふべく、その創設は十年前有力なる本邦當業者の間に出來た東亞蠶絲組合の手になつたものである。當時此の組合は我が當業者が國策的見地よりして對支發展を企劃すべく高遠なる目的から生れたものであつて、所謂支那蠶絲業問題に關聯し、到底忘却し能はぬ事業であつた。孰れ東亞蠶絲組合の顛末に就いては結論の編に筆を加へねばならぬが、生憎此組合の成績は去る大正九年引續く不振に全く行詰りに陥り其處へ片倉製絲が巨資を補充して更生したの

が、即ち日華蠶絲株式會社である、爾來同社の刻苦經營によつて事業は漸次好轉し、遂に山東市場を其の掌中に握るまでの地盤を築き上ぐるに至つた。斯くして曩の東亞蠶絲組合も滿更無意義に終るなきを得たのである。同時に日華蠶絲の發展によつて山東蠶絲業が支那斯業に於ける地位を著しく高めたこと、山東の支那當業者が直接間接に尠からず利益を受けたことは看過することの出来ない點である、何故ならば上海生絲市場に於て山東絲が著しく注目されるやうになつたのは實に青島絲廠の「泰山票」によつて喚起されたもので、それ以前には四川絲以下に扱はれたのであつた。處が泰山票が先づ歐洲市場に於てその眞價を認められ出してから大に其の名聲を高め、上海器械絲の最上級品たる金双鹿票ゴールドブレイクと同格となり、之を橫濱市場に於て最優二百圓高の格合に扱はれて居る。そして上海市場の商館筋は絲質の優良なる一因を原繭の素質に歸し、自然泰山票に連れて一般山東絲も買進まれ、大體四川絲に比し五十兩高を示し、斯くて山東省が優等絲の産地たる定評を得るに至つたのは全く青島絲廠のお蔭である。他面支那人工場の經營法も前者で養成された男工の轉するもの等があつて餘程内容を改善するに至つたのである。現在日華蠶絲株式會社は青島絲廠七三六釜、張店絲廠三九六釜及南方蘇州の瑞豐絲廠二四〇釜と三工場千三百七十二釜を經營し、全支最大の製絲家であると同時にその内容設備に於ても、勿論支那當業者の追隨を許さない狀況である、今大正十五年度營業報告より事業の概要を左に摘出するであらう。

會社の所在地 上海白利南路乙六〇〇號

總務部	青島絲廠内
東京出張所	東京市片倉製絲株式會社内
資本金	貳百五十拾萬圓拂込済
積立金	法定積立金拾壹萬壹千圓、別途積立金貳拾壹萬圓、固定償却積立金四拾萬圓
工場其他固定投資	貳百九萬四千餘圓
主なる重役	社長今井五介氏、專務取締役片倉武雄氏、常務取締役鈴木格三郎氏
一箇年生絲生産額	概算一千七百俵

先づ青島絲廠は青島占領の翌年即ち大正五年に工業地帯と定められた臺東鎮に眞先設立されたもので青島に於ける邦人の工業に先鞭を付けたのである。しかも青々とした山丘に赤い蔓の立ち竝ぶ風光明眉な此の土地に相應しく廣潤二萬二千坪の敷地に立派なコンクリート造拾數棟の構は逆も本邦では見られまい。之に従事する人員數は邦人職員二十八名華人職員六名及把頭(取締工)に就いて繰絲部十九人、再繰部三人、門衛其他五人、それから職工の内譯が製絲工七百三十六人、再繰工六十人、選繭女工四十三人、同原繭取扱工二十七人、煮繭及繰絲場の雜役百人竝に構内常備苦力五十人と其の總數は千餘人を算して居る。それにも拘らず廣い構内に建坪はユツタリ取つてあるし、統制が付いて居るから支那人工場に見る雜踏はない。現に前年夏山東出兵の折には絲廠に大隊本部を置き、倉庫は兵舎に充てられ、毎日庭では練兵をやつて居たが、作業上には一嚮支障を來さなかつたに見ても其の規模が窺はれやう。一言に之を評せば工場

の體裁は純工業化された觀ありと見たのは一片のお世辭ではない。

次で業務の内容を窺ふに事務所の一隅から先づ選繭室に通ずると、此處には細長い廻轉式の選繭臺が据られ、其の兩側に竝ぶ澤山の女工は忙し相に手を動かして玉繭及汚繭其他の二等繭を拾ひ取つて居る。其の一等繭の選繭歩留は八割乃至九割の間に止ることは上海式の數等級に分ける選繭法に比べて先づ最初に違つて居る點である。煮繭機は最近まで中原式を使用せるも、前年より當時流行の鐵索式の一たるYD式を利用して居る。この煮繭室と竝んで繰絲場六棟、再繰場二棟、それから整理室一棟といふ順序で竝行にブラリと建てられ、その中央及右端をぶつ通して二條の通路があり、床は皆たゞきである。養成場を除く繰絲場は一棟百三十釜で、四つの膳臺に分たれた配列をとり、膳臺のところは床を高く上げ、廣々とした間取や排氣採光の具合など間然する所がない、だが一つ繰絲器械竝にその運用に於て十四中「デニール」専門なるに僅か三口繰なるは聊か物足らぬ。自然其の繰絲量は繭質及職工の技倆關係から一日六十匁乃至六十五匁の間に過ぎない。勿論この缺點は上海式繰絲法と違ひ、丁寧に訓練された索抄緒の取扱によつて繰歩を切らぬといふ得點を以て相當程度まで償ひ得るものゝ、斯く工程の上がないことは何としても經營者にとつては最も難色とする所であらう。再繰場に於ける大枠の造作は内地の夫と趣を異にし、枠は右側、窓のない白壁に直ぐ沿ふて一側に長く配列され、光線を背後より採つて居るから、切斷や二本揚は譯なく發見され贅澤な建方ではあるが、作業には甚だ都合が良い、續いて生絲整理室では澤山な結束男工が鮮かな手際を見せて居るし、また検査室に

はセリプレーン其他最新の器械は一通り備はり、是等検査機によつて現はされた検査票を附して製品の一半は直接青島から紐育へと直輸をやつて居る。其他屑物整理室では生皮苧を取つたあとの蛹襯はビス製造に忙しく、蛹は附近の支那人が之を食用にと一斤銅貨六枚半の値段で毎日買取つて行くから世話はない。之を言ふまでもなく青島絲廠は斯業の經營に卓絶せる片倉當事者が何せ十年の苦勞を積んだ丈に職工の訓練と言ひ將又秩序の整然たる、數ある青島の各種工場の中でも模範工場の評あるは當然であらう。

轉じて張店絲廠は前者の基礎も出來、旁々華府會議にさしも難題の所謂山東問題の解決されたのに鑑み、折角開拓した産繭地を確保する必要から張店の前守備隊の跡に起工して大正十二年の暮から運轉を見たのである。工場は既に青島絲廠に得たる幾多の經驗から實質本位に設計されてそつがない。當初は青島絲廠の分工場として經營され、續いて三百九十六釜に擴張されてから獨立して張店絲廠と稱し、廠長有賀保氏以下邦人職員約十名の下に全體が引締つた經營振りを見せて居る。殊に繰絲工の招募は當初年齢十三四歳の者に限つて採用したから、一樣に年頃の揃つた職工が漸くこれから働き盛りに入るところに同廠の強味がある。工場は矢張コンクリート造繰絲場三棟で、將來之に一棟を添設して約五百釜とする豫定である。其の設備や配置は大體前者と同様であるが、煮繭機には中原式の回轉機を使用して居ると、先に述べた低い能率の増進を計る爲めに上海式で見るやう膳臺に繰絲工と向ひ合せて煮繭釜を繰釜五箇に付一箇の割合に据付けて煮繭索緒分業の法を採つて居る。従て工程は青島絲廠よりも約一

割五分乃至二割方の進捗を示し、同期新繭の如きも周村産一日の繰目七十七八匁を示したが、年間を通じての平均は七十匁見當にある。之を青島絲廠に較べれば張店絲廠はより良き得點を多分に持つて居る。即ち銅貨の支拂勘定によつて賃銀の安いことや、近くに博山淄川の炭鑛地を控へて、燃料の低廉なことは擧げるまでもないが、その最も利便とする所は絲廠が産繭地にあつて肝心なる繭質の損傷を免れることは勿論近時増嵩せる税金及運賃等の輸送諸掛の負擔が青島に比して遙に軽い點にある。例へば張店より青島送り生絲一斤に對する運賃及税金は九元七十八仙なるに、之に該當する乾繭約五百斤の輸送費は凡そ二十五元を要して居る。故に生絲百斤當りの生産費も大約百元方の開きがあるやうに見られる。唯一つ缺點と言ふべきは前述製水用水の項に説明を加へた通り水質の硬いことで、此の軟水作業に月額三百元の失費があるに拘らず未だ用水の絲質に及ぼす悪影響を全く除去することが困難で、黃繭絲だからよいものゝ其の天壇票は青島の泰山票に比して色澤及手觸に於て若干遜色あるを免れない。更に難を言へば張店が青島のやうにイザと言ふ場合軍艦が來るところと違つて、戦争騒の起る毎に不安に脅かされなければならぬ然しながら日華蠶絲株式會社が堂々たる青島絲廠と相俟つて産繭地に採算の良い張店絲廠を持つことは恰も鳥の兩翼の如く兩者の活動によつて一層山東市場に根強い地盤を握つて居る譯である。

更に之を總括して同社の事業は東亞蠶絲組合時代を入れて過去拾箇年間幾多の波亂曲折を経て、今日の盛運を見るまでに至つた當事者の苦闘は固より尋常一様ではなかつた。東亞蠶絲

が缺損を残して失敗に終つた跡を受けて兎にも角にも組合の資産を半分減資し、之に片倉製絲が二百二十萬圓を投じて全額拂込二百五十萬圓の會社組織にした大正九年は生憎絲界の厄年であつた。従て同社當初二三年の經營は思半に過ぎぬものがあつた。けれども其後の業績に至つては恰度其の泰山票が漸く眞價を發揮し段々高値へと昇格したと同様に業績も漸次順調に進み、爾來二三年はユツタリ八朱の配當を續け、前大正十五度の悲況期に際會して他方南支蘇州の瑞豐絲廠新設に二十萬元からの投資を試みたるにも拘らず、銀塊暴落の餘惠もあつて、その損失は僅々二萬餘元に止つて居る。即ち對支製絲經營の損得に當つて先づ支配を受けねばならぬのは、言ふまでもなく金銀比價の換算である。之を例へば横濱市場で一俵千五百圓に賣つたとしても、爲替相場を百圓に付き七十五兩に決めたのと八十兩で定めたのでは一俵に付き百兩からの差異がある。加へて對支爲替は年間六十兩から八十兩位の値幅の變動は普通で、頻繁に動いて居るから、この爲替を失敗つたならば忽ち事業の成敗に關係して來る。勿論此點は銀資本を以て支那で賣つたり買つたりする事業ならば左程ではないが、前者の如く製品は濱賣を主とし、其の賣上金は總て銀資金に還元し、次期の繭資金に充てるといふ資金の運轉に於ては其間爲替相場の取極具合によつて繭の掛目も變つて來る。(七、繭取引の項參照)言ひ換れば繭の買値並に絲の賣値は繭及生絲の相場と爲替相場との二重の變動を受けるものであつて、對支經營に至つては先づ爲替業務に關する經驗を前提とせねばならぬ。次に生絲の販賣を横濱及上海の兩市場に天秤を掛けて孰れか其の有利なる方に賣却するといふ所謂眞の二港主義を採る

ことは、支那當業者の上海賣一方に比して甚だ有利である。しかも其の賣込割合は上海市場を副とし、横濱市場を主眼として居ることは、言ふまでもなく、横濱市場が最大の生絲市場として販賣に諸種の利便があるからである。殊に根本に於て、濱賣は對米輸出を主とするものであり、上海市場は歐洲向の買人に係り、大體前者の方が有利に賣れるといふことに歸着する。唯その對米輸出に於て、製品が皆黃繭の「十四中」に限られて居ることは、幾分其賣足を鈍らすことは否めないが、然し絲の格は最高級に位する特殊品とも見るべきもので、歐米兩市場に需要を持ち、加へて最近紐育とは直輸の道も拓けたから、生絲の販賣には尠からぬ特色を持つて居る。従て現在同社の主力は工場經營の内容に集注されて居るものゝ如く、勿論其の設備並に運用に於ては到底一般當業者の企及し能はぬ行届いた經營振りではあるけれども、如何にせむ其工程に於て低率なことは繭の素質上已むを得ないにしても、低廉な勞力を以てして尙且つ生産費は増嵩せざるを得ない。此處に於て、乾繭法の改善其他に努力を拂ひつゝあるが、兎に角本邦當業者が往年の青島占領を機として、山東の一角に偉大なる勢力を扶植し得たことは、大に人意を強うするに足るであらう。

一八 鐘淵絲廠

日華蠶絲に次いで最近有力なる鐘紡系の上海製造絹絲公司在山東省の蠶絲業に着手を見るに至り、邦人の勢力は一層重きを加へて來た。言ふまでもなく同公司是支那に於ける鐘紡の事

業を總括したもので、資本金拂込濟一千萬兩を擁して上海に絹絲紡工場二萬鍾と公大紗廠四萬鍾を構へ、青島に紡績工場を設けて居るが、金に飽かして建てた規模設備の堂々たるは已に定評がある。殊に青島工場は青波打つ膠州灣の海濱に沿つて廣大なる面積を占め、百年の後の計を考慮に入れて設計したといふ丈けあつて、其堅牢なる構へは驚くべきものがある。私が去る十三年に視察せる折は、此の構内の一工場に二百人線の柞蠶製絲工場が經營されて居た。其の線絲法は鐘紡の特許になれるもので、特殊の法を以て繭を蒸し、線絲盤上の繳掛架には豆電燈が据へられ一寸變つた方法のやうに記憶して居る。然し青島に於ける柞蠶製絲業は原料繭の補給に不利なる事情もあつて、畢竟此の事業は試験的に終つた。其の跡に線絲器械を据付けて、大正十五年十一月より業務を開始し、愈々山東製絲家の仲間入をした譯である。其の内容に就いては一般閑人の參觀を拒絶して居るから詳かではないが、聞くところによれば、線絲法は鐘紡の專賣特許になれるもので、一臺は三十五條から成り、條毎に自動式添緒器や自動の線棒制動機が取り付けられ、本職の紡績業者として、當然線絲法が著しく紡績器械化されたのが特色であるらしい。この線絲器械を二十六臺据付け、内一臺は順線に掃除の爲め休機すといふから、其の規模は之を前述二百人線の工場とした。それに操業して未だ數箇月を経て居ないから、其の線絲成績に就いては今後に徴する外はないが、現状に於ては中には職工一人にして七條を受持ち得るものもあるが、平均は四五條の間にあつて平均一人當りの生産量は凡そ七十匁、一月約九貫匁見當と言はれて居る。従てこの優秀なる製絲器械を以て將來どの程度まで工程を進捗し得らるゝかに

よつて、此の事業の成否が決定さるゝであらう。一方原料繭の仕入に就いては前期は青島絲廠の手を経て委託買付により、此期は自ら青州五里堡子及萊蕪の二箇所に於て購繭に試みたが、棉花の買入れと違つて此方面に未だ厄介な仕事が残されて居る。故に同社の事業に就いては試験的事業として未だ之を彼此言ふべきではないが、兎に角工程の遅々たる山東繭に對して此の特色ある繰絲器械が如何に能力を發揮し得るやは將來に囑して興味ある點である。

一九 周村及青州の製絲業

轉じて支那當業者は周村に一團となつて五工場六百釜を示し、最近二年來の業態は稍有卦に入つて居る。殊に大正十五年度はその總利益約七萬元といふから、一釜當り百餘元の利潤を見たる譯で、之は勿論銀塊相場の低落による上海市場の繰絲好調に基いて居る。然し彼等の經營振は上海方面と同様に著しく商業化され、儲れば直に之を分配し、缺損の場合は各自が持ち出すといふ遣方で、年によつて浮沈は免れない。

周村で最も古いのは裕厚堂絲廠であるが、これは業績の見べきものなく、一時は青島絲廠へ身賣話もあつた位であるが、最近は稍好轉せるものゝ如くである。而してその最も好成績を擧げて此處に重きを爲して居るのは同豊公司である。此の公司は山東銀行の關係者によつて經營され、自然金融の便を得て工場經營も亦相當巧にやつて居る模様である。之より新らしい恒興德絲廠は芝罘商人にして上海に柞蠶絲及山東絲の販賣を取扱ふ恒興德絲棧といふ問屋の一

團によつて經營されて居るから生絲販賣にも都合よく相當な實力を持つて居る。其他二三工場は孰れも最近の繰絲好況に刺戟されて設立されたものである。而して此等工場の繰絲器械は多くは上海から移入せる鐵製直繰式ではあるが、矢張り繭の解舒が悪いから三口繰以上は使ひ得ないし、煮繰分業であるが、一釜の繰目は七十匁乃至七十五匁の間を出でない。織度は皆十四中「デニール」である。唯一つ毛色の變つたのが前記恒興德絲廠で、これは民國十三年青島絲廠の繰絲法を模倣して設計したもので、當時どんなものが出来るかと興味を以て見られたが、青島絲廠に従事せる大工や鍛冶工を引張つて來て、曲りなりにも日本式の體を爲した。固より之を青島絲廠に對しては兒戲に等しいものであるにしても、將來此種工場が弗々出來て、行く／＼は相當見るべきものとなるのではあるまいか。

他方青州に於ける德昌絲廠も亦日本式工場である。これは省政府が斯業獎勵の目的を以て青州に勸業場を設立して養蠶及製絲の二部を置き、後者の製絲部には繰絲器械を本邦より購入し、邦人によつて据付られた六十釜の工場で、小型の汽罐や揚返場など建物及設備は相當に整つて居る。其の開辦費一萬八千元を要したと聞くが、之はお役人の仕事であつたから、思はしくなく遂に民國十三年を限りて製絲部は廢止となつた。その跡を家賃年千二百円で借受けて經營せるものである。是等支那人工場の生絲は皆上海式の結束法を施し木箱に收められて青島から上海市場に送られて居る。其の送先は山東幫(山東商人)の經營する絲棧である。この問屋には恒興公、恒興德及益豐長等があつて孰れも皆芝罘商人の經營に係り、黃繭絲柞蠶絲及繭紬等は此

の手を経て商館に賣込まれて居る。就中最大なるは恒興公で、山東絲は殆ど此の一手販賣と言ふも差支ない。

二一〇 生絲の生産費

續いて製絲經濟方面を窺ふに、先づ其の金融狀況に就いて通貨は繭の取引の項に述べた通り當十文の銅貨、銅元紙幣、大洋紙幣及銀元等が流通し、就中銅元紙幣が最も重きを爲して居るのは銅貨が一包一萬箇入(約三十元)重量百二十五斤といふ重さで、其の移動に運賃を多く要するからである。此の銅元紙幣は各地に於ける錢莊が銘々發行するものに係り、其の發行並發行額に關しては所在の商務公會が之を許否することになつて居るが、人的信用に基礎を置く此の制度は健全なものではない。同時に他省と同様にこの錢莊が製絲金融に對する主要なる機關を爲して居る、其の中心地たるは座繰絲の集散地たる周村であるが、此處の一般金融及金利等に就いては上海、濟南、青島及天津等の市場に支配されて居る。そこで生絲の生産費を検討するに固より之に就いては邦人と支那人經營の工場とでは職員の給料其他諸雜費に著しい相違があるし、また青島絲廠の如き優等絲の繰絲を目的とするものと、支那當業者の普通品に方針を置くものによつて生産費の多寡は違つて來る、そこで概略ながら周村の支那人工場、日華蠶絲の張店及青島絲廠の三者に就いて夫々生産費の見積を當つて見やう。

(イ)之に就いて先づ生産費の根柢を爲すものは生産量であるが、既述の通り二等繭繰絲を含みたる

年間の平均繰目周村工場は七十匁、張店絲廠五十五匁及青島絲廠五十匁と見られる。さすれば生絲百斤を製造するに周村工場は一日二六五釜、張店二九〇釜及青島絲廠三二〇釜を要する勘定となる。次に之を根據に一日一釜當りの經費に於て主なる項目を見やう。

(ロ)先づ工賃に於て周村工場の繰絲工は一日凡そ十五仙、之に半數に當る煮繭工其他の補助賃銀を五仙と見て、一釜當り二十仙を要し、同様煮繭分業による張店絲廠は一釜に付き繰絲工十八仙、補助工を七仙と看做して二十五仙となり、青島絲廠は索緒工を要せざるも賃銀は高率なれば一釜當り三十五仙を見なくてはなるまい。

(ハ)賄料に就いては青島絲廠は一人當り一日十四仙として一釜に付き一七五人分を見積れば一釜當り二十五仙を示し、張店及周村工場に於ては一釜當り三十仙になるであらう。

(ニ)燃料に於ては張店絲廠は其の運賃關係有利なれば、釜當り十仙と見られ、青島はその二割増として十二仙、周村工場は之より低廉なる供給を得べきも上海式の爲め消費量は日本式より遙に多く、釜當り十五仙と言はれて居る。

(ホ)金利に就いては春蠶一期に原料を擁する期間が長く先づ生絲賣却までに七箇月と看做し生絲一俵の原繭代千元に對し、邦人工場の金利一割二分、周村工場一割五分と見るべきであらう。

(ヘ)輸出諸掛は生絲の輸出税黃繭絲一擔に付海關稅七兩を始め運賃其他諸掛は百斤當り凡そ三十元を要して居る。

(ト)其他職員の俸給料、營繕費及保險料等の工場管理費に關しては月給の高い邦人の居る工場と支那人經營の工場とでは非常なる相違を示し、且又其の規模設備に於て兩者に霄壤の差があるを以て開港地にある青島絲廠は百斤當り一七〇元、張店は一二〇元及周村の支那人工場は前者の

半額を見積れば足るであらう。そこで是等各項を纏めると次の通りである。

生絲百斤當りの生産費の概算

	周村の絲廠	張店絲廠	青島絲廠
工賃	五三・〇〇	六〇・〇〇	一一二・〇〇元
賄料	七九・五〇	八七・〇〇	八〇・〇〇
燃料	三九・七五	二九・〇〇	三八・四〇
金利	八七・五〇	七〇・〇〇	七〇・〇〇
輸出諸掛	三〇・〇〇	三〇・〇〇	三〇・〇〇
工場の管理費	六〇・二五	一二四・〇〇	一七〇・〇〇
合計	三三〇・〇〇	四〇〇・〇〇	五〇〇・四〇

之に對して屑物の収入は市況の變動により著敷増減を來すが、最近生絲百斤當り五十元見當である。

一一一 足踏器械製絲業

山東省では製絲工場即ち絲廠のことを俗に鑛絲房クレンスワフアン又は框絲房と呼ぶが、器械工場に對抗して臨朐縣下には所謂小鑛絲房が集團して重きを爲して居ることは既述の通りである。此小鑛絲房は巨大なる枠を使ふ座繰絲(大繰絲)に對して出來た名稱であらう。これは二十釜乃至五十釜を

備へた工場組織の下に經營されて居るが、其の操業期間は長くて五箇月位のものであり、其の繰絲法には汽鏢も動力機もなく、本邦の所謂煙氣取と稱するものに類し、恰も其業態は本邦器械製絲業の初期に彷彿たるものがあつて、それだけ支那現狀の程度には至極適應せる事業と見られる。即ち此の工場は四壁のない軒下のやうな場所に繰釜八箇よりなる膳臺を幾列も平行に据えてある。各膳臺の装置は一列に八人分の足踏繰絲器械を備へ、再繰用の小枠を用ふるものもあれば、直繰式の大枠を使ふものもあり、絲枠の下には絲を乾燥する爲めに粘土で坑子を作り、之に少量の石炭を焚いて居る。それから膳臺といふのは粘土にて作り上げた坑道で、その一端には大きな焜爐を設け、此上に煮繭用として徑二三尺ある鐵鍋を据へて居る。次で繰釜として徑一尺五寸の鐵鍋を坑道の上に切込み、他端は煙突に通ずるといふ簡單なる装置である。繰絲機械は木製で三口繰ケンネル式を備へ十四デニールを目的の織度として居る。この作業は熟練なる職工が一人で、八人分の繰繭を煮繭し、配繭には見習工が當つて居る。各繰釜の繰湯温度は煮繭釜を離るゝ遠近によつて不同を來すから、この高低を一様ならしめる爲めに時々各繰釜の湯を相互に交換して居る。大體就業は一日十二時間とし、繰絲量は七十匁見當、結束法は十五括入百斤の上海式括造をやつて居る。従て他の器械製絲工場の生絲と同様に山東器械絲として、その裾物格に取扱はれて居るが一工場の生産年額は二三十俵に過ぎず、之に一々自己の商標を附して居るから上海市場に於ける山東絲の商標は百餘種の多きに達し居る。元來支那の製絲經營に於ては兎角外觀を装はむ爲め工場の固定に大部分を投じて往々失敗を招く事例に乏

しくないが、此の點小蠶絲の經營は現状に照らし合理的であらう。其の設備費など釜當り繰絲器械凡そ五元、同附屬器具三元と僅に八元見當に過ぎないし、建物の如きも納屋同然である。従て生絲百斤當の生産費は上海向賣込諸掛を入れて概算二百七十五元を示し、之に對する生皮孳量三十斤一斤六十仙替として十八元其他屑繭蛹等七元と見て凡そ二十五元の收入となり、之を差引生絲百斤二百五十元で足りて居る。故に相當有利な採算となるが、唯一つ製造高が二三千斤に過ない爲めに其の販賣の當否が直ちに事業の成敗に繫はる憾がある。

一一二 座繰製絲業

舊來山東省に於ける座繰絲は之を大蠶絲タケシメと唱へ、既述の鹽漬繭を挽けるもので、その原始的なる繰絲法は奇抜なる鹽漬法とまさに好一對を爲して居る。即ち繰棒は四角にして其の周圍は實に一丈八尺といふ偉大なものである。棒角の幅も亦た約一寸二三分といふ廣さであるから棒角の固着は勿論甚しい。此の大棒から繩を吊して足踏によつて、この巨大なる大棒を回轉せしめて三口繰を捲取らしめる、通例この繩三本を一車と呼んで居る。繩の幅は一寸二分、簡單な綾振による平綾である。この大棒に對し繰絲臺は粘土で立方形に作られて、其の中央に徑三尺深五寸の鐵製大鍋を据えてある。鍋の上には一隅に極く簡單な繳掛架を渡してある。この裝置は臺上に管を□形に立て繰條はその中央部を一捲してから、更に臺の横から出た一本の管を捲いて繰棒に通して居る。作業は二人掛りで、一人が煮繭索緒及焚火に當ると、他は足踏繰絲を

受持つて居る。煮繭索緒には大きな二本の竹箸と扇狀を爲せる竹製ホーク様のものを使ふが、兎も角織度に拘泥することなく二三十粒を付けて巨大の棒が廻轉するから繰上げの速度は頗る早く一日に三四百匁は挽ける、同時に生絲量に就いては原繭の良否により繰歩七絲乃至八絲の間にある。燃料は石炭又は薪を用ひ、一日一臺の消費量は石炭六〇斤、一斤銅貨二枚替として一日に三十四仙を要し、薪ならば一日七十斤を消費し凡そ四十仙に當る。續いて座繰絲百斤當の生産費を見積るに大體左記のやうである。

山東座繰絲の收支計算

繭の鹽漬費	一八・四〇元	生繭千三百斤の三分の二を鹽漬にするものとして之に要する鹽量二一五斤、一千六百文替
工賃	三四・三〇	繰絲量四百匁、一日四十臺八十人分一人三吊文替
賄料	三四・三〇	同上八十人一日一人三吊文替
燃料	一六・〇〇	石炭消費量二千四百斤、百斤四吊文替
小計	一〇三・〇〇	
運賃	四・〇〇	萊蕪より周村送一塊(十封度)三十仙替
税金	七・三五	一塊に付百貨稅五十五仙替
賣込口錢	四・六五	賣込口錢一塊に付き三五仙替
小計	一六・〇〇	

原 繭 代	七〇二・〇〇	生繭千三百斤、百斤五四元替
製造及賣込費	一一九・〇〇	前項の合計
總 計	八二一・〇〇	座繰絲賣上原價

之を一塊(十封度建)に換算すると凡そ六十元に當り即ち座繰絲を六十元の相場で賣却すると生繭百八十五匁一斤を四吊四百文凡六十二仙で賣放つのと養蠶家にとつて同一の懐勘定となる譯であり、此處に於て例年周村に於ける新絲相場は繭の相場に密接なる關係を持つて居る。例へば一九二七年度の如き周村の機業は時局の爲め殆ど休業状態に近い不振を極めたる爲め、新絲の唱値は一塊五六十元に過なかつた。然るに繭價は五六吊文を唱へたことが即ち繭の出廻量が案外に豊富であつた一因である、反之機屋の景氣が良く座繰絲が活況を呈する時は繭價は當然之に釣上げられ且又座繰絲の生産が多く、詰り時勢遅れの座繰絲が今日衰へて、末だ相當に重きを爲すは、這般の事由によるものである。加へて之には相當資力ある農家が副業に繭市から安い下等繭を買入れて思惑を試みるものがあり、或は未だ繭市の開拓されない蒙陰、新泰地方の如きは座繰絲を主として居る。

一三三 座繰絲の再繰業

座繰絲を足踏の揚返器に掛けて轉繰する所謂再繰業は早くから周村青州の製絲家が副業として營める仕事である。即ちこれは座繰絲を買入れて之を附近の家庭に渡すと、婦人が内職に

之を小枠に捲取り織度の粗細によつて之を三種に仕譯け、その際大類を除いた後小枠の絲とそとの生じたる屑絲とを返却しその再繰量によつて賃銀を受取る仕組である、次いで小枠の絲は枠周四尺九寸五分の揚返器に掛け、次いで上海式の結束法を施して居る。製品は一等品一九乃至二四デニール、貳等品二五乃至三十デニール及參等品三十デニール以上の三等級に別たれ、百斤俵造各等の値開は三十兩前後である。小枠捲取量は一人一日三十匁見當で其際生ずる屑絲量一斤に付き凡そ五匁の割合であるといふ。斯様に織度の不齋なる座繰絲を加工することは賃銀の安い此の地方に於ては恰好なる仕事ではあるが肝心なる製品の賣行に就いては最近思はずからず四川省に於ける再繰業と同様に漸次その跡を絶たんとして居る。

一三四 座繰絲及屑物の取引

省内座繰絲の殆ど全部は周村市場に集り、其の一半は此處の機屋で消費され、他半は上海市場に送られて歐洲並に印度向に輸出され一部は南京鎮江の機業地に消費されることもある。其の出廻年額は概算二千俵に達し、例年新絲は六月下旬に始まり翌年四月頃までに四、五日の各市日に取引されて居る。其の最も多量なるは周村附近に生産される查把絲ツバダシの五六百擔を始め萊蕪絲、新泰絲各三四百擔を主とし、更に蒙陰及青州方面からも出廻る。品質に於て新泰絲は細絲にして最も好く、查把絲之に次ぎ、萊蕪絲は粗絲である。周村には座繰絲を取扱ふ絲局又は絲店といふ問屋があつて其の主なるものを擧げると、萃峽祥、林大隆、福元水、和慶祥、萬祥、廣祥、德合翠、金翠

豊仁和、恒昇等拾數商を算し、周村一日平均の取引高は二百塊ツカと言はれて居る。この一塊は重量拾封度即ち七斤半にして、之を取引單位とし、相場も亦この拾封度建を用ひ、同期の新絲相場は大體一塊に付經絲原料たる新泰絲四十一元、查把絲五十二三元、及蒙陰絲三十六元を示し、緯絲用たる萊蕪絲は三十五元見當を唱へ、例年より著敷安値にあつた。それは織器三千臺を算し、一日生絲消費量三百塊に達する周村機業が時局の爲めに殆ど全休の態にあつたからである。

同時に屑物も亦周村を集散市場として多量に出廻はる。これは殆ど皆索子ソウジと呼ばれる熨斗絲で、萊蕪新泰方面より來る所謂大鑛索子と臨朐方面からの小鑛索子との二種がある。前者は前述座繰絲に於て竹箬を使つて索緒する際之に附着する生皮芋を廻しその中に揚繭及蛹襯等一切を孕ましたもので且つ鹽分を含む爲めに品質は良くない。生絲に對する此の屑物の生産割合は生絲と同額と言はれて居る。小鑛索子に至つては前者よりも品質優良である。

第四章 北支那蠶業の將來

一 山東省の産繭額

特色ある山東蠶絲業に就て之を生絲輸出額に徴するに、大正五六年頃の約三千擔に比較して十年後の昨今は四千擔見當を示し、左迄顯著なる發達と言ふを得ないが、之を内容に見て器械絲の輸出額が一千擔より最近三千五百擔に躍進を來したことは製絲業の面目一新せるを語るものである。そして此の事實は座繰絲の分野に器械絲が蠶食して終に前者にうち代れるを示すものなるが故に、今後更に器械絲の増産を期するには新に産繭額の増加に俟つ外はなく、これが將來に残された問題である。そこで先づ山東省の産繭額を窺ふには勿論正確なる統計や材料を得るに由はないが、試に大正十四年支那當局が發表した縣別産繭額は左表の如くである。

山東省各縣産繭額(生繭)

臨	胸	四〇、〇〇〇	荷	澤	二、一〇〇	廣	縹	五三〇
萊	蕪	一、二、〇〇〇	昌	樂	二、〇〇〇	鄆	城	五二九
博	山	一〇、〇〇〇	長	山	一、二、三〇	壽	張	五〇〇
新	泰	八、五〇〇	桓	臺	一、二、〇〇	安	邱	五〇〇
平	遠	八、〇〇〇	壽	光	一、二、〇〇	鄒	平	四六〇

蒙 陰	五、八五〇	淄 川	八五六	鉅 野	四三一
益 都	四、〇九三	濮 縣	八〇〇	騰 縣	四〇〇
費 縣	三、〇〇〇	汶 山	七〇〇	滋 陽	三六八
泰 安	三、〇〇〇	臨 沂	六五〇	濟 陽	三五〇
沂 水	二、四六八	諸 城	五四二	單 縣	三五〇
計	一一二、六〇七擔				
其他五十縣計	三、六三五擔				
合 計	一一六、二四二擔				

上表各縣の産繭額に就いては固より支那側の調査で中には若干事實とかけ離れた數字もあるが、其の總額に於ては當業者の見所と大體一致して居る。即ち之を斯界の權威たる鈴木格三郎氏の意見に徴するも、生糸一千萬斤を若干も出でないであらうと言はれて居る。故に山東省の産繭額は之を生繭凡そ十一萬擔(百七十六萬貫と看做して大差あるまい。そして之を器械絲及座繰絲に換算すれば生絲産額は七千五百擔となる。この内器械生絲原料として各産繭地に於ける出廻量に就いては概略左表の通りである(生繭)

濰縣昌樂及濰溝地方	八〇〇擔
青州地方	八、〇〇〇
臨朐地方	三〇、〇〇〇
周村長山及張店地方	一六、〇〇〇

博山地方
萊蕪地方

二、二〇〇
八、〇〇〇
計 六五、〇〇〇擔

即ち上記地方は主として交通の便ある鐵道沿線地方にあつて今や大半製絲家の繭市場として開拓されて居る、之を總産繭額十一萬擔より前記出廻額六萬五千擔を差引きたる四萬五千擔が未だ座繰絲として消費さるゝ數量である。就中萊蕪縣から這入つて新泰、蒙陰、費縣、沂水、臨沂等江蘇省に接壤する地方と荷澤、矩野及單縣等河南省に接する地方に亘る産繭額は約三萬擔と全額の略ぼ三割を占め、しかも此地方は概ね山地で蠶業に好適して居るから將來この方面に繭市場を開拓し得る餘地がある。然しながら此地方は邊陲にあつて物騒なれば先づ以て交通機關の發達、政情の安定を前提として然る後その將來を期待されるであらう。さればそれよりも斯業の將來に關しては差當り鐵道沿線地帯に於ける蠶業の改良發達が必要である。

一一 蠶業教育及獎勵機關

蠶業の發達は言ふまでもなく蠶業教育の普及や當局の指導獎勵に俟たねばならぬが、山東省に於ても此種學校や機關は他省と同様清末時代からその設立を見たのであつた。然し是等機關は表看板に失して本來の目的に副はず、加ふるに最近政情の紛糾の爲め極度の不振に陥り、僅に清朝産業獎勵時代の遺物として存在して居るに過ぎないことは他省の例に洩れない。それ

にしても現存機關に就いて其の狀況を述べて見やう。

(一)省立農林專門學校 省城濟南の東關外にあつて光緒二十二年の創立に係り、當初農林學堂と稱し、後高等農林學堂と改め、民國となつて現名に改稱せられ、範を我が專門學校に採れるものなれば、程度も稍高く相當の規模を備へて居る。茲は農林及蠶の三科に分たれ、蠶業科には養蠶及製絲の二科を置き、一時邦人教習も居たことがある。然し其後打續く政變に經費は累年不足を告げて林業科は廢止するなど、其の不振に斯業の獎勵の如きは思も寄らぬ有様である。然しながら斯様な折柄でも最近南方江蘇省に於ける此種學校の如きは斯業獎勵の實際運動に活躍するやうになつたから之に刺戟されて將來或は面目を改めないものでもない。現在同校の學生數は百四十名位である。

(二)省立蠶種製造所 蠶業の中心地青州に民國七年設立せられた蠶業勸業場で、其の製絲部は前述の通り德昌福絲廠に貸與し、養蠶部は民國十三年度から省立蠶種製造所と改稱したのである。當初經費は省費年額五千元及北京政府より一千元の補助を得ることになつて居たが、最近に於ける實際の給費は千元にも満たないといふ。職員が二人實習生七八人で蠶種製造に當つて居る。此期掃立量は新元種二十四匁、諸柱十五匁、前期の蠶種製造高凡そ四千枚で、配布値段は一枚三十五仙といふが、現状にあつては此種機關があつてもなくても、斯業の改良發達には殆ど無關係であらう。

(三)模範蠶業講習所(濟南) 民國七年九月開設講習生一期三十名、經費は年額七千五百元といふ

名目である。

(四)省立女子蠶業學校(濟南) 民國二年の設立に係り、本科、豫科及補習科の三班からなり生徒數は一、二、五人、經費年額六千六百元と稱せらる。

三 當業者の蠶業獎勵

蠶業の改良普及は前述機關の現状を以てしては到底その將來を期待し難く、寧ろ此點に關しては當業者の活動に俟つことが適切である、現に製絲家が盛に購繭に努めたる結果沿線地帯は年々養蠶が盛になりつゝあるし、更に萊蕪地方に於ける南方系白繭が著しく増加を來たせるのも地方有力者が蠶種を移入して獎勵に努めたによることを看遁することが出来ない。而して未だ支那當業者が斯業の獎勵事業に着手するまでには氣運は動かぬが、一四二七年青島絲廠の手によつて試みた優良蠶種の配布は之に一石を投じたものとして將來に囑して興味ある點である。それは最近政情紛糾續きの折柄廣汎な地域に亘つての大量仕入は漸く困難を加ふるばかりでなく、一方在來種を以てしては工程を上げ難い事情よりして最早工場經營の内容に略ぼ充實を遂げた日華蠶絲として當然着手せねばならぬ事業に漸く手を初めた譯である。即ち此の計劃は青島絲廠の繩張とも言ふべき青州を中心とする沿線地帯に先づ養蠶公會なるものを組織し、その會員に優良蠶種を配布して巡廻教師二名を置き、これが指導に當らしめたのである。試に養蠶公會に就いて左記規則書を擧げて見やう。

山東養蠶公會章程

- 第一條 青島絲廠は山東省の産繭の改良増加を計り、中國養蠶家を保護する目的を以て養蠶公會を設置す
- 第二條 青島絲廠は前條の目的を達せしめる起見の下に本規章に賛成する養蠶家を以て公會會員と爲す
- 第三條 公會總局は青州に之を設け、公會を各所に設くものとす
- 第四條 青州に總局長一名を置き、各處に名譽會長一名を置き時に養蠶上連絡を取り以て目的を達到することを期す
- 第五條 青島絲廠は公會會員の希望に隨ひ、養蠶室の設計或は養蠶器具の代購並に將來實費を以て養蠶器具を貸與せんとす
- 第六條 青島絲廠は實費を以て優良蠶種を會員に分配す
- 第七條 凡そ公會に入る養蠶家は須らく青島絲廠の分配する所の蠶種を使用すべし
- 第八條 會員は收繭後始めて前條分配の蠶種費或は器具代購等を納付するものとす
- 第九條 若し會員にして蠶繭歉收の時は須らく總局に報告すべし總局よりは之れが實地調査を爲して、若し確實に係はる時は青島絲廠は或は蠶種費又は其他の實費の一部或は全部を免收す
- 第十條 青島絲廠は會員の希望に隨ひ養蠶時に於て養蠶教師を派遣して實地指導す、但し一切費用は收せず
- 第十一條 青島絲廠は優等の成績を得たる會員に對しては金員物品を贈與し以て之を褒賞す

第十二條 會員は須らく其の收成せる蠶繭の全部を以て青島絲廠に售賣すべし

第十三條 會員が青島絲廠に售る所の蠶繭は須らく市價に較べて昂貴とす

第十四條 若し會員にして第七條並に第十二條の規章に違反する時は其の公會々員の名義及資格を革除す

此の養蠶公會は其春村落の有力者や繭仲買入の手を経て急速の間に組織せられ蠶種は松本の一代雜種普及團及朝鮮産の國蠶日一號×支四號の交配種五千枚を配布し、其の一半は散種であつた。之に養蠶教師としては關東廳蠶業試驗場講習出身の華人二名を當らしめた。尤も之は飼育に關する指導といふよりは寧ろ最初の試みとしての調査であつた。言ふまでもなく此種事業が有終の好果を收めるには優良蠶種による繭を在來の繭よりも良い値段で買ふことが何よりも有効であるが、これは當業者以外の機關では出來ない仕事であると同時に青島絲廠の此の企劃が重きを爲す所以である。之に關して青島絲廠の配布蠶種に對する購繭方法は次のやうである。

- 一 玉繭を選出し之に對しては玉繭百匁に就き拾仙の割合にて買入れること。
- 二 上繭の買入値段は當日市場の買馴相場を以て仕切ること。
- 三 上繭を五種に品評し左記割合を以て獎勵金を與へること。

一 等	絲步十一匁五分以上	每斤三〇仙
二 等	同 十一匁 以上	同 二五仙
三 等	同 十匁五分以上	同 二〇仙

第四章 北支那蠶業の將來

四 等 同 十 匁 以上

同 一 五 仙

等 外

同 九 匁 五分 以下

同 一 〇 仙

四 各會員の荷口より見本を徴し後日之を以て品評會を開催すること

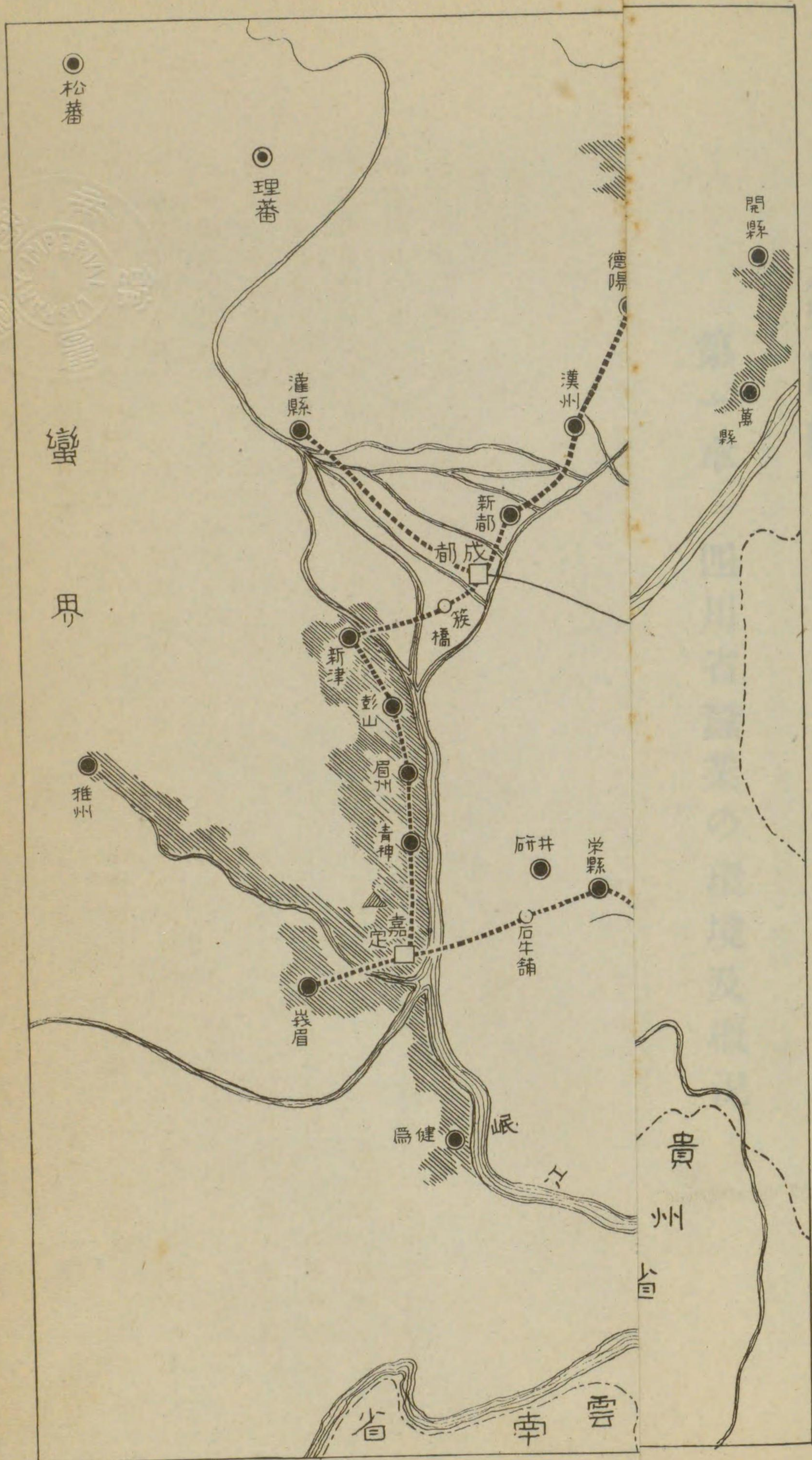
上記買入方法によつて同期會員養蠶家は喜色ありたるものゝ如く、その飼育成績に就いては勿論病蠶により著しく減收を來せるものもあつたが兎に角飼育法の原始的粗放的なるに拘らず、比較的好結果を示し、中には案外な優等繭を尠からず見受けた、加へて最近此の地方の保守的な養蠶家も漸く開化の氣運に向へる折柄なれば當事者としてこの試験的事業に就いてはその將來に聊か黎明の感を與へたことであらう。そして飼育の結果による缺點とも言ふべきは玉繭を生ずる歩合の著しく多いことゝ、其の飼育日數に於て在來種に比し壯蠶期が二日長い爲めに、それだけ給桑量を要し、桑葉潤澤の年柄には問題なきも暫々繰返さるゝ桑不足の場合に當つて壯蠶期二日分の桑量は養蠶家に相當の負擔となりこれが一つの難色であらう。

四 關東州の蠶業獎勵狀況

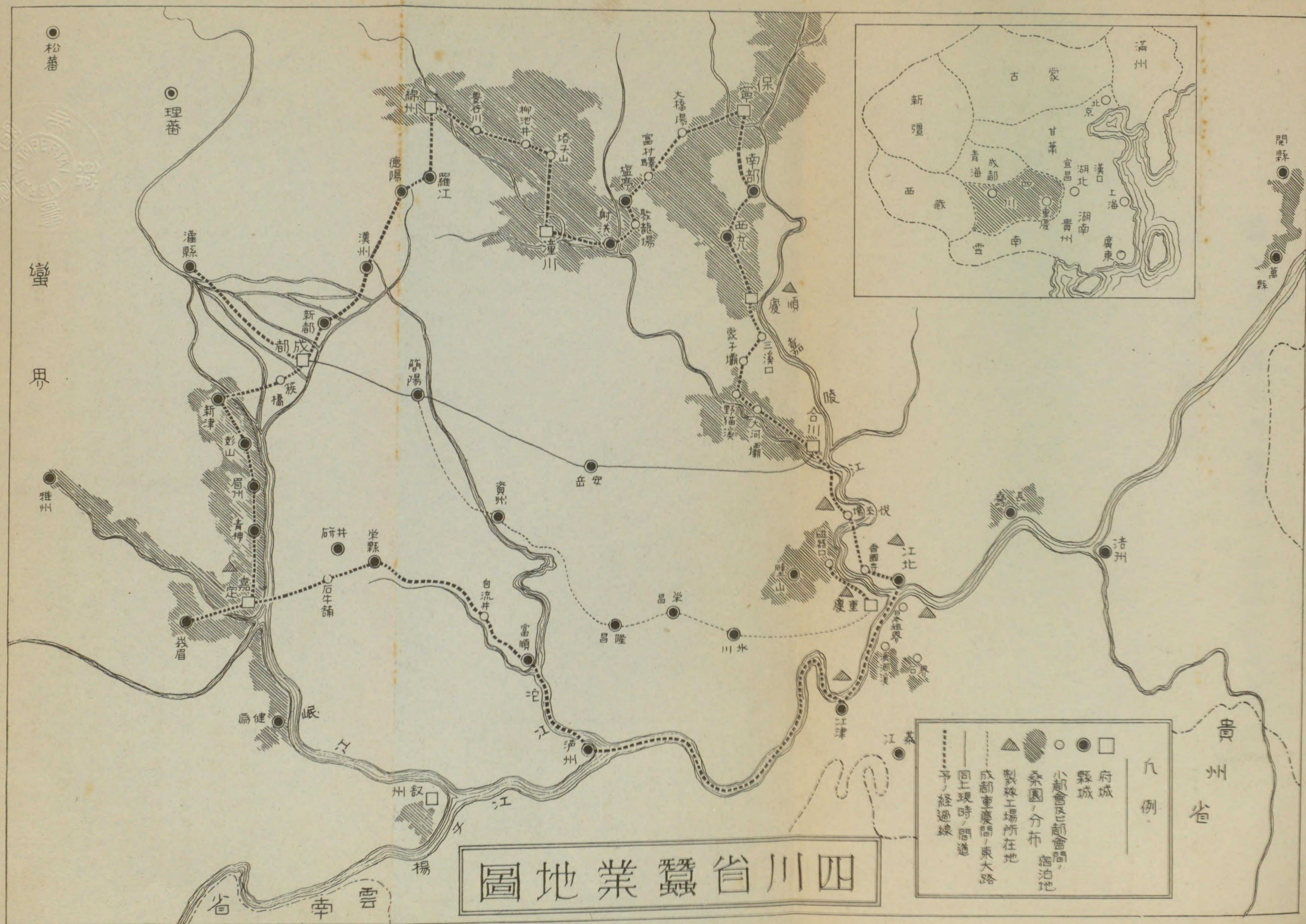
即ち山東蠶業改良の第一歩は優良蠶種の普及にあるが、更に將來上簇法を始め育蠶技術の改善や桑樹の増植を計ることではなくてはならぬ。之を養蠶の項に述べた通り蠶室は狹隘なる上に段飼を採らぬから飼育量は著しく極限されるし、桑葉買賣による葉價の騰落は斯業の健全なる發達を阻止することは言ふまでもない。然しながら現状に見て育蠶及栽桑の改良までに及

ぶには尙ほ相當な年月を経た後であらう、けれども最近山東省では一衣帯水の間にある關東州竝に滿洲に着手せる家蠶の獎勵事業は將來山東斯業に當然影響を齎らすべき關係にあるから、少しく其の概況を述べて本編を終るであらう。抑々關東廳當局が家蠶の獎勵に着手せるは大正二年からであるがこの計劃は所期の通りには進捗を見なかつた。殊に大正九年絲界の恐慌來には繭は貫當り二三圓に暴落し、農家は折角植付けた桑を引抜くといふ有様で何よりも土地に有力な製絲家のないことが、斯業の根柢ある發展を見ざる主因であつて、獎勵十年の業績と言へば大正十四年度に於て桑園反別一六二町歩、產繭三、六六七貫といふ程度に過ぎなかつた。

然しながら滿洲の氣候が育蠶に頗る好適するその天恵は之を他に見ざる所と爲し、勞力の低廉と相俟つて飼育が簡單で、生産費は僅少に足り、年三回に亘る大規模經營の可能なことや就中蠶種製造として理想的な條件を具備する點に見て大正十五年度より改めて新規の十年計劃を立て、今後の十年目には桑園七千町歩、產繭額八十萬貫に爲す意氣込である。此の新計劃の下に前述日華蠶絲株式會社と東亞勸業株式會社の合辦により有力なる滿洲蠶絲株式會社が新設せられ、同社は資本金百萬圓四分の一拂込を以て十五年度より旅順絲廠を經營し、一方資本の大部分は之を官有地二四〇町歩の拂込に投じて桑を植付け、折柄養蠶熱の勃興に其の七割は邦人に三割は支那人農家に貸與濟となつて居る。一方關東廳試驗場を中心として社團法人養蠶會なるものが設立せられ、蠶種の無償配布其他獎勵補助金を受けて新計劃の陣容は大に整つたから、斯業の將來は大に見るべきものがあらう。現に此の地方に於ける支那人農家の飼育狀況を見



るも、狹隘なる坑子の部屋には天井から高粱稈で作つた蠶棚を吊り、蠶籠には同様高粱稈を以て手極良く作られて居るし、其飼育法の如きも山東省のそれに比較して著しく進歩し、兎に角邦人の指導の下にあることなれば、將來その飼育法に面目を來すべきは言ふまでもない。そして滿洲は山東省蠶業にとつては出店たる關係にあるから滿洲蠶業の起つた曉に於て、其の新育蠶法が山東省蠶業に反響を及ぼすことは察するまでもない。要するに山東省を中心とする北支那の蠶絲業は豊富な生産要件を具備する點に見て將來甚だ有望たるには相違ないが、混亂せる支那の現状にあつては急激なる發達を期待し難く、先づ今後十年間に於て器械絲の輸出額は現在の三千五百擔より五千擔に増進を見る程度と推せられる。



四川蠶業地理圖

凡例

- 府城
- 縣城
- 小都會及巴蜀會同
- 桑園/分布 宿泊地
- ▲ 製絲工場所在地
- 成都重慶間/東大路
- 同上現時/間道
- 予/經過線

蠻界

貴州省

雲南省

● 松基

● 理蕃

雅州

涪州

江北

川水

昌隆

富順

石牛舖

高健

峨眉

新津

彭山

眉州

青神

嘉定

定

資州

岳安

資州

漢州

德陽

羅江

綿州

開縣

萬縣

滿州

古蒙

新疆

西藏

雲南

貴州

湖南

湖北

宜昌

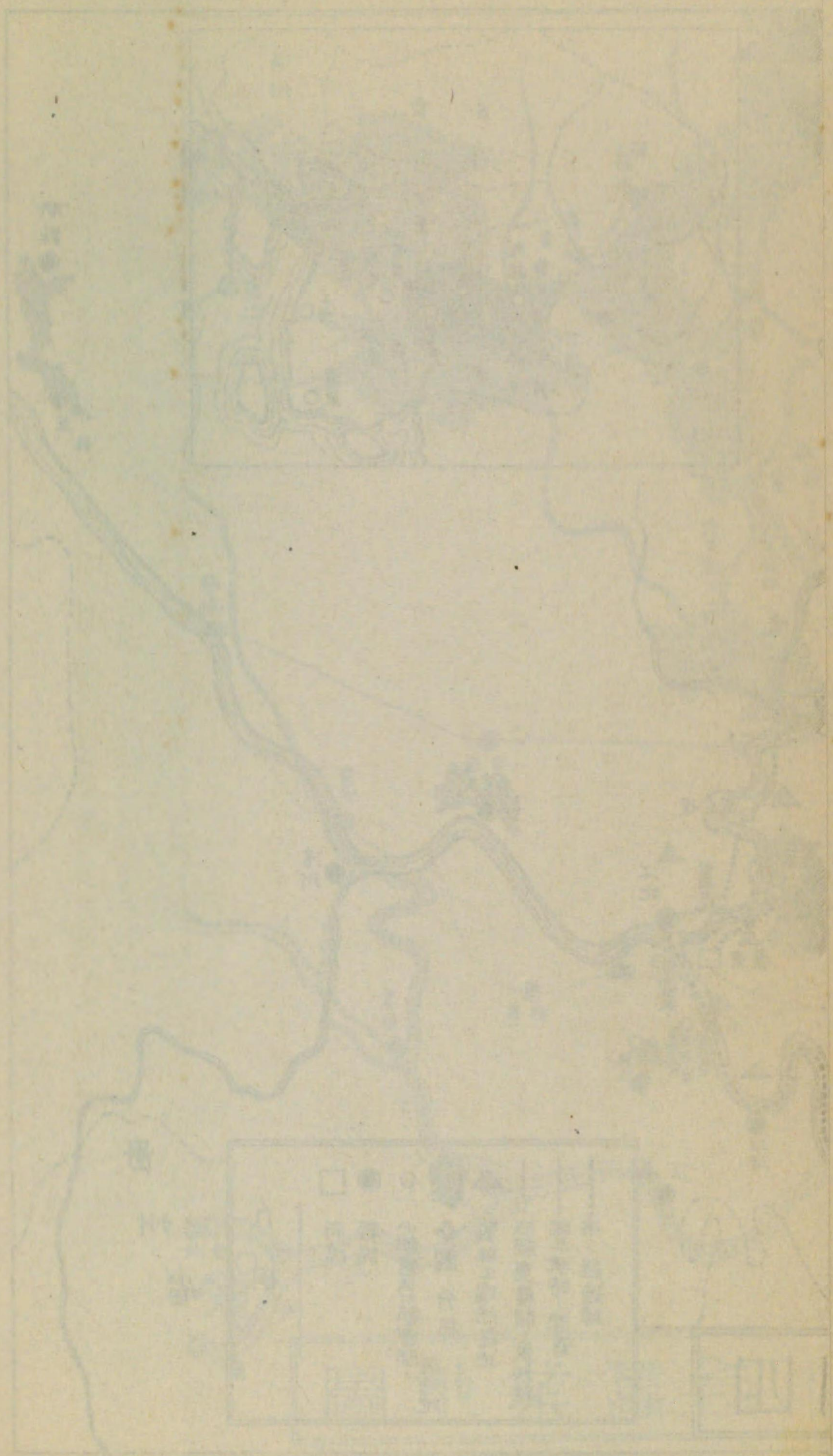
甘肅

重慶

上海

漢口

北京



第四編 四川省の蠶絲業

第一章 四川省蠶業の環境及概況

一 支那の最大省

悠々たる楊子江を溯ること八百哩、湖北省宜昌に至れば流域千里の曠野も盡きて、さしもの大江も高山峻岳に壓せられ所謂巴蜀三峽の險をなすに至るが、此の奔流激灘を越ゆるとそこが支那の最大省として人口多く物資の豊富を以て鳴る四川省である。その昔三國時代に彼の諸葛亮が益州今の成都に據つて天下三分の計を立てたる蜀の國として此方四塞の國と言はれ、地勢上自ら別個の天地を爲して居る。蓋し四川省は四邊皆峨々たる山脈に圍繞せられて居るから、南は所謂「天下の山は慎黔の間に粹る」といふ雲南貴州に接し、東は巴山山脈によつて兩湖と分たれて居る。それから北は白雪皚々たる雪山岷山の諸系を負ひ陝西甘肅に境し、西は山又山を越へて遙かに西藏高原に連つて居る。此間四川省は一種變つた高原地帯を形成して居るが、此の高原地帯の特徴とも言ふべきは、先づ第一に饅頭形をした餘り高くない山乃至丘が數限りもなく、連亘千里に起伏して居る。それから此の地帯が Red Basis と言つて、一面赤煉瓦のやうな

赤質土を地層とし、その赤土は脆弱であるから山嶺まで容易に鋤耕が加へられる。言はば此丘陵性高原地帯にあつて、鴉龍江、岷江、沱江及嘉陵江の四大河が北より南に流れて、本流たる楊子江に注ぎ、この四大河より四川なる省名が生れたと言はれて居るが、其の流るゝところ成都平野を除いては僅に猫額大の平地を見るのみである。

面積は方二十一萬八千餘哩といふから、我が新版圖を入れたる全面積二十五萬八千餘哩に比べて、稍小さい位の老大さである。だが西藏に接壤する西半部は人煙稀なる蠻界に屬して居るから、支那人の住む東半部は大體我が本島位のものであらう。然し乍ら此の東半部地方は何處まで行つても、耕して山嶺に至る耕地であつて、人口の稠密なることは、この問題に悩む本邦に敢て譲らないであらう。其の人口数は三千萬人と言ひ、或は六千萬人と稱し、固より判然たる數字を缺くが、その中間をとつて、約四千五百萬人といふが近い數字であらうとは前駐川英國總領事ホージー氏の言ふところである。自然斯る大省として省内各地の事情は必らずしも一樣ではない。現時の行政は五道百四十六縣に分けて居るが、通例四川人は通商經濟其他の關係から省内を四つに分けて川東、川西、川南及川北地方と呼ぶ慣はしである。よつて先づ四川蠶業の狀況を述ぶるには是等地方に就きその地方色を知悉して置くことが便利である。

一 川東地方。省内の東部嘉陵江及楊子江の各下流部に互る地帯で、重慶を中心として合川、涪州及萬縣等を主要都市として居る。圈内は殊に山岳地が多く、物産としては石炭、桐油位のものであるが、省内物資の集散地に位し、商業の最も盛なる地方である。四川省に於ける器械製絲

工場の大部分は此の地方に散在して居る。

一 川北地方。省内の北部嘉陵江とその支流たる渠江、涪江の一帶にして、順慶、潼川及保寧等の主要都市を包括して居る。米、麥其他農産物に富み、鹽、藥材等の産出があり、また支那人の珍重する木耳、銀耳の如き茸類は圈内廣元縣が産地として有名である。養蠶業の盛なることは省内第一にして、川東地方製絲家の主要なる購繭地である。

一 川西地方。省の西部、東西凡そ四十哩、南北九十哩に亘る坦々たる成都平野を占めて居る。岷山々系より出でたる岷江は灌縣に於て巧妙なる分水工事によつて十數條の支流に分たれ、この平野を灌漑し、四川の首府成都を始め十三縣を養ふて居る。米、麥、煙草、砂糖其他農作物の豊富なるは言ふまでもないが、蠶業は綿州地方を除いて一般に見るべきものなく、寧ろ機業地として生絲の需要地である。

一 川南地方。岷江、沱江の下流筋と楊子江の上流に互る嘉定、叙州及瀘州等の一帶で、一般物資の豊富なるは勿論、猪毛、白蠟其他の特産品に富み、地理上雲南省との通商關係が密接である。蠶業は嘉定を中心として、川北地方と並ぶ主要蠶業地であるが、その過半は今尙ほ座繰絲として、嘉定及成都機業の原料供給地として重きをなして居る。

更に岷江以西から西半部に入るに及んでは人口は漸次稀薄となり、未だ此地方には支那人の勢力は延びて居ない。例へば岷江を奥深く進んで行くと、そこに又理藩松蕃といふやうな別天地が展開して、羌なる人種が盤踞し、また打箭爐、懋功から西藏路にかけての巴塘、蠻子、それから叙

州より長江の奥地には苗族が多い。そして是等地方からは麝香藥材を始め金銀其他の鑛産物に富み、四川の富源は寧ろ此方面により多く藏せられて居る。詰り四川蠶業の環境は斯様に遠く海洋を離れたる別天地にあつて、宏大なる地積と夥多の人口に育まれ、上海及廣東地方と對立して支那の三大蠶業地と言ふべく、而かも斯業の將來は最も發展し得る可能性が多い状態にある。

一一 巴蜀三峽

而して私の四川旅行は大正十五年四月五日東京を出發して一路四川省へと急ぎ、重慶に着いたのは四月二十三日であつた。此處から直ちに嘉陵江に沿ふて北へ々と進み、遂に北端の大都會寧府城に至り、次いで西に折れ潼川綿州を経て、漸く五月十九日蜀の故都たる成都に入つた。それより岷江を下り、嘉定府城から峨眉山頂を極めて遂に西藏を望み、續て世界的産鹽地自流井に立寄り、瀘州から長江を下つて重慶に戻つたのが、六月十八日であつた。其間重慶争奪戦が始つて市民は戦禍に悩むこと約半箇月に及び、また五月のメーデーには成都の我が領事館が暴動の襲撃を受けたり、或又歸途富順瀘州間の地方戦など、四川は相變らず物騒であつたが、運よく身邊の危険にも遇はず、具さに主要蠶業地を遍歴するを得た。然し乍ら踏査日數五十日間は全く風餐露宿の旅で、その惨苦を滿喫せざるを得なかつた。而して入蜀の關門として通過すべき巴蜀三峽と秦蜀の棧道は二つながらその行路難に於て、或また雄大なる景勝に於て天下の偉觀で

ある。萬里の長城が支那の人工的代表物と見るなれば後の兩者は正に天の成せる傑作と言ふべきであらう。その昔隣省陝西の長安は所謂中原として群雄鹿を追ふた地であるが、三國時代に諸葛亮は暫々四川から大兵を動かして長安を窺つた。其頃よりして成都より長安に至る所謂蜀道秦棧は天下の大道として拓け、殊に蜀棧は四間幅の石鋪道にして、山若くは丘の峯を傳ふて一名雲棧と呼ばれ、脚下に白雲の懸れるを見るのが即ち雲棧の特徴である。然し最近數年來この名だたる大道も土匪横行して、殆ど人も通はぬ山路になつて終ひ、勢ひ楊子江を溯る重慶航路は現在唯一の交通路である。

然し湖北省宜昌より重慶に至る三五四哩の間、長江は高山俊岳の間を縫ふこと絲條の如く、絶壁相迫つて峽を爲し、水急湍奔流して灘となり、奇勝絶景、舟行の難、共に言語に絶するの概がある。何しろ重慶に於て江幅約六百碼の長江は流るに従つて江身漸次狭まり、其の最狭牛口灘は僅に百六十碼に過ぎない。加へて江水は季節により冬季水源地の氷結と、夏の雨季に於て増減の差甚しく重慶の水標は通例五十呎以上に及び最高記録は一〇八呎に達し、殊に峡中に於ける増減は二百呎以上の差を生ずる有様で、水勢の狂奔と舟行の難は察するまでもない。そこで峡中とは宜昌峡から始つて風箱峡(一名瞿唐峡)に終る約百二十哩の間を指し、宜昌峡、巫山峡及風箱峡を以つて所謂巴蜀三峽と稱し、奇岩絶壁と渦返る激流に天下の偉觀は此の間に粹つて居る。而して舟行の難關は峽よりも寧ろ灘である。灘とは短距離の間、兩岸の巨岩迫つて、急かに水路を狭窄し、或は河床の巨岩突出によつて生じ、奔流は矢の如くその急湍は瀑布を爲して、兩岸に沿ふ逆

流との間に大小無数の渦を生し、見るからに心膽を寒からしめるものがある。江中の灘は大小百餘を算へ、其の形成原因によりて各特性を異にし、増水期に險なるあり、減水期に惡なるありて變化は一樣ではないが、就中狂暴を逞する險灘は有名なる新灘を始め洩灘、崆嶺灘及牛口灘等である。汽船は灘に當つては、先づ逆流を利用して溯り、最後に全速力を擧げて急湍瀑布に突進し漸くにして灘を抜くが、此時奔流の抵抗強く、甚しきは一分間に僅に一寸を進み得るに過ぎない状況である。況して民船に至つては先づ積荷を卸してから、灘に群る數十人の苦力の手を借り太い竹繩を以て洩き上げなくてはならないが、此の險灘と戦ふ水夫の活動は悲壯である。

先づ巴蜀三峽は之を本邦に求むれば、信濃の天龍峽或は富士川に比すべきも、富士川の筏下しに快哉を叫ぶとは到底比較にならない。そこで單に三峽の絶勝を探るだけならば、宜昌萬縣間の往復によつて、その大觀を恣にすることが出来る。即ち船は宜昌を發つと直ちに宜昌峽に入り、身は早くも南畫中のものとなり、矗立せる天柱山や岷々たる黄牛の山姿は見るからに清澄な氣分を注る。船は進むに連れて佳景應接に遑なく、無義灘、獺洞灘に次いで、崆嶺の險灘を越えりと牛肝馬肺峽に入る。左岸絶壁を爲す岩石の下垂せる狀、肺肝に似たるより此の名がある。この峽中音に聞えた新灘に差懸ると、水は狂奔して物凄じ響を立て、右岸丘の上にはカヤブテンプラント氏の紀念碑が高く聳えて居る。この碑は約二個年間此處に居を構へて、朝夕險惡なる新灘の研究に没頭せるラ氏の遺業を無言に語るもので、歐米人には此種獻身的人物の尠くないことは感心せざるを得ない。峽中この新灘の先きは一名米倉峽とも言はれ、之に續く孔明の兵書

を藏したと傳へらるゝ兵書峽も倦かぬ眺めである。それから屈原の生誕地歸州や屈原三泡の老歸州を過ぎてから、峽間二十餘哩に亘る巫山峽に入ると、江面から所謂巫山十二峯が天を摩して聳立して居る、この突兀なる秀峯の船から見ゆるは數峯に過ぎないが、その奇姿秀麗は南畫の最大傑作物と言ふべきである。所謂巫山の夢の結ばれたのも無理からぬ次第であらう。

然しこう澤山絶勝佳景を見付けられては、最早觀賞神經も麻痺して來るが、巫山峽を出て、か洩床、洩枕の竝ぶ險灘たる洩灘も過ぎて、愈々瞿唐峽に至れば全く自然の偉大さに威壓されて終ふ。前面には數千尺の山脈が江を立塞ぎ、かすかに見ゆる峽門を指して進むと、左岸に相當立派な家や倉の立ち竝んで居る黛溪といふ村がある。此處は多年峽の激浪と戦つた水夫等が退隱して朝夕瞿唐峽の響を聞き乍ら餘生を樂しむ地である。この詩的な黛溪を曲ると、直ちに瞿唐峽に入るか、峽間は恰も千仞の谷底にあるやうで、薄暗い斷岸絶壁の間を進んで行くのである。瞿唐峽は峽中第一の絶景と言ふべく、この峽を出ると有名なる白帝城は右岸山腹に中空高く輝き、夔州府城に至つて所謂巴蜀三峽も終る。しかもこの雄大なる絶景は三國時代にこゝを背景として争覇を演じた史的場面で、蜀帝劉備が孫權の軍に大敗し、萬斛の恨を抱いて病没した永安宮を始め、八陣の圖、猛浪梯等の史跡に富んで居る。所謂朝に辭す白帝彩雲の間千里の江陵一日にして還るの詩は三峽の絶景を評した千古の名句たるを失はない。この詩句は形容の美なるよりも、寧ろ寫實の巧みなるを思ふものである。何となれば重慶宜昌間今日の汽船によるも溯江には尙四日を要するに、下航には僅に重慶萬縣間約十時間、萬縣から宜昌まで八時間にて足る

早さである。然しこの三峡に汽船が通ふに至つたのは、今から約二十年前英人リットル氏が慘
膽たる苦心研究の結果、辛じて蜀通號の溯航に成功したるを嚆矢とし、私が去る大正六年入蜀の
頃は新蜀通及蜀享の二隻のみであつた。然るに最近この航路は急激なる發達を遂げ、現在大小
六十八隻の汽船が通ふ盛況振りであり、大型汽船になると噸數約千噸、巨大なる煙突を備へて、十
五六節の速力を有つて居る。だが其の航行難には變りなく、船長は船橋を離れず、頗る鋭敏な
る舵機を操つて、寸刻の油斷を許さない。一步誤れば直ちに岩礁に衝突を免れず、遭難率は甚だ
多い。それから最近民船の數は減切り減つて終つたが、汽船の航行頻繁なる爲めに、その通過の
際民船は餘波を受けて顛覆し、所謂浪沈事件なる厄介な問題を惹起し易く、之が爲めに汽船は砲
撃に見舞れるなど、重慶航路は依然として物騒である。

三 嘉陵江を溯る

私共といつても私と轎子三人、挑夫一人及苦力一人の同勢であるが、此の一行で四月二十六日
重慶の朝天門を出た。早速番兵が荷物を検査するといふ。従前ならば外國人と告げれば無難
に通れたが、これは今日の時勢では一寸通用せぬから、おとなしく行李の検査を受ける。然し彼
等の目的も武器の携帯するなきやを調べるにあるのである。朝天門を出てから船で長江を下
り江北縣城の下端に上陸してから陸行は始まるのである。而して四川は高原の山國であるか
ら重慶地方に至つては、湖北境三峡方面のやうな峻岳高山の重疊はないが、かなり高い丘陵が幾

重にも際限なく縦横に連つて居る。この間を六尺幅位の石を敷いた舗道が或は高く、或は低く
走つて居る。従つて行路は變化に富みて倦くことがない。のみならず四邊の景色を眺めては
身支那にあるやうな心地がせぬ。木造白壁の民家や茅葺の家根の彼處此處に點在する有様か
ら、樹木の様子など酷く日本内地の風色に似て居る、路傍には水田が多く、これは低地より丘陵に
傳つて一層々々高くなり次ぎて灌漑の便なきに至つて小麥福豆其他が栽培され更に山頂に黃
豆を作るといふ具合で、ほとんど尺寸の地を餘すことなき耕地の開拓は一瞥を喫せざるを得な
い、全くどんな傾斜地でも雜草地を見るのはほとんど稀で、雜草地といへば墓地位のものである。
勤勞の民多くして物資足る四川が天府の富と稱せらるゝのも一つには此點にありと首肯され
る。

合川を指して進んだ陸行の第一日は重慶より六十華里を走つて午後二時頃「悅來場」に着くと、
之より先きは重疊せる山脈が控へて轎子も通はぬ險路であるから合川行の旅客は此處より民
船によつて嘉陵江を溯るのであるが、悅來場より二十里を上つて「土沱」からは山は特に迫つて峽
をなし巴蜀三峡にも似て厭かぬ眺めである。江岸の絶壁に瀧の懸れるあり、また二三箇所石炭の
の産出を見る。中にも「甘洞子」は相當大きい炭坑で、その直下には江流が走つて居るから石炭の
運搬には便利なること此上もない。斯くて五十里を溯江して「黃桷樹」に着いた。船を下ると岸
邊に並んで數戸竹を柱に圍んだ家がある。これが當夜の客舎であつた。然し重慶より合川行
の旅客は必らず此處で一泊せねばならぬから店前には食卓が多數並べられて景氣が良い。そ

れから夕刻岸邊には數十の兵隊が教練をやつて居た。これは兵隊といつても民團又は商團保衛團といつて土地の者が養ふ義勇兵とも見るべきものである。彼等は之によつて自らの力で土匪に備へ、町村の平和を守る譯で此の風潮は省内漸次盛んならんとして居る。戦亂に倦いた現状から若い支那の生るゝのも此邊からではあるまいかと思はれた。

二十七日。四川の旅は曉に鷄鳴を聞いて發ち、午後の三四時頃には宿をとるのがならはしである。私共も早曉顔も洗はずに宿を出て再び船で溯江した。江中の朝色は實にすがすがしい氣分を與へる。行くこと二時間許左岸の山壁に沿つて湯氣の立ちたる熱水が瀧の如く江中に注ぐを見る。之が「廟子」と呼ぶ温泉である。湯は無色炭酸泉のものゝ如く、人家が一戸あつて空しく郷人の浴するに過ぎない。更に溯つて左岸山壁に「二岩」の炭坑を眺めて午前九時頃「草街子」に着いた。此處の岸邊にも藁小屋が數軒軒を連ねて、頻りに船から下りる客を呼んで居る。店前には多數洗面器も竝べられ、早曉黃拘樹を發つた客は此處で朝食を餐るのである。草街子に小憩後再び溯江三十里、「沙溪廟」に至つて再び船を捨て、陸行、此邊より漸く桑樹の多きを見受け午後二時頃遙に合州府城を眺めて到着せるは午後四時頃であつた。合州は嘉陵江、涪江及渠江の會流點にあつて一名合川と呼ばれる大都市であるが、客棧の陰鬱なる言語同斷の有様であつた。

翌二十八日、合州より順慶に至るには通例嘉陵江に沿ふて北上するを順路とすれども、私は涪江流域の狀況を覗ふべく道を西方にとつて涪江に沿ふて進んだ。偶々夜來の豪雨に舗道の斷

てる箇所は泥濘甚しく轎子等の歩行に惱む一方ならず、この流域は水田一半を占め其他茶種、煙草、荳類を主として居る。また阿片の栽培も行はれけしは最早大半實を結んで僅に紅白の殘花が研精の名残を止めて居た。桑樹は良く繁茂して桑園を爲し或は水田の畦畔に甚だ多く、恰も水田は桑樹を垣とするの觀を呈して居る。先にも言つた通り四川の農民は土地に對する利用は殆んど遺漏するところがない。此の光景に接して私は本邦が土地狭くして將來桑園の増加は先の知れたものであると言はれて居るが、然しこの四川のやうに田の畦畔に桑を植えたとしたならば、我國繭産額の増加を逞うすることは未だ餘地のあるを思はしめた。それに此處では畦畔に植ゆるは桑樹のみではない、樹木としては樅を植え或は小麥、荳類、阿片等を作りて寸毫の餘地をも殘さないことは、勞銀の安いことにも據ることながら驚嘆に價することである。此日は合川より七十里の「大河橋」に泊つた。此處は涪江下流方面の重鎮たると共に主要なる蠶業の一中心地である。

明くれば四月二十九日拂曉、大河橋を去つて涪江に沿つて進む、涪江も此邊に來ると江水澄み支那では珍らしくも山水の美を併せて旅人を樂ましむるに足りる。附近には已に田植の濟めるを眺めながら正午までに四十里を行き「野溪口」に至つて一轉道を涪江に別れて山路を辿り二十里にして「蒙子橋」といふ人煙稀なる高原の寒村に宿つた。田植は早くも五月初旬に始まるがこの農繁期には纏足の婦人も苗代に鹽を浮べ、その中に据り込んで採苗を急いで居る。それから移植には豫め多量の堆肥を混ぜた泥土を作り、之を一握り宛握つては稻苗の根元を包

んで植付けて行き、畦畔から此田植男に稻苗及前記肥土を送るにも、鹽を浮べて運搬するなど仲々考へたものである。

三十日、蒙子橋より二郎場走馬場を経て「三溪口」に一泊、この行程百華里、しかもこの通路は正道を外れた田舎の一本道で僅かに晴天なりしを以て通過し得たのであつた。其の歩行難は言ふまでもないが、然しそれだけ四川の寒村僻地を覗き得た。恐らく外國人などで此邊を通過したものはないらしく、村の老翁がやつて来て、外國人なるや中國人なりや福音堂のものかなどと様々な質問を發する有様であるが、人氣は悪くはない。此の間の地勢は高原で依然無數の丘陵がはてしもなく起伏して雄大なる氣分をそよる、丘陵は山骨を現はして赤い水成岩の層が水平に幾層にも重つて居る。その昔四川は湖水であつたといふ説も肯定された。然し水成岩と言つてもポロ々とした脆い赤質土であるから山嶺まで鋤耕が加へられて居るのである。

五月一日、三溪口を例によつて早朝出發して一溪流に出て之に傳つて下ること四十里にして「李渡場」に達し、此處に於て漸く合川より順慶行の順路に出た。此の宿場の上端は嘉陵江に面して居る。渡江對岸に至つて再び崎嶇たる道を辿つて「青居街」に着くと、之より先きは約五華里の間陸路絶え、民船で江を溯り上岸陸行暫くして遙に順慶府城の塔が眼界に入つて來た。嘉陵江も此邊に來ては却て稍平野が展開して居る。斯くて午後六時府城に近づけば江水は清み漾々として府城の下を流れて居る。夕刻順慶に着いて滞在二日間多少の休養を得た。

順慶府城は川北地方に於ける最大都市である。街區は正しく路幅も割合に廣く、商業は殷盛で人口數萬と推せられる。就中北門に近き模範街といふは建築公司なるもの、手によつて市區改正が行はれた結果、街路は中央を約十尺幅の石の鋪道として兩端に柳の街樹を添え、其の左右兩側は亦た十尺幅のセメント道路でこんな山奥の四川に却つて近世式の道路が出來て居る。首府成都に倣つたものとのことである。

四 保寧府城

五月四日朝未き、深い霧に包まれた順慶府城を後にして西充縣城に向ふに、暫らくして山地となり、五尺幅の石鋪道が蜿蜒丘陵の峯を走つて居る。朝の九時半といふに四十五華里「廻龍場」に着いて、早くも其の日の一半路を進んだ。けれども聽て太陽に照付けられ暑さを訴ふる甚しく、一望起伏する丘陵は亦寸地を餘さず畑であるが、樹木としては處々の時に黃葛樹の大木が立つて居るに過ぎない。加へてこの大道は行人稀に、路傍鶏卵を賣る店さへなく、僅に燒餅シヤクセンに空腹を満たして四時「西充」に着いた。此處は縣城といふも小さな盆地にある淋しい町で、やはり米飯は求められなかつた。

習五日、西充より南部縣城に至る百四十華里を一日に踏破は寸度困難なれば二日行程として今朝は久振にゆつくりして朝九時に出發した。處が前日と違つて溪間をうねる田舎の細道を辿るに飯店とはなく、折柄風強くして轎の歩みを阻め、後には雨を混へ、極めて不快なる旅路であつた。三時半、山腹に人家數十戸固まれる「鼓樓場」に着いて宿つた。客棧は傾斜地であれば

珍らしくも床板を敷かれ、これまでのジメ々々した土間と違ひ氣持よく感じたが、思きや夜半蚤軍の襲來猛しく流石案内役の苦力も、南京蟲にはかまわぬが、蚤は跳ねて捉へられぬから終夜眠れなかつた」とこぼしたのに自分も苦笑せざるを得なかつた。

明けて六日、朝空は晴れて居た。朝九時に二十五華里を進みて山家の二軒茶屋ともいふべき處に一行は粥の煮えるまで憩ふた。此處からは道らしい道はなく、農夫に行手を聞いては畦道を辿ること四十華里にして漸く順慶から保寧に至る官道に合し、五時「南部縣城」に着いた。繁華な町ではあつたが夕刻から細雨至り、臭穢な客舎に疲勞の身を横へた。

七日、夜來の雨は已まなかつたが、けふは北端の大都保寧府城に着く日なれば八時雨を冒して發つた。舖石の大道ではあるが、永年修理を加へぬ爲めに、進むに従ひ泥濘の箇所は益々多く、到底轆などは用ひられなかつた。終日雨に打たれ道を滑り乍ら漸く五十華里を進み、二時「双龍場」に着いた。場は嘉陵江に臨み崖下の岸邊には穢い竹小屋が並び、全裸の民船曳夫の群が例によつて鴉片を吸つて居た。此處で晝食し、保寧へと急ぐに聽て開潤の平坦地となり、之をひた走り漸く錦屏山其他秀峯の並ぶ左岸に出て、その對岸に保寧府城を望むを得た。五時渡船して東門外の又新絲廠購繭所に入り、滞在二日僅に心身の休養を與へられた。

抑々保寧府城は順慶及重慶と並び嘉陵の三府と稱せられて居る。従て此處には英米佛人の如きも十數人を算へ、病院の素晴らしいものが出來て居るが、この保寧府城は景勝に富む氣持のよい町であつた。溪間を流るゝ嘉陵江は府城の北を衝いて、西に折れ、對岸の錦屏山其他の連峯

に遮られ、再折東流して府城の三面を繞つて居る。町の繁華はとり立てゝ言ふべき程ではないが、街區整然たる屋敷町が多く、支那の都市に似合はず非常に樹の多い、一見森の都とも言はまほしい町で、しかもこの樹木の一半は一抱へもある桑の老木がコンモリとした森を作つて居るとは聊か珍とするに足るであらう。府城は三國時代に張飛が封侯を受けた地で、街の中央にある張桓侯祠の地下にはこの豪傑が眠つて居る。祠は相當宏大で、門を入ると兩側には當時彼に従ふて出陣した保寧出身の武士が立竝んで居り、其奥には張飛の像が安置されてある。之れは生前彼が著用したといふ頭巾や陣羽織を被せてある。それから三國誌に出て來る張飛が馬上豊に長一丈八尺重千斤の矛を振つて敵軍を睥睨したといふところの尨大なる矛が其の傍に立てゝある。之は現代の人間では三四人掛りでなくては迎も動かせ相にもないが、その握り個所が滑かになつて居るところより見れば、張飛は之を使つたものらしく支那でも昔はこの様な豪力無雙の人間があつたものだらうと思はれた。

五月十日、重慶を發つて已に半月、奥地に深く踏み入つた感を催したが、未だ目的地成都への前途は遠い。然し保寧からは進路を成都に向けた譯で、道は流石に天下の大道である。沿道には栢樹が繁茂し、山は青くして蜀の棧道を思はせる。重慶から來た轎夫の一名は落伍して新に頑強なのが加はり、九十華里を進みて五時半「大橋場」に着いた。前年兵火に見まはれて今尙ほ空家が多く、廢址にも似た淋しさであつた。

十一日、五時出發、朝霧の中に栢樹の黒い森が見えて居た。大道ではあるが今日も行人は稀で

ある。小高い處に廢寺があつて、白髮の老翁が通行人があると、路傍に立つて聲朗かに勸進帳を讀み上げて居た。私が若干文を寄捨すると、轎夫の夫頭も亦た二百文を投じた。午後一時六十華里を突破して金峯寺に來ると稍賑かに村里らしくなつて來た。續て峠に「西蜀雄關」と書ける關所を抜けて、三時、富村驛に着いた。陽は未だ高かつたので久振りで鹽に行水をやるを得た。十二日、朝五時半富村驛を發つ。漸次下り坂にて愈々涪江の流域に近づいたのである。十一時「鹽亭縣城」に入つた。市日(逢場)にて町は熱鬧を極めて居た。五月九日の排日記念日にこんな山奥まで「勿忘國耻」のビラがあるのを見て驚いた。鹽亭からは直に潼川府城に至るのが順路ではあるが、私共一行は蠶絲業地たる射洪縣に出づべく、大道を外れて南に山又山を踰えて、この日は鹽亭射洪の縣境にある「聚龍場」といふ山間の僻村に宿つた。行程九十華里。

十三日六時宿を發ち、九時二十五華里の「復興場」を過ぎる。寒村の細い山道は漸く下り氣味となり、正午に溪底にある「馬家口」といふに着いた。戸數六七百戸、盆地は皆鹽場にして鹽井の櫓が幾十本となく立つて居る。櫓の大車に綱を巻き付けて深い井戸から汲み上げた鹽水は之を桶によつて貯水池に送つて居る。傍の廣場には細砂が敷かれ、之に池の鹽水を撒して天日乾燥を行ひ、次で其の細砂を桶の中に入れ、水を加へて得たる鹽の溶解液を大釜に入れ煮沸すると鹽の大結晶が見るまに出來る。それから爐には石炭を用ふるなど其の製鹽法は後に述べる有名な鹽地自流井のそれと趣を異にして居る。この馬家口から高い峠を踰へると緩かに流れる涪江の向ふ岸に沿ふて「射洪縣城」が見えた。三時渡船縣城に入る。重慶方面の製絲家も最早購繭期

に近付いて澤山縣城に入り込んで居た。この日の行程五十五華里。

翌十四日、けふは川北地方の大都潼川府城に入るといふに生憎の雨であつたが、道程は僅に六十華里なれば、十時雨を冒して出發した。涪江の左岸に沿ふて道は雨天なるも砂地にて、棉花の栽植多く、また蠶業地として桑樹の大木を夥しく認めた。「香山場」を過ぎ、とある茶店に粥をすゝりて進む程に驛站は漸次多く、府城の近付けるを思はしめた。斯くて涪江と中江河の會流點に高塔の聳える府城の展開を眺めて午後四時府城に入つたが、又新絲廠購繭所を尋ぬるに隨分手間取つた。

潼川は川北地方經濟の中心地として遙に保寧よりも繁華で、洋品店には上海から來た雜貨や卑酒など並べてある。それから遙々米國產鰯の罐詰が地方人に賞味され値段も安い。此點本邦雜貨や海産物の如き販路を擴張し得る餘地は多々ある。更に潼川は蠶業の本場ではあるが、産繭地はその北路に當り、城内特に言ふべきものはない。しかも滞在二日間は豪雨に見舞はれ、又新絲廠羅先生の歡待を受け、久振りで四川料理に舌鼓を打ち、酒杯の高梁酒に入れる粒狀の赤砂糖には風味を覺えた。

五 綿州より成都に入る

潼川滞在の折重慶商報を見て此の月十日頃我が成都總領事館が暴徒に襲撃された事件を知り、長い旅次に深い希望を寄せて居た目標に一沫の不安なきを得なかつた。そして潼川より一

路成都へは僅に三日路ではあるが、未だ私は川北蠶業地の踏査を遂げねばならぬのである。

五月十七日、拂曉霧の中を涪江の左岸に沿ふて進む、江畔は潤達十五華里にして江を渡船し、「新場」に着いて朝食した。新場よりは綿州行の大道を外れ、山を踰へ、又山を踰へて漸次山地に入るに鎮店なく、唯ある茶店に胡桃を求めて空腹を満たした。更に三時大きな峠を一つ越へて彼方に小高い丘の上に立つ「塔子山」の町を眺めた。行程八十華里、此處は繭市も間近に繭買人で賑つて居た。

十八日、朝六時、塔子山を發つ、空はよく晴れて居た。立派な石舗道を辿つて二十華里「柳池井」に着き、又新絲廠の繭買入出張所に憩ふこと半時、此處も産鹽地にて鹽井は最深のもの地下七百尺に達すといふ。道の良いのも鹽運搬の爲めでありと知れた。此處から綿州へは間道を取り、「長樂場」を過ぎ橋樓場に至つて晝食するに焼餅と豆腐のみ、之より益々山地に踏み入れれば人煙稀に、行けども行けども鎮店はなく、一望丘陵の起伏する高原は氣象頗る雄大、漸くにして大峠を登れば小さな廟が立ち、之に暫らく憩ふ。その頂上から廣々として涪江の平野を鳥瞰した、峠を急速度に下つて江畔に出る。水田は育々として小川には清流が走り、水車が廻つて居ること日本景色その儘で、重慶を發つて始めて廣々とした平野に出た。それは所謂成都盆地に近付けるからで、此日九十三華里を進みて五時「豊谷井」に宿つた。

十九日、豊谷井は亦た産鹽地にて賑ふ、朝九時、綿州に向ふに今までにならない暑さで初夏の氣分に満ちて居た。三十五里にして正午三つの川の會流にある「綿州城」に着いた。川西地方の大都だ

けに客棧は稍清潔、藥材商人が宿り込んで居た。綿州から北へ二日路すれば劍閣より愈々蜀の棧道に入る、此處は交通の衝に當つて居るが、數年來此方面の交通は匪賊の爲めに杜絶して居るにや、城内も活氣がなつた。

二十日、漸く天も白々する頃、新西門を出て、天下の大道を進む。これまで見なかつた一輪車が通ひ、噂々と流るゝ小川には竹で作つた巨大な灌溉用の水車が幾つも廻はつて居た。峠を踰へては進み「金山舖」を過ぎて九十華里、三時半「羅江縣城」に入つて宿る。二十人位の兵隊と合宿した。砂糖の産地であるが、此處も淋れて居た。

二十一日、曉四時、宿を發つも城門は未だ開かなかつた。四間幅の立派な石舗道を上ること十華里、名だたる「白馬關」に至る。此處は成都北路の要關で、頂上には栢樹の森々たる中に廟が立つ。遙か右手には數千尺はある雪山山脈が高峯を連ね、前方には一望に霞む成都平野が擴がつて居る。進むに従ひ平坦地となり、稍賑はへる「黃許鎮」を過ぎ、「德陽縣城」に入り、晝飯をとる、砂糖の取引多く羅江縣よりも賑はつて居た。續て大漢鎮、小漢鎮を過ぎるに、坦々たる大道と言ひ、驛站と言ひ、往時の繁盛を思はしむるものもあるも、最近數年來兵匪に荒されて一般に淋れて居た。路上に餓卒の横はるもの三四を算へたが、行人の之を顧みるものなく、甚しきは蟲の息で、之に蒼蠅の群がり、目をそむけしむるものがあつた。斯くて九十華里を行つて「漢州城」に入る。城内の繁華はこれまでに見ざる賑であつた。明日は愈々成都入の日なれば早立にと、西門外に宿を求むるに、宿舎は汚臭に満ち、蓬頭破衣の勞働者が床の藁に身を横へて鴉片に耽つて居た。長い

旅に慣れたものにも餘りの不潔さに他に宿舍を移したが、殆ど大同小異であつた。

二十二日。けふは愈々長い間、心に描いた蜀都入りの日である。天未だ暗き三時に燈を提げて宿を立つた。處々鎮店の木柵を開かして、三間幅の大道をひた走り、十一時「新都縣城」に着いた。自動車路の築造中に道はゴタ付いて居た。四邊の畑には水田に次で煙草の栽培が多い。更に二十華里天廻鎮に至つて旅装を洋服に改めて發つに此邊から人家は軒を連ねて居る。次で長さ二町位ある廻廊の如き大橋に出た。橋脚には石を用ひ、之に木板を渡して、その腐朽を防ぐ爲めに橋の上に長く漆塗の屋根を構へ、橋間には澤山金色の額が懸つた壯麗なる橋であつた。三時半護照を示して北門に入る。城内漆喰の舗道には人力車の往來織るが如き間を抜けて新西門の我が領事館へと急いだ。北門からの道のりは十華里にも餘り、漸くにして五時領事館へと辿りついた。重慶から二十七日目に始めて同胞に接し、領事并に館員の歡待を受け浴槽に三斗の垢を落した、その日の歡喜は茲に言ふまでもない。

六 蜀の故都

傳へ聞く成都是市街の華麗を以て支那の巴里と言はれ、また蜀の故都たる名に史的感想を抱いて遙に成都を訪ふものは、實際來て見て左程でもなきに、聊か失望を禁じ得ないであらう。周廻二十哩の城廂といふも、北京南京の雄大には比較にならないし、東大街（東大街）の繁華にしても、先づ湖南省長沙位のものであらう。それから街の中央にある蜀漢皇城の遺跡なども殆ど跡方がない

所謂錦官城外に至つては、曰く因縁を持つ古蹟は數限りないが、先づ見るべきは南門外から「萬里の行此處より始る」といふ萬里橋を渡つて、武侯祠に照烈帝と亟相諸葛亮を合祠せる廟に詣て往古を回想し得べく、更に進んで望江樓の眺望も悪くはない。轉じて南門外にある道教の總本山青羊宮や草堂寺も幽致の境たるを失はないが、然し是等の名勝古蹟は多分の感受性を持合せない限り、低迷顧茫去るに忍びざる底の感興を催すに足らない。それに昨年末督軍楊森の失脚後は各派の軍隊が入り込んで名利古寺はもとより、一般民家に押入つて、甚しきは却て家人を入口の張番に立たせるなど、全く主客顛倒の横暴を働き、之が爲めに今尙ほ、此は民屋に係り註兵を禁ず」と言つた貼札の家を隨所に見受ける有様で、市中に節制のない兵士がウヨウヨして居ることは視察者に甚だ不快の感を與へて居る。従つて成都に言ふべきは、史的成都よりも寧ろ支那として比較的新しい施設が行はれて居る點である。それは從來成都の市街も他都と同様に石の舗道であり、往來には轎子によつたものであるが、一昨年楊森はこの石を掘返して代ゆるに、漆喰と石灰を混じた粘土を以て坦々たる舗道に改め、その體裁はアスファルト路を見るやうで、之に共同便所を附設するなど、市街の面目一新せることは他都に見られない點である。この舗道の建設費は十尺平方に約十五元を要すと言はれ、楊森は之を兩側の各人家に負擔せしめたのである。中にはこの負擔に堪えずして自殺者を生じ、一時楊森に對する批難の聲は高かつたやうであるが、今日では表通りの道路は全部立派な舗道となり、上海から取寄せられた數千臺の東洋車（人力車）が心地良く走つて居る。これは楊森の残した大なる事績と言ふべく、現時の支那政治に

は徒らに私腹を肥す軍閥よりも、寧ろ此の種果斷な人物を必要とするであらう。而して彼れ楊森はこの春再び萬縣に乗り込んで、七月英國軍艦を砲撃し所謂萬縣事件を惹起し、勇名(？)を天下に揚げた男である。この路面の改設と共に最近成都には自動車が入入されて非常な人氣である。何しろ汽車を知らない人間が自動車を見せ付けられたのであるから、物見高い支那人として自動車を通れば見物人が雲集する有様で、暫々怪我人を生じたる爲めに昨今では城内に其の通行を禁ぜられて居る。然し成都灌縣間及成都新都間には馬路(馬路)が出来て乗合自動車が行復し更に此自動車道路は成都を中心として、各地で計劃されて居る。詰り民國革命の導火線を爲すまでに鐵道布設問題に騒いだ省民は建設に巨費を要する鐵道に見切りを付け、最近自動車に満足せんとするものゝ如くである。

成都に滞在の一日榑松領事の案内で、南門外の高等蠶絲講習所と省立農業專門學校を視察し、その晩は館内でこの兩校に教鞭をとる日本留學生出身者十二人の招待の宴が開かれた。先生連は駒場實科や農業大學出身者が多かつたが、例によつて支那人の巧なる日本語と、如才ない應待振り、杯の重なるに従つて年若い新歸朝者からは伊那節や安來節が出て来る有様で、異境に一夕の歡を盡した。然し是等の留學生出身者に感心すべきは、此種末節の點のみで所謂有用の材として活動するものゝ極めて稀なることは情けない状態である。兎に角成都には日本留學生出身者はその數四百餘人の多きに達し、彼等が一團となつて活動すれば相當の貢獻も出來やうが、利巧な奴は軍閥の走狗になる位が關の山で、多くは教員として安月給に甘じて居なくては

ならない。これには彼等の奮起が足らぬにもせよ、一面支那の實業程度が未だ彼等を歓迎するに至らないからで、一點同情に堪えないものがある。私が嘉定に華新絲廠を訪問して一職員と語るに、彼も亦佛國鐵道學校に留學せる身を以て、生絲検査係を努めて居た。

成都は未開市場として外人の營業は出來ない譯であるが、四川の首府たる關係から英佛兩國は早くより總領事館を置き、續いて我國も大正五年頃より開設するに至つた。然し成都在留の邦人數は領事及館員の二家族十人と理髮屋一人を加へた十一人である。其他留學生と手を携へて來た婦人が七八人あるが、是は日系華人とも稱すべく、眞の在留民は當時床屋一人である。然し彼とても清末新學勃興時代に成都にも邦人教習は三四十人に達したその頃隨いて來た男であるが、土地に馴染が出来て、取残されたといふ變つた居留民である。それから鄰邦支那と言つても、成都東京間の郵便往復日數は少くとも約二箇月を要するといふ點に於て、支那でも特殊な領事館である。加へて成都と言はず四川省に於ては所謂學匪なるものが、我が滿洲出兵問題といつては騒ぎ、太沽事件と聞いては悲憤慷慨し、排外思想は比較的熾烈である。これは元來四川には國民黨分子の多い關係からであり、延いては清末四川各地の學校に招聘せられた本邦教習が遠慮會釋もなく、受賣りの平等主義や革命主義等を吹き付けたことが一因を爲して居るものゝ如く、兎に角成都のやうな遠く三千里外に使用する領事も並大抵ではあるまい。序手に歐米人の在留數は英米人が百餘名、佛人が數十名を算するが、前者の大部分は華西大學の職員で占めて居る。この大學は成都南門外に約二十萬坪といふ宏大な地積に支那式の瓦屋根を配した煉

瓦造の學舎があちこちに立並んで、設備の堂々たるは一寸邦人には眞似の出来ない事業である。然し省民に最も評判の良いのは佛蘭西人で、佛國大軍醫といつたやうな大看板をかけた醫者が堂々たる門戸を構へて居る。これは佛人が善惡に拘らず支那人の氣嫌を損ぜずに應待して居るからで、一面支那人を毒するものは佛人とも見られないことはない。其他の外國人に至つては先づ甲乙なく、在川邦人も従前の教習を始め領事館員、會社員及商店員等のみであるから悪からう筈がなく、下流筋のやうに歐米人に比して一般低く評價されて居ないことは氣持が良い、就中日支合辨の又新絲廠の如きは四川省に於ける外人の事業として誇るに足るであらう。更に四川全體では外國人の數は六七百人に達して居る。此内一部商人を除いては皆傳道事業に奉仕する宣教師や醫師である。四川に限つたことではないが、是等の傳道者は支那内地到る所に散在し、大體佛人系の經營に依るものを天主堂カトリックと言ひ、英人系のものを耶蘇堂、米人系を福音堂といつて居るやうである、そして彼等が省内奥地の雅州や西藏路に入つて、神の道を説くに至つては、轉た敬虔の念に堪えないものがある。然しながら彼等が皆殉教者のやうな立派な人間のみではない。寧ろ其の品性の野卑下劣なる者の多い爲めに、彼等か支西洋人から痛く擯斥されて居ることは聊か皮肉である。殊に長江航路に従事する外國船からは乗船を拒絶されるなどの差別待遇を受け、自然彼等は我が日清汽船の定客となり、私は重慶までの航路に於て、随分多くの宣教師と乗合せたのであつた。在川獨逸人も亦對英敵愾心から同様日清を利用して居るが、船長の話では日清汽船としても、宣教師の乗船は餘り有難くないが、之を斷はるとこれまで排日

煽動をやらかしたり、その野卑なる米國系宣教師に至つては、故國の教會が罪人を引取つて、之を支那に送るなどの噂を聞き、兎に角在支宣教師には尊敬すべき人物もあらうが、また全く下らない人間が随分多いのである。それで彼等の生活振りは佛人系のものになると、一旦任地に就けば其處を墳墓の地として終身布教に當るが、英米人系のものには通例數年に一度位の休暇が與へられ、この期の悠々自適を樂しむべく、平素は極くきり詰めた生活をして小供に靴がなくならないと草鞋を穿せると言つたやうな節約振りであるらしい。然し省内主要都市には大抵巍然たる教會が建てられ、また之に堂々たる病院を附設して教民に仁術を施し、或は教會から響く鐘は時を報ずるなど、一般公衆に色々な便益を與へて居ることは看過すことの出来ぬ點である。

七 峨眉山詣で

六月一日。私の旅行は重慶から大迂回をやつて成都に入つたのであるが、通例眞直ぐに成都に行くには陸路重慶から西方に進み、沱江筋に出で、資州より成都の東大門に入るか、有名なる東大路東大路で、轎子に揺られて八日の旅である。本邦で言へば東海道五十三次に當り、從てこの驛站は人馬の往來織るが如く、夏の頃は日盛りの酷暑を避け鼻歌で夜の道中が出来た天下の大道ではあるが、最近數年來この道は榮昌隆昌縣一帶に土匪の大集團が蟠居して居る爲めに、人つ子一つ通はぬ有様で、昨今は重慶から嘉陵江傳ひに合川に至り、此處から安岳、岳池を経て資州に至る間道を探り、九日の間つぶさに支那旅行の慘苦を嘗めなくてはならない。之に反して成都か

らの歸路は大抵皆一葉の輕舟に岷江を下り、増水期には嘉定若くは叙府^叙に行けば汽船があるから、之を往路に較ぶれば世話はない。そして歸路に於て嘉定から約一萬尺の高峯峨眉山頂を極め遙か彼方に西藏を望まなくては折角成都に行つた甲斐がないであらう。

成都滞在八日間は殆ど異境の思を忘れた。領事達と館庭にテニスをやつたり、夜は四萬山の話に耽つた。六月一日朝、領事夫妻を始め幼い子女達や館員の方々に惜しき別を告げた。斯様な他境にあつては送らるゝ人よりも送る人々に同情なきを得ない。この日は九十五華里の坦道を進み、「双流縣城」を過ぎて「新津縣城」に宿る。此處は成都盆地の西端で、直く山際に在り、西門外からの大道は打箭爐^{タチヤンロ}の西藏路に通して居る。

六月二日朝、縣城近くに流るゝ岷江を乗合船に乗つて下る。江上の朝色爽かに、江口、彭山縣等を忽にして下り、午後三時には早くも眉州に着いて宿つた。茲に有名なる三蘇祠に訪ふに、祠堂は第十師司今部に占據せられて居つた、漸く師長に詞を通して祠内を見るを得た。祠宇は流石雅緻に富んで居た。

翌二日拂曉、眉州南門外から小舟で江を下る十華里、「民家渡」にて彭山縣發の客船に移つて下江した。岷江畔、山は遠のいて相當平野が展けて居る。十一時、兩岸急かに山迫り、所謂平羌峽を爲し峽間二十餘華里、兩崖の風光を賞で、それより「嘉定府城」に着いたのが、夜の八時であつた。府城は岷江と大渡河の會流點にあつて、川南地方の中心地として活氣横溢せることは首都成都を凌いで居る。三日嘉定に法雲寺、東坡讀書樓等を見物して、翌朝峨眉山へと向つた。

嘉定からこの峨眉詣には往復五日の旅であるが、先づ峨眉山といふところは、我が高野山の規模を極大したものと思へばよい。嘉定より八十華里峨眉縣城に至り、此處を出ると間もなく、洞天首歩など、書いた門を通つて山麓報國寺より一大靈域に入るが、域内は殆ど斧鉞が加へられないから、古柏の森々たると共に石の鋪道は灌木雜草を擁して、金頂に致る百三十華里の間、崢々たる溪流を渡り或は薄暗い古柏の間を抜けて、奥深く進み且登つて行くのであるが、十華里位を距てゝは寺があり全山の名刹古寺は百有餘を算して居る。私共登山の第一日は嘉定を發つて峨眉縣城の穢苦しい客棧に泊るを避け、強行百二十華里を歩いて報國寺、保寧寺及伏虎寺などの巨刹を経て、二合目位に當る大峨寺に着いた頃には、山間暮色は急かに迫つて、梟の鳴く聲を聞いた。是等の寺には皆二三百人を收容するに足る客室が設けられ、寺の和僧も寄捨を當に歡待大に努めて呉れた。この寺の一町位奥にある新開寺には例年夏季西洋人が避暑に来るそうである。翌朝この寺を發つて清流に架れる双飛橋を渡り、清音閣を過ぎる頃より道は漸く峻峻となり或は溪谷を超へて、漸次佳境に入るが、絶えず去來する濃霧の爲めに眺望は妨げられ勝であつた。中心寺を通り會佛寺(千佛寺)に晝飯を餐つた頃より峨眉名物の雨がやつて來てからは、ひたすら險しい石の階段を見つめて、喘ぎ／＼登るのみで漸く午後三時頃九龍洞に着いて泊つた、大峨寺より六十華里この寺も大した雄殿で、屋根には常に白霧がかゝつて草の生えて居るのも面白く見られた。此邊に來るともう大分寒いから、室内には大きな火鉢が据へられ、和僧の持つて來て呉れた澤山の炭火によつて、濡衣を干して居る間にも、霧が窓から吹き込んで來た。

斯く峨眉山は兎角白雲に包まれ勝で、晩秋の候でなくては、詩で有名な峨眉半輪の月などはめつたに見られない。然しこの山寺に爐を圍んでは、たとへ月はなくとも、一杯の酒……酒はななくとも肴位にはありつきたいものであつたが、何分にも此處は肉食を許さない靈域とて、和僧の饗應して呉れる料理も俗人の口には合はぬ豆腐や茸などで、三日餘に亘る精進には私も聊か當てられ氣味であつた。だが、九龍洞邊からは眞に深山幽谷の感に強く打たれる。此處から屏風のやうに聳え立つ諸峯の間を進み、長壽坂といふ急坂を攀つて遇仙寺も過ぎると一方萬年寺方面からの登山道と合さる頃よりして、道は漸く峰の上を傳ひ、益々險峻の度を増して来る。それから洗象池、白雲古寺、雷洞圩其他澤山の寺を通過して、目指す頂上へと着いたのは午後四時頃であつたが、唯白雲漢々たる中に金頂の大堂宇を見るのみであつた。この金頂正殿は昔から屢火災に遇つて、現存のものは約十年前の建立に係るが、一萬尺の頂上に於て、尙且つ大柱を以てせる結構な正殿や數百人を容るゝ二階建の大宿舍など規模の宏大なるは峨眉の總本山と言ふべく、參詣人は多くは此處に一夜を明して、有名なる佛燈佛光を拜するのである。佛燈とはこの山中に棲息する動物の群が夜間光を發するものであると言はれ、佛光は金頂の斷崖下、千仞の底を塞いで居る漢々たる白雲が太陽に照されて燦然たる大圓虹を生ずるものとのことであるが、二つながら、信心の足らぬにや私共には之を見る機會を得なかつた。それよりも私は續々やつて来る參詣人によつて本堂から讀經の聲、鐘の音の和して来るを聞きながら、爐邊に茶を啜り、足の疲れを慰するに餘念がなかつた。

明れば六月七日「太陽出來」の聲に起されて、殿外に出てたる時、峨眉山頂の大觀は未だに忘れ得ない絶景であつた。四邊は一望見渡す限り漢々たる雲海を距て、正殿の正面には遠く、高臺形をした瓦山を始め西藏に連る連山が僅に山麓を現はし、北には白雪皚々たる大雪山の連峯が長く走つて居り、左顧すれば雲南境の山々が、雲海に見ゆる島のやうに巖巖たる色を見せて居る。この壯嚴にして壯快なる自然の大觀に接して私は思はず快哉を叫んだのであつた。勿論高い山から見た眺望は何處でも壯觀なものではあるが、之を日本アルプスを始め本邦の登山にあつては、懣氣迫ると言つた感じはあるが、全く奥行の知れない壯嚴な感は斯様な深山幽谷の境に聳え立つ峨眉山頂でなくては味ふことの出来ぬものであらう。

下山には萬年寺の道をとつて、山麓報國寺に至る百三十華里を一日で下つたが、登る時とは違ひ、急坂を舗つめた石段を一つ宛拾つて下るには尠からず骨が折れた。この石面は通行人で滑かになつて居る上に、雨や霧に濡れて居るから、兎もすれば滑つていやと言ふ程腰を打ち、その都度足が竦む有様で、報國寺に着いた時には全く足が棒のやうになつて終つた。それにも拘はらず多數支那人の登山者には纏足婦人の群も尠くない。彼等は首から黄布の賽錢袋を吊して、杖にすがり、どんな廢寺にも叩頭九拜の禮を捧げて行くが、これも信仰の力である。それから足の弱いものには峨眉特有の強力があつて、それは言はば背負子に腰掛をつけたやうなもので、強力の頭の上方に人が乗り、一見、危かしい藝當ではあるが馴れたものである。尙一つ峨眉山に就いては山麓から山腹にかけて蠟樹の栽培が行はれ、四川特産の白蠟を産する。蠟樹は桑の木に似

て拳式に仕立られ、その枝條には五六月頃蠶蟲が放たれるのである。この蠶蟲を木の葉で、恰度ちまき餅のやうに包んでから、蠶樹の枝に二つ宛結んでかけて置く時は蟲は木より蠶質を採取する。之を採つて白蠟を製するのである。

八 産鹽地自流井

巴蜀三峽、蜀道雲棧、成都及峨眉山は四川省の代表物とも言ふべであるが、之れには更に世界的産鹽地として知られる自流井フウリョウを加へなくてはならない。しかも自流井は四川の富源を語る尤なるもので、此處から上る鹽稅だけでも年額一千萬元に達すると言はれて居る。抑々四川は太古一大鹽湖であつたとのことで、遠く海洋を離れた山國なるに拘らず井戸を掘つて鹽水を汲取り、之から得る鹽産額の莫大なことは天惠の一つである。省内自流井を始め、川北地方の射洪縣柳池井、豐谷井といふやうに産鹽地には井なる地名を持つたものが多い。陸路嘉定から自流井に近くと、高い槽が幾萬本となく林立して居るのを望むが、一つの槽は即ち井戸から鹽水を汲取る釣瓶である。井戸は直径五寸位、深さは數百尺から最深のものになると三千尺に達して居る之から鹽水を汲みとるには長さ十五尺位の太い竹筒で、これに棕梠繩を付けたものであるが、何しろ二三千尺の地下から汲上げるが故に、其装置は先づ一室内に恰度水車を横へたやうな巨大の廻轉車が設けられ、繩はこの車より槽に通じ、次いで井戸に直下して居る。そこで廻轉車には四頭の牛を四個所につけて車を廻轉せしめて、繩を捲取る譯である。私の見た井戸は深さ二千

四百尺にして車を廻して水を汲上げるに約十五分を要した、一回の竹筒に汲上げる鹽水の量は手桶一杯位のものであるが、鹽の濃度は高い。斯くて鹽水を釜に入れて煮沸する譯であるが、自流井には更に都合の良いことには、火井と言つて天然瓦斯が地下から噴出して製鹽に多大の便宜を與へて居る。この製鹽室には澤山の鐵鍋が竝列され、各鍋の下に延いてある瓦斯管からは盛に瓦斯が燃え立つて釜には見る間に白い結晶が現はれて来る。この天惠によつて自流井の繁榮は非常なもので、活氣のある點に於ては省内隨一であらう。

自流井を發つて鄧井關に宿るに行先の富順縣は生憎戰爭中にて「路不通」に其の戰線を避ける爲に田舎の山路を迂廻したが折悪しく雨天に泥濘は膝を没し、慘々の目に遭つて、漸く午后三時臨江溪といふ江村に着いて小舟に乗つて沱江を下つた。船は翌拂曉瀘州城に着いて居た。この日は端午節であつたが、折悪しく風雨烈しく、辛じて民船を傭ひ、午后三時半長江を下つた。途中江津縣に立寄つて重慶に戻つたのが六月十五日であつた。瀘州より重慶まで下江僅に二日に過ぎなかつた。

九 一般産業と蠶絲業

最近四川省に入る重慶航路は著しい發達を遂げ、外省との交通は漸く頻繁の度を加ふるに至つた。然し未だ宜昌から重慶に至るに數日を要し、廣大なる省内も亦た一線の鐵道すらない状態であるから、その産業は未だ農業を主本とした自給自足的經濟の域を脱しない。それは恰度

我が舊幕時代と等しく、農業國として主業を先づ米作に屈せざるを得ないが、この山國にあり乍ら米田の多いことは意外とするところである。水利の便ある溪間平低地は固より、傾斜地にあつても竹を骨とした巨大な水車や、足踏の龍骨車若くは二人振り、で策を振り、人力の及ぶ限り、荷も灌漑し得る土地は悉く之を米作に充て、宛然田毎の月を賞でるに相應しい情景が到る處に展開して居る。斯くして水の利かない傾斜地山腹に於て始めて麥粟其他雜糧を栽培する畑となり、桑樹も此處に間作するものが多い。のみならず耕地は山嶺に及んで、尙且つ黃豆、豌豆及馬鈴薯等を栽培し、土地の利用は殆ど遺漏する所がない。從て農作物の多産なるは言ふまでもなく、人口三千萬を養ひ得る所以である。また野菜類の如きも豊富にして多種多様なることは支那隨一で、中にも大頭菜カクトウサイの如きは廣く省外に需要されて居る。更に副業たる家畜業に於て豚は省民の口にする殆ど唯一の肉類として、養豚業の盛なることは其豚毛が各種ブラシ用として遠く歐米方面に供給され、省内主要輸出品の一たるに見ても察せられる。尙生活必需品に就いて先づ第一には鹽であるが、これは自流井を始め各地に鹽井なるものがあつて前述の如く鹽水を汲取り、之を煮沸すれば立派な鹽が得られる。全省產鹽額は莫大なもので、省内の需要を満たすに止らず、之を雲貴兩湖の隣省に移出して居る。砂糖も亦その餘剩を省外に移出する有様で、其他煙草、茶等省内廣く產出せざるの地なく、四川省は海產物を除いては殆ど食糧品を他に仰ぐの要がない狀況である。次に一般衣料に至つて絹布は勿論絹、麻布等の高級品の產出は多いが、唯一つ肝心なる木綿物に至つては缺如して居る。即ち棉花は遂寧縣を中心として涪江、沱江の沿

岸に栽培されて居るもの、僅に省内布團綿の需要を満たす位のもので、勢ひ綿絲及綿製品は四川最大輸入品として、輸入額の大半を占めて居る。

そこで四川貿易の一斑を窺ふに、先づ輸入品は綿絲の十五萬俵約五千萬兩を筆頭に、綿製品は前者の三割、約千五百萬兩其他海產物雜貨及石油等を五百萬兩と見て、總輸入額は大約七千萬兩と推せられる。之に對して輸出品の第一位を占むるものは蠶絲類の約一千萬兩に次いで、獸皮の五六百萬兩を始めとし、藥材、猪毛、桐油、棕梠及白蠟等を數へ、總輸出額は萬縣及重慶の海關統計に現れた數字では、千萬兩内外の輸入超過を示すも、隣省への移出額に於て鴉片、鹽及砂糖等統計に現れざる巨額の數字によつて、輸出入のバランスがとれて居る。

畢竟四川省の貿易は農産品を賣つて、綿絲布を買ふ關係にあるが、此間に介在して重要な地位を占むるものは、鴉片といふ特殊品である。何づれの頃よりか四川に鴉片の栽培が始つてから、従前四川は小麥の大生産地であつたが、鴉片の栽培が小麥と均しく、四川の如き傾斜面の砂土に適し且つその時期を同うすること、收益の甚だ大なる點よりして、小麥に代つて鴉片の生産は一時十七萬五千擔と言はれ、其内五萬五千擔、約千二百萬兩を移出し、四川の經濟状態は一つに鴉片によつて露つて居たのである。然るに清末鴉片の禁止令によつて四川はこの有力なる財源を失ふに至つたが爲めに、省政府は之に代ゆべきものを蠶絲業にありとして大いに振興を策する所があつた。けれども其後四川の政情は連年戰爭騒ぎで、産業の奨励どころでなく、軍閥は軍費の金穴を鴉片に求め、最近その專賣を行ふに至つてから鴉片の栽培は逆轉せんとする現状

である。

而してこの特殊品を除き四川産業の現状より見て蠶絲業ほど重要なものは一寸見當らない様である。蓋四川は古來天府と言はれ、事實また金銀其他地下に埋藏される鑛産物は豊富には相違ないが、然し此種資源は到底近き將來に開發さるゝ道なき今日に於て、世に其富源を稱せらるゝ所以のものは畢竟省内の生産物が夥多の人口を養ひ、一省として自給自足し得らるゝと共に、各農家も亦他より仰ぐことなく自ら耕して生活し得らるゝ點を指すに外ならない、そしてこれは一面には從來交通不便にして外省と隔け離れたる環境に負ふべきものである。然し乍ら産業發達の過程より見て、この自給自足の状態が永續するものとは考へられない。現に前年川北地方の旱魃、戰亂による物資の停滯等により米の供給は不足を告げ、爲めに米價の暴騰を來し、一時的にもせよ下流筋より米の移入を見たるが如きはその一例である。斯くて將來交通機關の發達に伴ひ、漸次産業の面目を一新するの時、今日の自給自足の状態に動搖を來すべきは明かである。斯る場合農民經濟は何によつて收入を計るべきかと言へば、差當つては蠶業に倚るの外なく四川省産業上に於ける蠶業の地位は甚だ重要と言ふべきで、農民の斯業に對する意氣込も自ら旺盛なるものゝ如く見られた。

一〇 四川蠶絲業の地位

然らば先づ四川省に於ける生絲の産額は若干なるか、之に就いて極く大まかな判断を下すと、

三萬五千擔を算へ、大體江蘇省の産額と略ぼ伯仲するものゝ如くである。然しこの想像を逞うせねばならぬ四川絲産額の推算は後廻しにして、茲に世界的商品としての生絲に關係を持つ四川絲の輸出數量に就いて見るならば、年により相違はあるが、先づ器械絲と見るべきもの六千五百擔、座繰返絲千五百擔及座繰絲七千擔を加へて、その輸出年額凡そ一萬五千擔と見て大過なかるべく、此内後者の座繰絲は主として印度向に供給されて居る。之を支那の總體で對比するに最近支那絲の總輸出額は大約十三萬擔の概算を採るべく且つその將來は上海廣東及黃繭絲地方の三者鼎立の勢を以て並進するものと見られる。而して四川蠶業は後者黃繭絲の過半を占めその首班にありと言ふべきで、今其の輸出量の詳細に就き、重慶及萬縣海關に據る最近十年間の統計を示すと左表の如くである。

種類	大正五年		六年		七年		八年		九年		十年		十一年		十二年		十三年	
	重	縣	重	縣	重	縣	重	縣	重	縣	重	縣	重	縣	重	縣	重	縣
白繭座繰絲	三	慶	五	慶	七	慶	四	慶	九	慶	三	慶	一	慶	一	慶	二	慶
白繭再繰絲	一	慶	三	慶	二	慶	七	慶	三	慶	三	慶	一	慶	一	慶	一	慶
白繭器械絲	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶
黃繭座繰絲	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶	一	慶
合計	四	慶	八	慶	一〇	慶	一四	慶	一六	慶	一七	慶	一七	慶	一七	慶	一七	慶

黄繭再繰絲	重慶		合 計	（雲南省騰越黄繭）	
	縣	重慶		座繰輸出額	座繰輸出額
重慶	一、〇四六	一、二二一	八四九	八五三	九三八
縣	—	三	三	八	一七
黄繭器械絲	二、三三八	三、四三四	二、八三二	二、九五五	二、六九八
重慶	—	一八	一八	一八	五
縣	—	—	—	—	—
合 計	八、七七八	一〇、〇六五	二、五七五	二、五三三	六、二二六
（雲南省騰越黄繭）	一、四四五	一、八三三	三、一八三	三、八四六	二、五七六
座繰輸出額	—	—	—	—	—
座繰輸出額	—	—	—	—	—

上表合計以外の數字に於て嘉定地方製絲工場の生絲は郵便局の手を経て、直接上海に郵送するものあり、また川南地方の産絲は雲南省に移出されるもの尠からず、是等は騰越より海外に輸出されて居る。此種の數量を考慮に入れて四川絲の輸出額は前記一萬五千擔と推算したる次第である。且又上表に見るも白繭絲の輸出量は殆ど言ふに足らぬ數量で、黄繭絲は全額の八割を占め、四川省は之を黄繭絲の産地と言つて差支ないのである。次いで絲質の點に於ては獨特なる廣東絲や最上級品の上海絲は特殊品として日本絲とは稍縁遠い關係にあるが、四川器械絲はその一半は日本式繰絲法により、絲質も亦之に接近して居る點に於て、將來その増産は多少共本邦斯業に深き關係を持つべきことは聊か注目すべ問題である。

一一 斯業の生産要件

鼎立の勢とは言ふもの、現在四川蠶絲業はその數量に於ては廣東及上海地方の二者よりも遙に低位にあつて之を並べることが聊か當を失すかも知れない。けれども斯業の將來に想到

すれば、前二者が既に或る程度までの發達を遂げたるに比して、四川蠶業は其の將來に望を囑すべきものであり、差し當つて支那絲の輸出増加を豫期するところと言へば、先づ第一に四川省を擧ぐべきである。この點に於て之を廣東上海と並べて、支那の三大蠶業地と稱するに敢て不可はないであらう。試に今四川蠶業が如何なる生産要件に立脚するが故に、將來の發達を豫想さるべきかに就て左に養蠶乃至製絲企業上の得色を擧げて見よう。

一、養蠶業が全省を通じて普遍的に行はれ且つ栽桑に適する土地の廣汎なること
蠶業の密度は地方により厚薄あるも、省内廣汎なる範圍に互つて、栽桑育蠶の行はれて居るところとは則ち纏て發達すべき素地を擁するものと見るべきである。例へば之を北滿地方の如く育蠶に適する氣候と肥沃なる無限の曠野があるにしても、何等素地のない所に斯業を興すことは容易な業ではない。然るを四川省にあつては宏大なる地域に夥多の人口を擁し、其産業は前述の通り養蠶業のやうな副業を必要とせねばならぬ状態にあり、況して全面積の大半を占むる瘠瘦なる山腹、傾斜地は必然的に栽桑地たるべき傾向を持つて居る。

一、繭の生産費を決定すべき勞力及桑の價格の低廉なること
言ふまでもなく養蠶業は勞銀の高い處に存在を許さない生業であるが、その低廉を稱せらるゝ支那にあつても、四川省は最も低位にある地方である。これは最近米價の昂騰によつて高くはなつて來たものゝ、未だ農業日傭人夫は一日四五百文（凡そ七仙）之に對する食費八百文（凡そ十三仙）を加へて一日僅に二十仙見當である。従て桑の値段も葉桑百斤平均一元八十仙内外を示